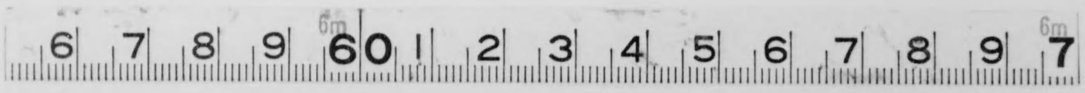
北口


6m
6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 7
6m

レ1/X-16

353-28

國譯密教

經軌

大正
11. 5. 18
内交

國譯密教經軌第四

目次

國譯菩提心義……塚本賢曉國譯……一
國譯十八契印……塚本賢曉國譯……九
國譯總釋陀羅尼義讚……塚本賢曉國譯……一九
國譯火供養儀軌……塚本賢曉國譯……二二
國譯建立曼荼羅護摩儀軌……塚本賢曉國譯……三〇
國譯蘇婆呼童子經……權田雷斧國譯……五九
國譯佛說大吉祥天女十二契一百八名無垢大乘經……市橋本賢國譯……一四九
國譯大聖天歡喜雙身毗那耶迦法……網代智海國譯……一五八
國譯底哩三昧耶不動尊聖者念誦祕密法……塚本賢曉國譯……一六二
國譯聖無動尊一字出生八大童子祕要法品……塚本賢曉國譯……二一一

國譯佛說大輪金剛總持陀羅尼經……塚本賢曉國譯……二一九
國譯大輪金剛修行悉地成就及供養法……塚本賢曉國譯……二四一
國譯慈氏菩薩略修愈誐念誦法……塚本賢曉國譯……二五五
國譯佛說觀彌勒菩薩上生兜率天經……岡田契昌國譯……三〇三
國譯佛說彌勒下生經一名彌勒當來成佛……岡田契昌國譯……三一五
國譯觀自在菩薩大悲智印周遍法界利益衆生熏眞如法 塚本賢曉國譯……三二七
國譯都表如意摩尼轉輪聖王次第念誦祕密最要略法…塚本賢曉國譯……三三三
國譯大雲輪請雨經……岡田契昌國譯……三四九
國譯仁王護國般若波羅蜜多經……塚本賢曉國譯……三七三
國譯大樂金剛不空眞實三昧耶經般若波羅蜜多理趣品 權田雷斧國譯……四二七
國譯大樂金剛不空眞實三昧耶經般若波羅蜜多理趣釋 權田雷斧國譯……四三九
國譯新集浴像儀軌……塚本賢曉國譯……四八七
國譯釋迦文尼佛金剛一乘修行儀軌法品……塚本賢曉國譯……四九三
國譯大妙金剛大甘露軍拏利焰鬘熾盛佛頂經……塚本賢曉國譯……五〇一
國譯尊勝佛頂修瑜伽法軌儀……塚本賢曉國譯……五一七
國譯大毗盧遮那佛眼修行儀軌……塚本賢曉國譯……五七七

國譯密教經軌第四目次 終

乾一、縮閏一、續藏第九套四、不空三藏の弟子潛進述本書は顯教の說なるも弘法大師請來の故に密教の扶助として傳ふ。

(一)第一名義を釋す。
(二)梵　梵語の意。
(三)依主釋　心が菩提によるを文法上にて顯はす。
(四)方　東西南北の方角。
(五)相違釋　菩提と心とは全く相違せりとの釋を全稱す。
(六)第二に體性を釋す。
(七)第三に一異を辨ず。

國譯菩提心義

菩提(ボダイ)の心、成佛(ゼウブツ)の本、發起の相は具さに衆經にあり、大事因緣(ダイジインネン)此に過ぐるはなし。正しく覺を修せんと欲はゞ、知らずんばあるべからず、見聞する所に隨つて略して其の相を辨ず、菩提心の義は五門を以て分別す。一は名義を釋し、二は躰性(タイシヤウ)を識り、三は一異を辨じ、四は相狀を明し、五は行願(ギヤウグワン)を述べん。

(一)初めに名義を釋すとは、(二)梵に菩提と云ふ、此に翻じて覺と名く、衆生の迷覆(メイフク)を名けて不覺となす。今善友に遇ひ、無相を開發して迷覆を省除す、覺を求むるの心を菩提心と名く。菩提を求むるの心を發すを菩提心と名く。(三)依主釋(イシユシヤク)なり。若し悟を覺と名け、迷を不覺となすは、譬へば迷人(四)方に依るが故に迷ふが如し、衆生も爾るのみ、覺に依るが故に迷ふ。若し覺を離るれば則ち不覺なし。猶ほ是れ之を言へば、菩提と心と二となす事を得ず、菩提心と心と(五)相違釋(ソウヰシヤク)なり。

(六)次に體性を釋すとは、義府に說くがごとし。

(七)三に一異を辨ずとは、心と菩提と性二あることなし。無二に由るが故に分別すべ

からず。これ理體無差別門に就くが故に。(二)華嚴に云はく、心の如く佛も亦た爾かなり。佛の如く衆生も然かなり、心と佛と衆生と是の三は差別なし。虚空藏經の第四に亦た云はく。世尊常に法の無盡を演説したまふ、有情と及び虚空と菩提心と佛法となり。若し進修起行願門に依らば、即ち妄心を發起し菩提を求むるが故に菩提心と名く。故に(三)起信に云はく、云何んが熏習して淨法を起して斷せざる。謂ゆる眞如の法に依るを以ての故に、能く(三)無明を熏習す。熏習の因緣力を以ての故に、則ち妄心をして生死の苦を厭ひ、(四)涅槃を樂求せしむ。妄心に厭求の因緣あるを以ての故に、即ち眞如に(五)熏習す。自ら己性を信じ、心の妄動にして前の境界なしと知つて遠離の法を修し、實の如く前の境界なしと知るを以ての故に。種々の方便隨順行を起し、不取不念なり、乃至久遠熏習力の故に。無明則ち滅す、無明滅するを以ての故に心起ることなし。心に起なきが故に境界隨て滅す。因緣俱に滅するを以ての故に心相皆盡く、涅槃を得て自然業を成ずと名く等、これ則ち妄を棄て眞を成し、妄心を發起して眞覺を起す事を求む、即ち(六)眞妄異となすなり。而るに實には眞を離れて妄なく、妄體即ち眞なり。不覺は即ち本覺なるを以ての故に是れ異にあらざるなり。

(一) 華嚴　華嚴經
(二) 起信　大乘起信論、馬鳴菩薩造眞諦譯。
(三) 無明　明の反對にして、不覺なり。煩惱なり。
(四) 涅槃　寂滅平等の眞理をいふ。
(五) 熏習　心内發動の力を云ふ。
(六) 眞妄　眞は眞如、覺性、妄は煩惱無明、不覺なり。

(二)四に相狀を明さば、發菩提心の相狀に二あり。一は行位の相を明し、二は功用の相を辨ず。行位相狀とは長耳三藏の云はく、初めの習種性の發心に三あり。一は假相發。二は輕想發。三は信想發。初に假相發とは三種力による。一は善友力、謂く(二)善知識。二は行力、謂く律儀を受く。三は法力、通別の二因なり。通は謂く(三)如來藏内熏の性、別は謂はく信等の五根なり。この三力に由て假りに菩提を求むるの想を起し、自利利他漸次に修習す。譬へば輕毛の倚着する所なきが如し、輕想發と名く。後漸々に修し信心澄淨にして(四)十住に入ることを得、信想發と名く。

起信論に云く、發心に二あり。一は(五)信成就發心。二は(六)解脫發心。三は(七)證發心。初に信成就發心とは、謂く(八)不定聚の衆生、熏習善根力あるが故に。業果報を信じて能く十善を起し、生死の苦を厭ひ、無上菩提を求めんと欲す。乃至一萬劫を經るといふ、信心成就せるが故に、諸佛菩薩教へて發心せしむ。或は大悲を以て能く自ら發心し、或は正法滅せんと欲するに因て、護法の因緣を以て能く自ら發心し十住に入る事を得。此れ則ち前きの信想發心に同じ。本業經に云く、是の信想菩薩は十千劫に於て十戒法を行して、當さに十信心に入り初住位に入るべし、即ち發心住なり。仁王經に云く、

(一) 第四に相狀を明す。
(二) 善知識　善事を以て衆生を勸めて向上を計る識者をいふ。
(三) 如來藏　佛性
(四) 十住　菩薩の修行位。
(五) 信成就　菩薩位の十位の初心なり。
(六) 解脫　菩薩位の十廻向の初心なり。
(七) 證發心　菩薩位の初地以上の位なり。
(八) 不定聚　十信の位にあるものをいふ。

習種性に十信あり、已に二乘の一切善地を超ゆ。起信に又云く。何等の心を發す、略說するに三あり。一は直心、正しく眞如の法を念ずるが故に。二は深心、樂ふて一切諸善行を集むるが故に。三は大悲心、一切衆生の苦を拔かんと欲するが故に。乃至云ふ菩薩是の心を發すが故に、則ち少分法身を見る事を得、法身を見るを以ての故に、其の願力に隨つて能く八種を現し衆生を利益す等。二は解脫發心とは、まさに知るべし轉た勝れたり、是の菩薩初正信より已來、第一(一)阿僧祇劫に於て、將さに滿さんと欲するを以ての故に、眞如法の中に於て深解現前す、修する所の離相等なり。三に證發心とは、淨心地より乃至菩薩の究竟地に至るまで何の境界をか證す、謂ゆる眞如なり。乃至云く、又是の菩薩の發心相とは、三種の心微細の相あり。一は眞心無分別の故に。二は方便心、自然に徧行して衆生を利益するが故に。三は業識心、微細に起滅するが故等なり。二は功用の相を辨せば。維摩經に云く、佛身を得て一切衆生の病を斷せんと欲はゝ、當さに(二)阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし。華嚴の七十八に云く。菩提心とは由ほ種子の如し、能く一切諸佛の法を生ずるが故に。菩提心とは由ほ良田の如し、能く衆生の(三)白淨法を長ずるが故に。菩提心とは由ほ大地の如し、能く一切諸

(一) 阿僧祇劫　阿僧祇は無數と譯し劫は時と譯す。

(二) 阿耨多羅云云　無上正等正覺と譯す。

(三) 白淨法　信心なり。

世間を持するが故に。菩提心とは由ほ淨水の如し、能く一切煩惱の垢を洗ふが故に。菩提心とは由ほ大風の如し、普く世間に於て所礙なきが故に。菩提心とは由ほ淨日の如し、普ねく一切諸の世間を照すが故に。菩提心とは由ほ明燈の如し、諸の白淨の法悉く圓滿なるが故に。菩提心とは由ほ盛月の如し、普ねく一切の安危處を見るが故に。菩提心とは由ほ大道の如し、普ねく大智城に入ることを得せしむるが故に。菩提心とは由ほ正濟の如し、其をして諸の邪法を離るゝ事を得しむるが故に。乃至云ふ善男子、若し阿耨多羅三藐三菩提心を發すものあらば、則ち已に無量の功德を出生し、普ねく能く一切智道を攝取す。善男子譬へば人ありて無畏藥を得れば、五恐怖を離る。何等を五となす。謂ゆる火燒くこと能はず、毒中たる事能はず、刀傷くる事能はず、水漂ふ事能はず、煙熏する事能はざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復た是の如し、一切智菩提心の藥を得れば、貪火燒かず、瞋毒中らず、惑刀傷けず、流にありて漂はず、諸の覺觀の煙熏害する事能はず、善男子譬へば人ありて解脫の藥を得、終に橫難なきが如し、菩薩摩訶薩亦復た是の如し、菩提心の解脫智藥を得れば、永く一切生死の橫難を離る。善男子譬へば人ありて

摩訶應伽藥を持すれば、毒蛇氣を聞て即ち皆遠く去るが如し。菩薩摩訶薩亦復た是の如し、菩提心の大應伽藥を持すれば、一切煩惱の諸惡毒蛇その氣を聞くもの悉く皆散滅す。

(二)第五に行願を明さば、(二)顯揚(クンニョウ)に云く、世俗發心とは、爲(いは)く智者の前に對して弘誓願を發し。乃至云く我れ今日より無上菩提心を發して、諸の有情を饒益(ニョウヤク)せんと欲ふが爲めの故に。今より已往、凡そ我が所修の(三)六波羅蜜(ラミツ)、皆無上菩提を證得せんが爲めの故に。我れ今諸の菩薩摩訶薩と和合出家す。願はくは證知したまへ。我は是れ菩薩なり。毗盧遮那の旃に云く、發菩提心とは、謂く決定誓願を生じて、一向に(四)一切智智を志求して、必ずまさに普く法界の衆生を(五)度すべし。此の心は由ほ憧旛の如し、是れ衆行の導首なり、由ほ種子の如し、是れ萬德の根本なり。若し此の心を發さゞれば亦た(六)歌羅羅(カララ)に託せざるが如し、則ち大悲胎藏何ぞ養育されん。又云く日を本淨の菩提心に喩ふ、即ち是れ(七)毗盧遮那の自體なり。月を菩提行に喩ふ。(八)白月十五日衆行圓滿するを成菩提に喩ふ。黑月十五日衆行皆息むを般涅槃(ハツネハン)に喩ふ。中間時と昇降するを方便善巧等に喩ふ。發菩提心經に云く、若し菩薩善知識に親近し、諸佛を供養し、善根を修習し(一)勝法を志求し、心常に柔和にして苦に遭ふて能く忍び、慈悲淳厚にして深心平等に、大乘を信樂し佛の智慧を求む。若し人能く是の如くの十法を具すれば、乃ち能く無上菩提の心を發す。復た四緣ありて能く是の心を發す。一は諸佛を思惟したてまつり、二は身の過患を觀じ、三は衆生を慈愍し、四は最勝の果を求む。一に諸佛を思惟すとは、三世諸佛の初始發心に煩惱の性を具したまふ事も、亦我が今の如し。(二)大明慧　智慧

(一)勝法　勝れた法にして佛法。

明慧を發して無明の殼に於て勝心を建立し、苦行を積集して、生死の海を度し、身命財を捨て、一切智を求め今皆成就す。若この菩提これ可得の法ならば、我れ亦得べきの故に菩提心を發す。二に身の過患を觀ずとは、自身に我が身を觀ずるに、九孔(クヨウ)より常に臭穢不淨を流す、厭離を生ずるが故に。又(三)五陰(ヨウン)四大を觀し、俱に能く無量の惡業を興造して、貪瞋癡(トンジンチ)の無量の煩惱を具し、泡の如く沫の如し、念々に無常なり、捨離を求むるが故に菩提心を發す。三に慈愍衆生とは、諸の衆生を見れば(四)無明に縛せられ衆苦に纏はる、不善の業を集めて大劇苦を受け、正法を捨離して邪道を信受し、煩惱の河を沒して解脫を求めず、轉た衆惡を造り彼を愍み念ふが故に菩提心を發す。四に最勝の果を求むるとは、諸の如來を見たてまつるに、相好莊嚴にして(五)戒定慧知見清

(二)受想行識の五陰と地水火風の四大。

(三)五陰四大　色

(四)無明　無は不、明は覺にして煩惱なり。

(五)戒定慧云云　戒と定と慧と知見と清淨と十力と無畏と大悲と三念の佛の德をいふ。

(一)第五に行願を明す、行願とは菩提心の慈悲の德なり。

(二)顯揚　顯揚論

(三)六波羅蜜　皆無上菩提を證得せんが爲めの施、持戒、忍辱、精進、禪定、智惠を向上して佛果なる彼岸に到るなり、波羅蜜は到彼岸と譯するなり。

(四)一切智智　一切を知る智、佛果なり。

(五)度　濟度。

(六)歌羅羅　胎內の種子なり。

(七)毗盧遮那　大日如來。

(八)白月　一月の中月のある時即ち十五日より晦日迄を白月、晦日より十四日に至るを黑月といふ。

淨十力無畏大悲三念あり。一切智を具して衆生を憐愍して常住の法身清淨無染なり、修習するが爲めの故に菩提心を發す。又云く菩提心を發すといふは、先づまさに堅固に正願を發すべし。謂ふ所の四弘誓(グウゼイ)等なり、志を立つる事堅强にして大要誓を作して常に正行を修す。謂ゆる六波羅蜜等なり。故に此の佛刹經の中に、虛空王誓を立てゝ云く、大衆前に對して我れ菩提心を發す、誓て諸群生を度して皆衆苦を離れしめん。願はくは今より已後、若し我れ染汚(ゼンマ)の瞋恚嫉妬心、幷びに我慢貪愛あらば、是れ十方及び現在の諸佛を欺誑するなり。乃至云ふ斯の誠實の言に由て地六種に動き、我若し不實語ならば、四大互ひに遷易せん等。又發菩提心經に云く、決定の誓を立つるに五事持つ事あるが故に。一は能く其の心を堅固にし、二は能く煩惱を制伏し。三は能く放逸を遮し。四は能く(一)五蓋を破り。五は能く勤めて六波羅蜜等を修行す。若し是の如く誓願を具して、堅固勇猛にして施●戒●忍●進●定●慧●慈悲●喜捨を修して退轉あることなし、是を眞發菩提心と名く。維摩經に云く、阿耨多羅三藐三菩提心を發すとは、是れ即ち出家これ即ち具足なり。

國譯菩提心義 終

(一)五蓋 煩惱障、業障、生障、法障、所知障を云ふ、障とは成佛の障りとなるなり。

縮餘一、續藏三套一、豐山錄外初一、本書述者に就て惠果阿闍梨の御作、大師の請來する所となす。

(二)十八 十八は大科に約す、若し子科に約せば文の如し。總別に約せば總は六、別は十八なり。又十八道とは安然は十八界、十八不共法を表すとす是れ顯教の意。今密意に約せば金界の九會、胎藏の九尊なり。

十八契印總別圖

(總)(別)

一、莊嚴行者 法五
- 淨三業
- 佛部
- 蓮華部
- 金剛部
- 被甲護身

二、結界法
- 地結
- 金剛墻

三、莊嚴道場 法
- 道場觀
- 大虛空藏

國譯(二)十八契印

(一)師より灌頂を獲て既に印可を蒙り、已に久しからずして當さに成就すべし、弟子此の相を具せば方さに此を傳授すべし、即ち如意寶なり、能く諸の事業を成就す、經に處所を說くが如くんば、山間及び流水清淨の阿蘭(レン)若、隨樂の澗谷、諸の厄怖難を離れたらん、力に隨つて供具を嚴(かざ)り、行人面を本方に於して本尊を拜禮し、次に餘方の佛を禮したてまつれ、五輪を以て地に著けて、敎の如く敬禮したてまつる、雙膝を長跪し已て(三)合掌虛心して、誠心に住して盡く三業の一切の罪を說陳せよ。

我れ過去世より生死に流轉せり、今大聖尊に對したてまつり、心を盡して懺悔す、先佛の懺したまふ所の如く、我れも今亦た是の如し、願くは加持力を垂れたまへ、衆生悉く清淨ならしめん、此の大願を以ての故に、自他無垢なることを獲。密言に曰く、

唵薩嚩(ソバ)二合婆嚩(バムバ)四輸馱薩嚩(シュダサラバ)達磨薩嚩(ダラマソバ)二合婆嚩(バムバ)輸度唅(シュドウカン)。

次に本尊の前(ミマヘ)に對したてまつりて結跏趺坐す、或は半跏坐し大悲心を起し、我れ此の法を修して一切衆生をして、速かに無上正等菩提を證せしめん。先づ諸の香を磨(す)りて

四、勸請法三 ┌送車儀軌請本
五、結護法三 ┌當部明王 金剛網
六、供養法三 ┌閼伽 花座 普供養 院火

(一)師より云云もと是れ五字一句の頌なるを豐山本は長行にす。
(二)合掌虛心して云云文なり、次の「我れ過去世より」等は懺悔文なり。
(三)輸一本秣に作る。
(四)佛部三昧耶等以下三部の印言七返、此れ三部胎藏曼荼羅の配立と同じ。
(五)即の字脫す。
(六)印を當心云云佛部は頂に散ずるを普通とし心に反するも頂と心と別ならざればなり胎曼の中臺、一或は頂(支生生或は心)とは此の意なり。
(七)或はいふ「次に蓮華部三昧耶の印を結べ」と

(一)一切病に病の字なし。一本に護身三昧耶印なり、此の印は軍荼利の三股の印なり、印義は、二中は自身、二風は甲胄、二大は胸當の形相、又二小二無名は四寶、掌中は月輪佛智、二中指は正體智、二頭指は後得大悲智、二大は大空三昧なり。猶、耶の下も印の字脫するか。(二)二中指一本に手の字なし。

以用て手に塗れ、然して後ち(一)佛部三昧耶の陀羅尼印を結べ、二手を以て虛心合掌せよ、二頭指を開いて屈して二中指の上節に輔へ、二大指屈して二頭指の下節に輔けよ其の印(二)成す、(三)印を當心に置き、如來の三十二相八十種好を想へ、分明に目前に對したてまつるが如く、心を至して眞言を誦すること七遍。眞言に曰く　唵怛陀引蘖

(一)一切病苦痛身に著かず、

(二)手中指を

(三)手を

(四)

(五)

(六)

(七)

(八)

(九)

(十)

(十一)

(十二)

(十三)

(十四)

(十五)

(十六)

(十七)

(十八)

(十九)

(二十)

(二十一)

(二十二)

(二十三)

(二十四)

(二十五)

(二十六)

(二十七)

(二十八)

(二十九)

(三十)

(三十一)

(三十二)

(三十三)

(三十四)

(三十五)

(三十六)

(三十七)

(三十八)

(三十九)

(四十)

(四十一)

(四十二)

(四十三)

(四十四)

(四十五)

(四十六)

(四十七)

(四十八)

(四十九)

(五十)

(五十一)

(五十二)

(五十三)

(五十四)

(五十五)

(五十六)

(五十七)

(五十八)

(五十九)

(六十)

(六十一)

(六十二)

(六十三)

(六十四)

(六十五)

(六十六)

(六十七)

(六十八)

(六十九)

(七十)

(七十一)

(七十二)

(七十三)

(七十四)

(七十五)

(七十六)

(七十七)

(七十八)

(七十九)

(八十)

(八十一)

(八十二)

(八十三)

(八十四)

(八十五)

(八十六)

(八十七)

(八十八)

(八十九)

(九十)

(九十一)

(九十二)

(九十三)

(九十四)

(九十五)

(九十六)

(九十七)

(九十八)

(九十九)

(一百)

(一百一)

(一百二)

(一百三)

(一百四)

(一百五)

(一百六)

(一百七)

(一百八)

(一百九)

(一百十)

(一百十一)

(一百十二)

(一百十三)

(一百十四)

(一百十五)

(一百十六)

(一百十七)

(一百十八)

(一百十九)

(一百二十)

(一百二十一)

(一百二十二)

(一百二十三)

(一百二十四)

(一百二十五)

(一百二十六)

(一百二十七)

(一百二十八)

(一百二十九)

(一百三十)

(一百三十一)

(一百三十二)

(一百三十三)

(一百三十四)

(一百三十五)

(一百三十六)

(一百三十七)

(一百三十八)

(一百三十九)

(一百四十)

(一百四十一)

(一百四十二)

(一百四十三)

(一百四十四)

(一百四十五)

(一百四十六)

(一百四十七)

(一百四十八)

(一百四十九)

(一百五十)

(一百五十一)

(一百五十二)

(一百五十三)

(一百五十四)

(一百五十五)

(一百五十六)

(一百五十七)

(一百五十八)

(一百五十九)

(一百六十)

(一百六十一)

(一百六十二)

(一百六十三)

(一百六十四)

(一百六十五)

(一百六十六)

(一百六十七)

(一百六十八)

(一百六十九)

(一百七十)

(一百七十一)

(一百七十二)

(一百七十三)

(一百七十四)

(一百七十五)

(一百七十六)

(一百七十七)

(一百七十八)

(一百七十九)

(一百八十)

(一百八十一)

(一百八十二)

(一百八十三)

(一百八十四)

(一百八十五)

(一百八十六)

(一百八十七)

(一百八十八)

(一百八十九)

(一百九十)

(一百九十一)

(一百九十二)

(一百九十三)

(一百九十四)

(一百九十五)

(一百九十六)

(一百九十七)

(一百九十八)

(一百九十九)

(二百)

(二百一)

(二百二)

(二百三)

(二百四)

(二百五)

(二百六)

(二百七)

(二百八)

(二百九)

(二百十)

(二百十一)

(二百十二)

(二百十三)

(二百十四)

(二百十五)

(二百十六)

(二百十七)

(二百十八)

(二百十九)

(二百二十)

(二百二十一)

(二百二十二)

(二百二十三)

(二百二十四)

(二百二十五)

(二百二十六)

(二百二十七)

(二百二十八)

(二百二十九)

(二百三十)

(二百三十一)

(二百三十二)

(二百三十三)

(二百三十四)

(二百三十五)

(二百三十六)

(二百三十七)

(二百三十八)

(二百三十九)

(二百四十)

(二百四十一)

(二百四十二)

(二百四十三)

(二百四十四)

(二百四十五)

(二百四十六)

(二百四十七)

(二百四十八)

(二百四十九)

(二百五十)

(二百五十一)

(二百五十二)

(二百五十三)

(二百五十四)

(二百五十五)

(二百五十六)

(二百五十七)

(二百五十八)

(二百五十九)

(二百六十)

(二百六十一)

(二百六十二)

(二百六十三)

(二百六十四)

(二百六十五)

(二百六十六)

(二百六十七)

(二百六十八)

(二百六十九)

(二百七十)

(二百七十一)

(二百七十二)

(二百七十三)

(二百七十四)

(二百七十五)

(二百七十六)

(二百七十七)

(二百七十八)

(二百七十九)

(二百八十)

(二百八十一)

(二百八十二)

(二百八十三)

(二百八十四)

(二百八十五)

(二百八十六)

(二百八十七)

(二百八十八)

(二百八十九)

(二百九十)

(二百九十一)

(二百九十二)

(二百九十三)

(二百九十四)

(二百九十五)

(二百九十六)

(二百九十七)

(二百九十八)

(二百九十九)

(三百)

(三百一)

(三百二)

(三百三)

(三百四)

(三百五)

(三百六)

(三百七)

(三百八)

(三百九)

(三百十)

(三百十一)

(三百十二)

(三百十三)

(三百十四)

(三百十五)

(三百十六)

(三百十七)

(三百十八)

(三百十九)

(三百二十)

(三百二十一)

(三百二十二)

(三百二十三)

(三百二十四)

(三百二十五)

(三百二十六)

(三百二十七)

(三百二十八)

(三百二十九)

(三百三十)

(三百三十一)

(三百三十二)

(三百三十三)

(三百三十四)

(三百三十五)

(三百三十六)

(三百三十七)

(三百三十八)

(三百三十九)

(三百四十)

(三百四十一)

(三百四十二)

(三百四十三)

(三百四十四)

(三百四十五)

(三百四十六)

(三百四十七)

(三百四十八)

(三百四十九)

(三百五十)

(三百五十一)

(三百五十二)

(三百五十三)

(三百五十四)

(三百五十五)

(三百五十六)

(三百五十七)

(三百五十八)

(三百五十九)

(三百六十)

(三百六十一)

(三百六十二)

(三百六十三)

(三百六十四)

(三百六十五)

(三百六十六)

(三百六十七)

(三百六十八)

(三百六十九)

(三百七十)

(三百七十一)

(三百七十二)

(三百七十三)

(三百七十四)

(三百七十五)

(三百七十六)

(三百七十七)

(三百七十八)

(三百七十九)

(三百八十)

(三百八十一)

(三百八十二)

(三百八十三)

(三百八十四)

(三百八十五)

(三百八十六)

(三百八十七)

(三百八十八)

(三百八十九)

(三百九十)

(三百九十一)

(三百九十二)

(三百九十三)

(三百九十四)

(三百九十五)

(三百九十六)

(三百九十七)

(三百九十八)

(三百九十九)

(四百)

(四百一)

(四百二)

(四百三)

(四百四)

(四百五)

(四百六)

(四百七)

(四百八)

(四百九)

(四百十)

(四百十一)

(四百十二)

(四百十三)

(四百十四)

(四百十五)

(四百十六)

(四百十七)

(四百十八)

(四百十九)

(四百二十)

(四百二十一)

(四百二十二)

(四百二十三)

(四百二十四)

(四百二十五)

(四百二十六)

(四百二十七)

(四百二十八)

(四百二十九)

(四百三十)

(四百三十一)

(四百三十二)

(四百三十三)

(四百三十四)

(四百三十五)

(四百三十六)

(四百三十七)

(四百三十八)

(四百三十九)

(四百四十)

(四百四十一)

(四百四十二)

(四百四十三)

(四百四十四)

(四百四十五)

(四百四十六)

(四百四十七)

(四百四十八)

(四百四十九)

(四百五十)

(四百五十一)

(四百五十二)

(四百五十三)

(四百五十四)

(四百五十五)

(四百五十六)

(四百五十七)

(四百五十八)

(四百五十九)

(四百六十)

(四百六十一)

(四百六十二)

(四百六十三)

(四百六十四)

(四百六十五)

(四百六十六)

(四百六十七)

(四百六十八)

(四百六十九)

(四百七十)

(四百七十一)

(四百七十二)

(四百七十三)

(四百七十四)

(四百七十五)

(四百七十六)

(四百七十七)

(四百七十八)

(四百七十九)

(四百八十)

(四百八十一)

(四百八十二)

(四百八十三)

(四百八十四)

(四百八十五)

(四百八十六)

(四百八十七)

(四百八十八)

(四百八十九)

(四百九十)

(四百九十一)

(四百九十二)

(四百九十三)

(四百九十四)

(四百九十五)

(四百九十六)

(四百九十七)

(四百九十八)

(四百九十九)

(五百)

(五百一)

(五百二)

(五百三)

(五百四)

(五百五)

(五百六)

(五百七)

(五百八)

(五百九)

(五百十)

(五百十一)

(五百十二)

(五百十三)

(五百十四)

(五百十五)

(五百十六)

(五百十七)

(五百十八)

(五百十九)

(五百二十)

(五百二十一)

(五百二十二)

(五百二十三)

(五百二十四)

(五百二十五)

(五百二十六)

(五百二十七)

(五百二十八)

(五百二十九)

(五百三十)

(五百三十一)

(五百三十二)

(五百三十三)

(五百三十四)

(五百三十五)

(五百三十六)

(五百三十七)

(五百三十八)

(五百三十九)

(五百四十)

(五百四十一)

(五百四十二)

(五百四十三)

(五百四十四)

(五百四十五)

(五百四十六)

(五百四十七)

(五百四十八)

(五百四十九)

(五百五十)

(五百五十一)

(五百五十二)

(五百五十三)

(五百五十四)

(五百五十五)

(五百五十六)

(五百五十七)

(五百五十八)

(五百五十九)

(五百六十)

(五百六十一)

(五百六十二)

(五百六十三)

(五百六十四)

(五百六十五)

(五百六十六)

(五百六十七)

(五百六十八)

(五百六十九)

(五百七十)

(五百七十一)

(五百七十二)

(五百七十三)

(五百七十四)

(五百七十五)

(五百七十六)

(五百七十七)

(五百七十八)

(五百七十九)

(五百八十)

(五百八十一)

(五百八十二)

(五百八十三)

(五百八十四)

(五百八十五)

(五百八十六)

(五百八十七)

(五百八十八)

(五百八十九)

(五百九十)

(五百九十一)

(五百九十二)

(五百九十三)

(五百九十四)

(五百九十五)

(五百九十六)

(五百九十七)

(五百九十八)

(五百九十九)

(六百)

(六百一)

(六百二)

(六百三)

(六百四)

(六百五)

(六百六)

(六百七)

(六百八)

(六百九)

(六百十)

(六百十一)

(六百十二)

(六百十三)

(六百十四)

(六百十五)

(六百十六)

(六百十七)

(六百十八)

(六百十九)

(六百二十)

(六百二十一)

(六百二十二)

(六百二十三)

(六百二十四)

(六百二十五)

(六百二十六)

(六百二十七)

(六百二十八)

(六百二十九)

(六百三十)

(六百三十一)

(六百三十二)

(六百三十三)

(六百三十四)

(六百三十五)

(六百三十六)

(六百三十七)

(六百三十八)

(六百三十九)

(六百四十)

(六百四十一)

(六百四十二)

(六百四十三)

(六百四十四)

(六百四十五)

(六百四十六)

(六百四十七)

(六百四十八)

(六百四十九)

(六百五十)

(六百五十一)

(六百五十二)

(六百五十三)

(六百五十四)

(六百五十五)

(六百五十六)

(六百五十七)

(六百五十八)

(六百五十九)

(六百六十)

(六百六十一)

(六百六十二)

(六百六十三)

(六百六十四)

(六百六十五)

(六百六十六)

(六百六十七)

(六百六十八)

(六百六十九)

(六百七十)

(六百七十一)

(六百七十二)

(六百七十三)

(六百七十四)

(六百七十五)

(六百七十六)

(六百七十七)

(六百七十八)

(六百七十九)

(六百八十)

(六百八十一)

(六百八十二)

(六百八十三)

(六百八十四)

(六百八十五)

(六百八十六)

(六百八十七)

(六百八十八)

(六百八十九)

(六百九十)

(六百九十一)

(六百九十二)

(六百九十三)

(六百九十四)

(六百九十五)

(六百九十六)

(六百九十七)

(六百九十八)

(六百九十九)

(七百)

(七百一)

(七百二)

(七百三)

(七百四)

(七百五)

(七百六)

(七百七)

(七百八)

(七百九)

(七百十)

(七百十一)

(七百十二)

(七百十三)

(七百十四)

(七百十五)

(七百十六)

(七百十七)

(七百十八)

(七百十九)

(七百二十)

(七百二十一)

(七百二十二)

(七百二十三)

(七百二十四)

(七百二十五)

(七百二十六)

(七百二十七)

(七百二十八)

(七百二十九)

(七百三十)

(七百三十一)

(七百三十二)

(七百三十三)

(七百三十四)

(七百三十五)

(七百三十六)

(七百三十七)

(七百三十八)

(七百三十九)

(七百四十)

(七百四十一)

(七百四十二)

(七百四十三)

(七百四十四)

(七百四十五)

(七百四十六)

(七百四十七)

(七百四十八)

(七百四十九)

(七百五十)

(七百五十一)

(七百五十二)

(七百五十三)

(七百五十四)

(七百五十五)

(七百五十六)

(七百五十七)

(七百五十八)

(七百五十九)

(七百六十)

(七百六十一)

(七百六十二)

(七百六十三)

(七百六十四)

(七百六十五)

(七百六十六)

(七百六十七)

(七百六十八)

(七百六十九)

(七百七十)

(七百七十一)

(七百七十二)

(七百七十三)

(七百七十四)

(七百七十五)

(七百七十六)

(七百七十七)

(七百七十八)

(七百七十九)

(七百八十)

(七百八十一)

(七百八十二)

(七百八十三)

(七百八十四)

(七百八十五)

(七百八十六)

(七百八十七)

(七百八十八)

(七百八十九)

(七百九十)

(七百九十一)

(七百九十二)

(七百九十三)

(七百九十四)

(七百九十五)

(七百九十六)

(七百九十七)

(七百九十八)

(七百九十九)

(八百)

(八百一)

(八百二)

(八百三)

(八百四)

(八百五)

(八百六)

(八百七)

(八百八)

(八百九)

(八百十)

(八百十一)

(八百十二)

(八百十三)

(八百十四)

(八百十五)

(八百十六)

(八百十七)

(八百十八)

(八百十九)

(八百二十)

(八百二十一)

(八百二十二)

(八百二十三)

(八百二十四)

(八百二十五)

(八百二十六)

(八百二十七)

(八百二十八)

(八百二十九)

(八百三十)

(八百三十一)

(八百三十二)

(八百三十三)

(八百三十四)

(八百三十五)

(八百三十六)

(八百三十七)

(八百三十八)

(八百三十九)

(八百四十)

(八百四十一)

(八百四十二)

(八百四十三)

(八百四十四)

(八百四十五)

(八百四十六)

(八百四十七)

(八百四十八)

(八百四十九)

(八百五十)

(八百五十一)

(八百五十二)

(八百五十三)

(八百五十四)

(八百五十五)

(八百五十六)

(八百五十七)

(八百五十八)

(八百五十九)

(八百六十)

(八百六十一)

(八百六十二)

(八百六十三)

(八百六十四)

(八百六十五)

(八百六十六)

(八百六十七)

(八百六十八)

(八百六十九)

(八百七十)

(八百七十一)

(八百七十二)

(八百七十三)

(八百七十四)

(八百七十五)

(八百七十六)

(八百七十七)

(八百七十八)

(八百七十九)

(八百八十)

(八百八十一)

(八百八十二)

(八百八十三)

(八百八十四)

(八百八十五)

(八百八十六)

(八百八十七)

(八百八十八)

(八百八十九)

(八百九十)

(八百九十一)

(八百九十二)

(八百九十三)

(八百九十四)

(八百九十五)

(八百九十六)

(八百九十七)

(八百九十八)

(八百九十九)

(九百)

(九百一)

(九百二)

(九百三)

(九百四)

(九百五)

(九百六)

(九百七)

(九百八)

(九百九)

(九百十)

(九百十一)

(九百十二)

(九百十三)

(九百十四)

(九百十五)

(九百十六)

(九百十七)

(九百十八)

(九百十九)

(九百二十)

(九百二十一)

(九百二十二)

(九百二十三)

(九百二十四)

(九百二十五)

(九百二十六)

(九百二十七)

(九百二十八)

(九百二十九)

(九百三十)

(九百三十一)

(九百三十二)

(九百三十三)

(九百三十四)

(九百三十五)

(九百三十六)

(九百三十七)

(九百三十八)

(九百三十九)

(九百四十)

(九百四十一)

(九百四十二)

(九百四十三)

(九百四十四)

(九百四十五)

(九百四十六)

(九百四十七)

(九百四十八)

(九百四十九)

(九百五十)

(九百五十一)

(九百五十二)

(九百五十三)

(九百五十四)

(九百五十五)

(九百五十六)

(九百五十七)

(九百五十八)

(九百五十九)

(九百六十)

(九百六十一)

(九百六十二)

(九百六十三)

(九百六十四)

(九百六十五)

(九百六十六)

(九百六十七)

(九百六十八)

(九百六十九)

(九百七十)

(九百七十一)

(九百七十二)

(九百七十三)

(九百七十四)

(九百七十五)

(九百七十六)

(九百七十七)

(九百七十八)

(九百七十九)

(九百八十)

(九百八十一)

(九百八十二)

(九百八十三)

(九百八十四)

(九百八十五)

(九百八十六)

(九百八十七)

(九百八十八)

(九百八十九)

(九百九十)

(九百九十一)

(九百九十二)

(九百九十三)

(九百九十四)

(九百九十五)

(九百九十六)

(九百九十七)

(九百九十八)

(九百九十九)

(一千)

(一千一)

(一千二)

(一千三)

(一千四)

(一千五)

(一千六)

(一千七)

(一千八)

(一千九)

(一千十)

(一千十一)

(一千十二)

(一千十三)

(一千十四)

(一千十五)

(一千十六)

(一千十七)

(一千十八)

(一千十九)

(一千二十)

(一千二十一)

(一千二十二)

(一千二十三)

(一千二十四)

(一千二十五)

(一千二十六)

(一千二十七)

(一千二十八)

(一千二十九)

(一千三十)

(一千三十一)

(一千三十二)

(一千三十三)

(一千三十四)

(一千三十五)

(一千三十六)

(一千三十七)

(一千三十八)

(一千三十九)

(一千四十)

(一千四十一)

(一千四十二)

(一千四十三)

(一千四十四)

(一千四十五)

(一千四十六)

(一千四十七)

(一千四十八)

(一千四十九)

(一千五十)

(一千五十一)

(一千五十二)

(一千五十三)

(一千五十四)

(一千五十五)

(一千五十六)

(一千五十七)

(一千五十八)

(一千五十九)

(一千六十)

(一千六十一)

(一千六十二)

(一千六十三)

(一千六十四)

(一千六十五)

(一千六十六)

(一千六十七)

(一千六十八)

(一千六十九)

(一千七十)

(一千七十一)

(一千七十二)

(一千七十三)

(一千七十四)

(一千七十五)

(一千七十六)

(一千七十七)

(一千七十八)

(一千七十九)

(一千八十)

(一千八十一)

(一千八十二)

(一千八十三)

(一千八十四)

(一千八十五)

(一千八十六)

(一千八十七)

(一千八十八)

(一千八十九)

(一千九十)

(一千九十一)

(一千九十二)

(一千九十三)

(一千九十四)

(一千九十五)

(一千九十六)

(一千九十七)

(一千九十八)

(一千九十九)

(一千一百)

(一千一百一)

(一千一百二)

(一千一百三)

(一千一百四)

(一千一百五)

(一千一百六)

(一千一百七)

(一千一百八)

(一千一百九)

(一千一百十)

(一千一百十一)

(一千一百十二)

(一千一百十三)

(一千一百十四)

(一千一百十五)

(一千一百十六)

(一千一百十七)

(一千一百十八)

(一千一百十九)

(一千一百二十)

(一千一百二十一)

(一千一百二十二)

(一千一百二十三)

(一千一百二十四)

(一千一百二十五)

(一千一百二十六)

(一千一百二十七)

(一千一百二十八)

(一千一百二十九)

(一千一百三十)

(一千一百三十一)

(一千一百三十二)

(一千一百三十三)

(一千一百三十四)

(一千一百三十五)

(一千一百三十六)

(一千一百三十七)

(一千一百三十八)

(一千一百三十九)

(一千一百四十)

(一千一百四十一)

(一千一百四十二)

(一千一百四十三)

(一千一百四十四)

(一千一百四十五)

(一千一百四十六)

(一千一百四十七)

(一千一百四十八)

(一千一百四十九)

(一千一百五十)

(一千一百五十一)

(一千一百五十二)

(一千一百五十三)

(一千一百五十四)

(一千一百五十五)

(一千一百五十六)

(一千一百五十七)

(一千一百五十八)

(一千一百五十九)

(一千一百六十)

(一千一百六十一)

(一千一百六十二)

(一千一百六十三)

(一千一百六十四)

(一千一百六十五)

(一千一百六十六)

(一千一百六十七)

(一千一百六十八)

(一千一百六十九)

(一千一百七十)

(一千一百七十一)

(一千一百七十二)

(一千一百七十三)

(一千一百七十四)

(一千一百七十五)

(一千一百七十六)

(一千一百七十七)

(一千一百七十八)

(一千一百七十九)

(一千一百八十)

(一千一百八十一)

(一千一百八十二)

(一千一百八十三)

(一千一百八十四)

(一千一百八十五)

(一千一百八十六)

(一千一百八十七)

(一千一百八十八)

(一千一百八十九)

(一千一百九十)

(一千一百九十一)

(一千一百九十二)

(一千一百九十三)

(一千一百九十四)

(一千一百九十五)

(一千一百九十六)

(一千一百九十七)

(一千一百九十八)

(一千一百九十九)

(一千二百)

(一千二百一)

(一千二百二)

(一千二百三)

(一千二百四)

(一千二百五)

(一千二百六)

(一千二百七)

(一千二百八)

(一千二百九)

(一千二百十)

(一千二百十一)

(一千二百十二)

(一千二百十三)

(一千二百十四)

(一千二百十五)

(一千二百十六)

(一千二百十七)

(一千二百十八)

(一千二百十九)

(一千二百二十)

(一千二百二十一)

(一千二百二十二)

(一千二百二十三)

(一千二百二十四)

(一千二百二十五)

(一千二百二十六)

(一千二百二十七)

(一千二百二十八)

(一千二百二十九)

(一千二百三十)

(一千二百三十一)

(一千二百三十二)

(一千二百三十三)

(一千二百三十四)

(一千二百三十五)

(一千二百三十六)

(一千二百三十七)

(一千二百三十八)

(一千二百三十九)

(一千二百四十)

(一千二百四十一)

(一千二百四十二)

(一千二百四十三)

(一千二百四十四)

(一千二百四十五)

(一千二百四十六)

(一千二百四十七)

(一千二百四十八)

(一千二百四十九)

(一千二百五十)

(一千二百五十一)

(一千二百五十二)

(一千二百五十三)

(一千二百五十四)

(一千二百五十五)

(一千二百五十六)

(一千二百五十七)

(一千二百五十八)

(一千二百五十九)

(一千二百六十)

(一千二百六十一)

(一千二百六十二)

(一千二百六十三)

(一千二百六十四)

(一千二百六十五)

(一千二百六十六)

(一千二百六十七)

(一千二百六十八)

(一千二百六十九)

(一千二百七十)

(一千二百七十一)

(一千二百七十二)

(一千二百七十三)

(一千二百七十四)

(一千二百七十五)

(一千二百七十六)

(一千二百七十七)

(一千二百七十八)

(一千二百七十九)

(一千二百八十)

(一千二百八十一)

(一千二百八十二)

(一千二百八十三)

(一千二百八十四)

(一千二百八十五)

(一千二百八十六)

(一千二百八十七)

(一千二百八十八)

(一千二百八十九)

(一千二百九十)

(一千二百九十一)

(一千二百九十二)

(一千二百九十三)

(一千二百九十四)

(一千二百九十五)

(一千二百九十六)

(一千二百九十七)

(一千二百九十八)

(一千二百九十九)

(一千三百)

(一千三百一)

(一千三百二)

(一千三百三)

(一千三百四)

(一千三百五)

(一千三百六)

(一千三百七)

(一千三百八)

(一千三百九)

(一千三百十)

(一千三百十一)

(一千三百十二)

(一千三百十三)

(一千三百十四)

(一千三百十五)

(一千三百十六)

(一千三百十七)

(一千三百十八)

(一千三百十九)

(一千三百二十)

(一千三百二十一)

(一千三百二十二)

(一千三百二十三)

(一千三百二十四)

(一千三百二十五)

(一千三百二十六)

(一千三百二十七)

(一千三百二十八)

(一千三百二十九)

(一千三百三十)

(一千三百三十一)

(一千三百三十二)

(一千三百三十三)

(一千三百三十四)

(一千三百三十五)

(一千三百三十六)

(一千三百三十七)

(一千三百三十八)

(一千三百三十九)

(一千三百四十)

(一千三百四十一)

(一千三百四十二)

(一千三百四十三)

(一千三百四十四)

(一千三百四十五)

(一千三百四十六)

(一千三百四十七)

(一千三百四十八)

(一千三百四十九)

(一千三百五十)

(一千三百五十一)

(一千三百五十二)

(一千三百五十三)

(一千三百五十四)

(一千三百五十五)

(一千三百五十六)

(一千三百五十七)

(一千三百五十八)

(一千三百五十九)

(一千三百六十)

(一千三百六十一)

(一千三百六十二)

(一千三百六十三)

(一千三百六十四)

(一千三百六十五)

(一千三百六十六)

(一千三百六十七)

(一千三百六十八)

(一千三百六十九)

(一千三百七十)

(一千三百七十一)

(一千三百七十二)

(一千三百七十三)

(一千三百七十四)

(一千三百七十五)

(一千三百七十六)

(一千三百七十七)

(一千三百七十八)

(一千三百七十九)

(一千三百八十)

(一千三百八十一)

(一千三百八十二)

(一千三百八十三)

(一千三百八十四)

(一千三百八十五)

(一千三百八十六)

(一千三百八十七)

(一千三百八十八)

(一千三百八十九)

(一千三百九十)

(一千三百九十一)

(一千三百九十二)

(一千三百九十三)

(一千三百九十四)

(一千三百九十五)

(一千三百九十六)

(一千三百九十七)

(一千三百九十八)

(一千三百九十九)

(一千四百)

(一千四百一)

(一千四百二)

(一千四百三)

(一千四百四)

(一千四百五)

(一千四百六)

(一千四百七)

(一千四百八)

(一千四百九)

(一千四百十)

(一千四百十一)

(一千四百十二)

(一千四百十三)

(一千四百十四)

(一千四百十五)

(一千四百十六)

(一千四百十七)

(一千四百十八)

(一千四百十九)

(一千四百二十)

(一千四百二十一)

(一千四百二十二)

(一千四百二十三)

(一千四百二十四)

(一千四百二十五)

(一千四百二十六)

(一千四百二十七)

(一千四百二十八)

(一千四百二十九)

(一千四百三十)

(一千四百三十一)

(一千四百三十二)

(一千四百三十三)

(一千四百三十四)

(一千四百三十五)

(一千四百三十六)

(一千四百三十七)

(一千四百三十八)

(一千四百三十九)

(一千四百四十)

(一千四百四十一)

(一千四百四十二)

(一千四百四十三)

(一千四百四十四)

(一千四百四十五)

(一千四百四十六)

(一千四百四十七)

(一千四百四十八)

(一千四百四十九)

(一千四百五十)

(一千四百五十一)

(一千四百五十二)

(一千四百五十三)

(一千四百五十四)

(一千四百五十五)

(一千四百五十六)

(一千四百五十七)

(一千四百五十八)

(一千四百五十九)

(一千四百六十)

(一千四百六十一)

(一千四百六十二)

(一千四百六十三)

(一千四百六十四)

(一千四百六十五)

(一千四百六十六)

(一千四百六十七)

(一千四百六十八)

(一千四百六十九)

(一千四百七十)

(一千四百七十一)

(一千四百七十二)

(一千四百七十三)

(一千四百七十四)

(一千四百七十五)

(一千四百七十六)

(一千四百七十七)

(一千四百七十八)

(一千四百七十九)

(一千四百八十)

(一千四百八十一)

(一千四百八十二)

(一千四百八十三)

(一千四百八十四)

(一千四百八十五)

(一千四百八十六)

(一千四百八十七)

(一千四百八十八)

(一千四百八十九)

(一千四百九十)

(一千四百九十一)

(一千四百九十二)

(一千四百九十三)

(一千四百九十四)

(一千四百九十五)

(一千四百九十六)

(一千四百九十七)

(一千四百九十八)

(一千四百九十九)

(一千五百)

(一千五百一)

(一千五百二)

(一千五百三)

(一千五百四)

(一千五百五)

(一千五百六)

(一千五百七)

(一千五百八)

(一千五百九)

(一千五百十)

(一千五百十一)

(一千五百十二)

(一千五百十三)

(一千五百十四)

(一千五百十五)

(一千五百十六)

(一千五百十七)

(一千五百十八)

(一千五百十九)

(一千五百二十)

(一千五百二十一)

(一千五百二十二)

(一千五百二十三)

(一千五百二十四)

(一千五百二十五)

(一千五百二十六)

(一千五百二十七)

(一千五百二十八)

(一千五百二十九)

(一千五百三十)

(一千五百三十一)

(一千五百三十二)

(一千五百三十三)

(一千五百三十四)

(一千五百三十五)

(一千五百三十六)

(一千五百三十七)

(一千五百三十八)

(一千五百三十九)

(一千五百四十)

(一千五百四十一)

(一千五百四十二)

(一千五百四十三)

(一千五百四十四)

(一千五百四十五)

(一千五百四十六)

(一千五百四十七)

(一千五百四十八)

(一千五百四十九)

(一千五百五十)

(一千五百五十一)

(一千五百五十二)

(一千五百五十三)

(一千五百五十四)

(一千五百五十五)

(一千五百五十六)

(一千五百五十七)

(一千五百五十八)

(一千五百五十九)

(一千五百六十)

(一千五百六十一)

(一千五百六十二)

(一千五百六十三)

(一千五百六十四)

(一千五百六十五)

(一千五百六十六)

(一千五百六十七)

(一千五百六十八)

(一千五百六十九)

(一千五百七十)

(一千五百七十一)

(一千五百七十二)

(一千五百七十三)

(一千五百七十四)

(一千五百七十五)

(一千五百七十六)

(一千五百七十七)

(一千五百七十八)

(一千五百七十九)

(一千五百八十)

(一千五百八十一)

(一千五百八十二)

(一千五百八十三)

(一千五百八十四)

(一千五百八十五)

(一千五百八十六)

(一千五百八十七)

(一千五百八十八)

(一千五百八十九)

(一千五百九十)

(一千五百九十一)

(一千五百九十二)

(一千五百九十三)

(一千五百九十四)

(一千五百九十五)

(一千五百九十六)

(一千五百九十七)

(一千五百九十八)

(一千五百九十九)

(一千六百)

(一千六百一)

(一千六百二)

(一千六百三)

(一千六百四)

(一千六百五)

(一千六百六)

(一千六百七)

(一千六百八)

(一千六百九)

(一千六百十)

(一千六百十一)

(一千六百十二)

(一千六百十三)

(一千六百十四)

(一千六百十五)

(一千六百十六)

(一千六百十七)

(一千六百十八)

(一千六百十九)

(一千六百二十)

(一千六百二十一)

(一千六百二十二)

(一千六百二十三)

(一千六百二十四)

(一千六百二十五)

(一千六百二十六)

(一千六百二十七)

(一千六百二十八)

(一千六百二十九)

(一千六百三十)

(一千六百三十一)

(一千六百三十二)

(一千六百三十三)

(一千六百三十四)

(一千六百三十五)

(一千六百三十六)

(一千六百三十七)

(一千六百三十八)

(一千六百三十九)

(一千六百四十)

(一千六百四十一)

(一千六百四十二)

(一千六百四十三)

(一千六百四十四)

(一千六百四十五)

(一千六百四十六)

(一千六百四十七)

(一千六百四十八)

(一千六百四十九)

(一千六百五十)

(一千六百五十一)

(一千六百五十二)

(一千六百五十三)

(一千六百五十四)

(一千六百五十五)

(一千六百五十六)

(一千六百五十七)

(一千六百五十八)

(一千六百五十九)

(一千六百六十)

(一千六百六十一)

(一千六百六十二)

(一千六百六十三)

(一千六百六十四)

(一千六百六十五)

(一千六百六十六)

(一千六百六十七)

(一千六百六十八)

(一千六百六十九)

(一千六百七十)

(一千六百七十一)

(一千六百七十二)

(一千六百七十三)

(一千六百七十四)

(一千六百七十五)

(一千六百七十六)

(一千六百七十七)

(一千六百七十八)

(一千六百七十九)

(一千六百八十)

(一千六百八十一)

(一千六百八十二)

(一千六百八十三)

(一千六百八十四)

(一千六百八十五)

(一千六百八十六)

(一千六百八十七)

(一千六百八十八)

(一千六百八十九)

(一千六百九十)

(一千六百九十一)

(一千六百九十二)

(一千六百九十三)

(一千六百九十四)

(一千六百九十五)

(一千六百九十六)

(一千六百九十七)

(一千六百九十八)

(一千六百九十九)

(一千七百)

(一千七百一)

(一千七百二)

(一千七百三)

(一千七百四)

(一千七百五)

(一千七百六)

(一千七百七)

(一千七百八)

(一千七百九)

(一千七百十)

(一千七百十一)

(一千七百十二)

(一千七百十三)

(一千七百十四)

(一千七百十五)

(一千七百十六)

(一千七百十七)

(一千七百十八)

(一千七百十九)

(一千七百二十)

(一千七百二十一)

(一千七百二十二)

(一千七百二十三)

(一千七百二十四)

(一千七百二十五)

(一千七百二十六)

(一千七百二十七)

(一千七百二十八)

(一千七百二十九)

(一千七百三十)

(一千七百三十一)

(一千七百三十二)

(一千七百三十三)

(一千七百三十四)

(一千七百三十五)

(一千七百三十六)

(一千七百三十七)

(一千七百三十八)

(一千七百三十九)

(一千七百四十)

(一千七百四十一)

(一千七百四十二)

(一千七百四十三)

(一千七百四十四)

(一千七百四十五)

(一千七百四十六)

(一千七百四十七)

(一千七百四十八)

(一千七百四十九)

(一千七百五十)

(一千七百五十一)

(一千七百五十二)

(一千七百五十三)

(一千七百五十四)

(一千七百五十五)

(一千七百五十六)

(一千七百五十七)

(一千七百五十八)

(一千七百五十九)

(一千七百六十)

(一千七百六十一)

(一千七百六十二)

(一千七百六十三)

(一千七百六十四)

(一千七百六十五)

(一千七百六十六)

(一千七百六十七)

(一千七百六十八)

(一千七百六十九)

(一千七百七十)

(一千七百七十一)

(一千七百七十二)

(一千七百七十三)

(一千七百七十四)

(一千七百七十五)

(一千七百七十六)

(一千七百七十七)

(一千七百七十八)

(一千七百七十九)

(一千七百八十)

(一千七百八十一)

(一千七百八十二)

(一千七百八十三)

(一千七百八十四)

(一千七百八十五)

(一千七百八十六)

(一千七百八十七)

(一千七百八十八)

(一千七百八十九)

(一千七百九十)

(一千七百九十一)

(一千七百九十二)

(一千七百九十三)

(一千七百九十四)

(一千七百九十五)

(一千七百九十六)

(一千七百九十七)

(一千七百九十八)

(一千七百九十九)

(一千八百)

(一千八百一)

(一千八百二)

(一千八百三)

(一千八百四)

(一千八百五)

(一千八百六)

(一千八百七)

(一千八百八)

(一千八百九)

(一千八百十)

(一千八百十一)

(一千八百十二)

(一千八百十三)

(一千八百十四)

(一千八百十五)

(一千八百十六)

(一千八百十七)

(一千八百十八)

(一千八百十九)

(一千八百二十)

(一千八百二十一)

(一千八百二十二)

(一千八百二十三)

(一千八百二十四)

(一千八百二十五)

(一千八百二十六)

(一千八百二十七)

(一千八百二十八)

(一千八百二十九)

(一千八百三十)

(一千八百三十一)

(一千八百三十二)

(一千八百三十三)

(一千八百三十四)

(一千八百三十五)

(一千八百三十六)

(一千八百三十七)

(一千八百三十八)

(一千八百三十九)

(一千八百四十)

(一千八百四十一)

(一千八百四十二)

(一千八百四十三)

(一千八百四十四)

(一千八百四十五)

(一千八

此の印を結び及び眞言を誦して加持するに由るが故に、即ち金剛甲冑を被るに成んぬ、所有の毘那夜迦及び諸の天魔障礙を作す者退散し馳走す、(一)悉く是れ行者の光明身に被りて威德自在なるを見、若くは山林に居し及び險難に在らんに、皆悉く畏れなけん、水火等の災一切の厄難虎狼獅子刀杖枷鏁、是の如き等の事皆悉く消滅して、見る者歡喜せん、命終已後惡趣に墮せず、當さに諸佛の淨妙の國土に生ずべし。

(二)次に地界の眞言印を結べ　右の無名指をば左の無名指●小指の內に入れよ、右の中指をば左の中指●頭指の內に入れよ、左も亦た之の如くす、餘指は並べ頭相ひ拄へよ、即ち想へ印火燄金剛杵の形となると、大指を以て地に著けて之を掣け、一たび掣いては一たび誦せよ、三に至らば便ち止んぬ、意の大小に隨て心を標せよ、即ち堅固の地界となる、眞言に曰く　唵枳里枳里嚩日羅二合引嚩日里二合部律二合半音滿馱滿馱吽發吒半音

此の印を結び及び眞言を誦して地界を加持するに由るが故に、下も水際に至るまで、金剛座の如く、天魔及び諸の障者惱害をなさずして、少しく功力を加ふるに速かに成就することを得。

次に(三)方隅金剛墻の眞言印を結べ　前の地界に準じて印二大指を開いて之を竪て、

(一)悉く是れ一本是れの字なし。

(二)地界の眞言印二大は金剛杵、二の水火を組むは金剛座なり、壇の大小は行者の心の大小に隨て橛を立て道場とす。

(三)方隅云云上は三股、下は獨股形なり影略互顯其の意知るべきなり

側めて墻の形の如くし、想へ印金剛杵の形の如しと。右に身を遶すこと三轉せよ、心に大小を標せよ、即ち金剛堅固の城と成る、諸佛菩薩尙ほ違越したまはず、何に況んや諸餘の難調伏の者をや、毘那夜迦及び毒蟲利牙爪の者の、輔近すること能はず、眞言に曰く　唵薩羅薩羅嚩日羅二合鉢羅二合迦引羅吽引發吒半音

(一)行者次に壇の中、八葉大蓮華の上に獅子座あり、座の上に七寶の樓閣あり、諸の瓔珞●繒綵●幡蓋を垂れたり、寶柱行列せるを想ふべし、妙天衣を垂れたり、周く香雲を布き普ねく雜花を雨し諸の音樂を奏す、寶瓶閼伽天の妙飮食摩尼を燈とせり、此の觀を作し已て而して此の偈を誦せよ。

(二)以我功德力　如來加持力　及以法界力　普供養而住

此の偈を說き已て

次に(三)大虛空藏普通供養の印を結べ　二手を以て合掌せよ、二中指を以て外に相ひ叉へよ、二頭指を以て相ひ拄へて反し蹙めて寶形の如くし、印を結ぶこと成じ已て眞言を誦せよ、四遍、普通供養の眞言に曰く　唵誐誐曩三去婆去嚩嚩日

此の眞言を誦して加持するに由るが故に、想ふ所の供養の供具眞實にして異ることな

(一)行者次に云云已下は道場觀なり。

(二)我功德力云云三力の偈、三力に依て道場莊嚴を成就す、第四句は或は願成淨妙刹、或は周遍衆生界といふ、處に依て文を異にし文異るに意別なり、但し第四句の甚深なる、大疏悉地出現品の釋參照すべし。

(三)大虛空藏云云此の印明に依て辨ずる供具皆な眞實廣大の供養となる、此の印、二の地水は寶幢、二火は蓮華、二頭は寶珠、二大は虛空なり。

く、一切賢聖衆皆な受用したまふことを得。

(一)次に寶車軨の印を結ぶべし　二手内に相ひ叉へて掌を仰け、頭指横たへ相ひ拄へて、二大指を以て各の頭指の根の下(もと)を捻し、七寶の車軨金剛駕御して、寶車空に乗じて本尊の極樂世界に去(ゆ)き至ると想へ、眞言を誦せよ三遍、眞言に曰く　唵都嚕都嚕吽(ウン)　此の眞言印の加持に由るが故に、七寶の車軨本尊の國土に至るに、本尊及び諸の聖衆眷屬圍繞して、寶車軨に乗じて道場の虚空に至て住したまふと想へ。

次に(二)請車軨の印を結べ　前の印に準じて大指を以て身に向へて中指頭(ちう)を撥し眞言を誦せよ三遍、眞言に曰く　唵爾曩爾迦(ジナウジキヤ)牛音　娜麼悉底羅野(ナウマシツチリヤ)四合(デビ)二地尾(ナン)引迦(キヤ)引嚩(タ)引一怛佗(タ)引蘖多(ギヤタ)引南(ナン)引二唵(パ)嚩日朗(ラウ)合二銀儞(ギニ)野(ヤ)引二合(キヤリ)羯利(シヤ)沙(シヤ)合二也娑嚩(ソワ)合二訶引

此の眞言印を結び加持するに由るが故に、聖衆本土より道場の空中に來至して住したまへりと。

次に(三)請本尊三昧耶降至於道場の印を結べ　二手内に相ひ叉へて拳に作れ、左の大母指掌に入れ、次に右の大母指を身に向へて之を招け、眞言に曰く　唵爾曩爾迦(ジナウジキヤ)牛音　唵阿盧力迦(ロリキヤ)牛音　唵嚩日羅特勒迦(バザラドリキヤ)牛音　阿蘖車阿蘖車娑嚩(アグツシヤアグツシヤソワ)合二訶

此の眞言印の加持に由るが故に、本尊本誓を越えざるが故に、即ち道場に赴集し給ふ。

(四)次に諸の作障の者を辟除し、蓮華部の明王馬頭觀自在菩薩の眞言印を結ぶべし。二手合掌して二頭指●二無名指を屈して、掌の内に於て甲相ひ背けよ、二大指を竪て開き、印を以て左に轉ずること三帀して、心に諸の作障者を辟除すと想へ、一切の諸魔此の印を見已て退散し馳走す、印を以て右に旋すこと三匝せよ、即ち堅固の(五)火界と成る、眞言に曰く　唵、阿蜜里(アミリ)二都納(トウドバム)合二嚩吽發吒(ウンハツタ)半音　娑婆(ソワカ)合二訶

次に上方金剛網印を結べ　前の墻印に準じて、二大指二頭指の下節を捻せよ、眞言を誦すること三遍して、頭の上(カシラ)にして右に轉ずること三匝して便ち止(とど)めよ、眞言に曰く　唵尾娑普(ビソホ)二合羅捺落(ラダラ)二合乞叉(キシヤ)二合(バム)嚩日羅(ジラ)二合(ハムジヤラム)半惹羅吽發吒(ハツタ)

此の網印眞言の加持に由るが故に、即ち金剛堅固不壞の網と成る。

次に(三)火院密縫の印を結べ　左の手を以て右の背に掩ふて、二大指を竪て眞言を誦すること三遍して、右に身を繞すこと三匝して、金剛墻の外に火院圍繞せりと想へ、眞言に曰く　唵阿三莽擬儞二合吽發吒(ウンハツタ)

(四)次に閼伽香水を獻(たてまつ)る眞言印。　二手器を捧げて想へ、聖衆の足(ミアシ)を浴したてまつると、

(一)次に云云　地水火の六指突ふるは六度萬行の因華にて即ち車軨、二風は軍の長柄二空は三等にして召請するの意。

(二)請車軨の印　印相と寶車と異らず、但し大指中指を撥び召くは佛智の故なり　娑(ギヤ)嚩(タ)引來の義にて即ち不來の來、故に初に娑あるなり。

(三)請本尊等　今印相は蓮華部心を出し眞言は三部心を出す。修行の時部に隨つて用ひよ

(一)次に云云　結界は部に由て替るも今は蓮華部に約して馬頭を出す。謂く大空の口を以て因業を食噉し法性の大空に契はしむ。

(二)火界　若しは大界の誤か。

(三)火院密縫の印　此の印の結び樣に多說あり、今は二大を立てゝ相著けず、十指の頭皆立てゝ十界を表す、安祥觀十照八道に之を用ふ。

(四)次に云云　蘇悉地には二手持花合す、今は鉢にして二風、火の背に付くるなり。

眞言を誦すること三遍、眞言に曰く　曩莫三滿多沒馱引南引誐誐曩娑葬引娑嚩二合訶引

閼伽香水を獻ずるに由るが故に、三業清淨にして煩惱の垢を洗滌すと。

(二)次に蓮華座を獻じたてまつる印を結べ。

二手虛心合掌して、左右の無名指●中指●頭指を舒べ開いて、屈すること微敷蓮華の形の如し、寶樓閣の內に在ます、想へ諸の聖衆及び本尊各々本位に坐したまひ、眷屬圍繞して了了分明なり、眞言を誦すること三遍、眞言に曰く　唵迦麼攞娑嚩二合訶引

花座の印を結んで眞言を誦するに由るが故に、行者當さに十地滿足することを得べし、

(三)當さに金剛の座を得。

(四)次に普供養の印を結べ　二手合掌して右を以て左を押して指を交へよ即ち成ず、

眞言を誦すること三遍、無量無邊の塗香雲海●花鬘雲海●燒香雲海●飮食燈明等雲海、皆清淨廣多の供養と成りて、普ねく供養すと想へ、眞言に曰く　曩莫三滿多沒馱引南引薩嚩佗引欠揾娜糞底娑頗二合羅嘓帥誐誐曩引劒娑嚩二合訶引

(一)次に云云　八指の末卿か屈むるなり。

(二)結べ　一本に「結ぶ當し」とあり

(三)當さに　或はいふ此の字恐くは衍文かと。

(四)次に普供養云云　虛空藏轉明妃なり、是れまた兩部に通ず。

十八契印は傳へて云く惠果和尙製すと。或は云く弘法大師の作と。今按ずるに、冊帖冊子目錄に云く、大聖歡喜天經一卷不空の譯、末に十八道頌次第あり。又云く、梵字十八道眞言と。此を以て之を思ふに、大師件の二本に據りて之を記せるか。

國譯十八契印　終

十八契印生起略頌就生起意

一莊嚴行者五種　淨佛蓮金及被甲
二者結界法二種　一地結二金剛墻
三者莊嚴道場二　道場虛空普供養
四者勸請法三種　送車請車亦奉請
五者結護法三種　當部明王網火院
六者供養法三種　閼伽花座普供養
初二供養別供也　唯別奉獻本尊供

文海撰す

後一供養總供也　獻本尊及諸聖衆
總六別十八軌則　是名十八契印耳
生起次第如何者　欲入秘密總持門
先須調淨莊嚴身　既身調淨莊嚴者
亦應加持淨界地　既界地加持事修者
當須莊嚴於道場　既亦道場莊嚴者
應請本尊大聖尊　既得奉請聖尊者
勇猛精進結護法　結護內外無障礙
然後當致供養也　不起于座成悉地

縮餘一、縮藏九至三、豐山錄外初一、慧運の本には義經といふ、此の義讃は總じて陀羅尼の深意を解釋す。

國譯總釋陀羅尼義讃

三藏沙門大廣智不空　詔を奉じて解釋す

如來百千倶胝阿僧祇劫に於て、菩提の資粮を積集し、陁羅尼眞言文字を加持し、頓悟の菩薩をして此れと相應して、頓に福德智慧の資糧を集めしめ、大乘修菩薩の道に於て、二種の修行を以て無上菩提の道を證す、所謂る諸波羅蜜に依て修行成佛すると、眞言陀羅尼三密門に依て修行成佛するとなり。陀羅尼とは梵語、唐翻には名けて總持の義となす、四種の持あり、法持・義持・三摩地持・文持なり、此の四種の持は、多くは顯敎大乘の敎の中の所說に依るなり。法持とは此の持を得るに由て一切雜染の法を摧滅し、淸淨法界等流の敎法を證得す。義持とは此の持を得るに由て、一字の義の中に於て百千無量の修多羅を(一)悟り、(二)行演說逆順自在なり。三摩地持とは此の持に由るが故に必ず散動せず、三昧現前して無量百千の三摩地門を悟る、(三)悲增の菩薩は故(コトサラ)に六趣に於て願を以て生を受け、煩惱・隨煩惱に其の三昧を壞られず、此の三摩地に由て五神通を證し、無邊の有情を成就し利樂す。文持とは此の陀羅尼を受持するに由て

(一)悟　一本に語に作る。
(二)行　若しは經の字に非るか。
(三)悲增の菩薩　智の勝れたるを智增と名け、大悲の勝れたるを悲增といふ。唯識第八に「悲增の菩薩は大悲增長の故に」と。

所聞を成就す、所謂る一切如來諸菩薩の所（ミヤト）に於て百千無量の修多羅を聞いて、永く忘失せず、其の眞言も亦た四義を具す。眞とは眞如と相應するなり、言とは眞詮の義なり、四義とは、法眞言といは、清淨法界を以て眞言となし、義眞言とは勝義と相應す、一一の字の中に實相の義あり。三摩地眞言とは瑜伽者此の眞言を用ふるに由て、心鏡智月輪の上に於て眞言の文字を布列し、專注して心散動せず、速疾に三摩地を證す、故に三摩地眞言と名く。文持眞言とは唵字より娑縛賀に至るまで、其の中間に於て所有の文字、一一の字を皆名けて眞言となし亦は密言といふ。亦た具さに四義あり。法密言とは㈠法外道及び、二乘の境界に非ず、唯し修眞言行の菩薩、所聞所持の軌則●印契●曼荼羅修行所求の悉地を法密言と名く。義密言とは眞言の中の一一の字、唯し佛と佛と大威德の菩薩とのみ乃ち能く究盡したまへり。三摩地密言とは、此の中の眞言の文字三摩地相應の威力に由て、眞言者の身の支分に遍布するに、麤重の身を變じて微妙の色身を易得し、五神通を獲得して、威德自在にして壽量無盡なり。聞持密言とは、師に從て密に三密の軌則を受く、唯し師及び弟子のみ自ら知る、餘人をして所知せしむるに非ず、乃ち本尊の形像印契觀門に至るまで、皆密に受持して心

㈠ 法外道　非法外道か。

所怖望の三摩地聞持不忘天眼天耳他心上中下の悉地を獲得し、亦た名けて明となす。四義法明を具すとは、修行者の稱誦する一一の字の中の光明、遍ねく十方世界を照して、一切有情の生死の苦海に沈溺せるを、皆無明煩惱を破して悉く離苦解脫を得、故に法明と名く。義明とは瑜伽者眞言の義と相應するに由るが故に、般若波羅蜜に通達し明了にして、無義の道理を遠離す。三摩地明とは、眞言の種子を心月輪の中に想ふに由て大光明を獲得し、自他照明の三摩地成就を作す。聞持明とは、聞持の法を證得し、能く癡忘の惑を破して菩提心成就を證得するなり。

如上の陀羅尼と眞言と密言と明との義は、梵文に依らば復た顯教の修多羅の中に於て稱說す、或は眞言密敎の中に於て是の如くの四を稱說す、或は一字の眞言乃至二字三字乃至百字千字萬字あり、復た此の數に過ぎてもあれ、乃至無量無邊なる皆、陀羅尼とも眞言とも密言とも明とも名く。若し三密門と相應すれば、多劫に難行苦行することを暇らず、能く定業を轉じて速疾に安樂成佛速疾の道を成じ易し。

國譯總釋陀羅尼義讚 終

國譯火吽供養儀軌

夫れ陀羅尼の法を修行せんと欲はゝ、先づ須らく道場を嚴飾し、內外清潔に衣服鮮淨にして諸の諠雜及び諸の戲論を離るべし、念誦の法則に依て四時に闕せざらん、若し一時を闕し及び法則に違せば、即ち違闕の後より起首せよ、作法已前までに縱ひ功を滿せんと欲すとも、唯だ一時を欠せん、其の時虧缺しぬれば亦た總じて成せず、要ら ず須らく終始犯すこと無くして、方さに遍數を論ずべし、其の遍數は當部の(一)本尊に自ら次第あるに準せよ、遍數訖已(テツヂ)なば(二)自ら境界あらん、或は恐らくは念誦の時三昧耶に違し、心に專的ならずんば妄りに緣起ることあらん、所以に相應すること能は ざるが故に淨境即ち現前せず、專修の行人は每月に、部に隨て必ず須らく力に隨ひ供養すべし、供養を闕するが故に亦た相應に非ず、部に隨ふとは謂く如來部は十五日、菩薩部は十四日、金剛部は八日、諸天部は五日、藥叉部は四日なり。供養の法みな日の初めて出づる時を用ひて、(三)壇の食甘美香脆餠食脂油細食を辨じ(四)銜蒸を著け、乳粥酪飡を作り之に酥蜜を加へ、種種の妙饌、力に隨ひて供養せよ、皆別の盤の中に種種の奠豆を置け、食を作るの時、及び將(ヤヽ)に道場に入らんとするに、

(一) 本尊　恐くは本尊の誤か。

(二) 自ら境界云云　此れ好相あるなり。

(三) 壇　一本に爐に作る。

(四) 銜蒸　一本に行の一字に作る。

皆軍荼利の心明及び(一)叉の印を用ひて諸の供具を印せよ、明に曰く

唵阿幷密栗二合多幷(ハツタ)柿吒(ヤ)中音

事事に皆呪三遍或は七遍、所以に諸の飛行の羅刹に盜竊せらるゝことを免る、若し作意せずんば、多く觸穢あつて諸の使者等隨喜を生せず、遂に成就を障ふ。

夫れ結界護身せんには、須らく迅速なるべし、遲疑猶豫することを得ざれ、恐くは猜疾の藥叉來て相ひ嬈惱せられん、是を以て結護し及び供養せん時、極めて嚴備すべく、事須らく迅速なるべし。夫れ供養せん時、先づ須らく洗浴清潔にすべし、道場の外に於て香水を身に灑ぎ、然して後に(二)吽字を(三)稱すること三聲せよ、即ち右の手金剛拳に作て觀想せよ、聖衆道場に遍滿して影の如く重重にして相ひ妨礙せずと、即ち禮すること三拜せよ、(三)外儀九遍を誦す。

次に大輪金剛の眞言を誦せよ三七遍是れ懺悔の法。

金剛合掌して雙膝を地に著けて、次に(四)嚩字を想へ、世界を焚き殄して灰塵の如くならしむと。次に(五)唅字を想へ、猶し黑風の如くにして飄激して淨ならしめて、復た塵淨なしと。次に(六)鑁字門を想へ、乳水に同じて淸徹皎鏡なりと。復た其の上に於て(七)

(一) 叉の印　軍荼利の三股叉の印。

(二) 稱　一本になし。

(三) 外儀云云　眞言、一禮に三返づゝ九返か、外儀及び誦すの三字詳かならず。

蘇(ソ)字門を想へ、妙高山となる、山の下に乳海あり、法界に彌漫す、山の上平坦にして果林芬葩水木清華にして澄滿照灼すと。次に香爐を執て焚香運想せよ、妙高山の上に於て百寶の廣殿あつて、寶柱無邊なり、寶刹に幡を懸く、寶幢の上に半月輪あり、輪の上に摩尼寶珠を耀す、行列して徧く矜羯羅網を布いて其の間に絞絡せり、（謂く帝釋網は皆是れ寶珠、珠珠相射て疊映し明徹す。）復た觀せよ、引阿字窓觀婆と成ると。復た想へ、靈塔大日尊と成りて寶蓮華に坐せり、正中（謂く正殿中）跏坐せり、四面に億億の蓮華を羅列す、一一の花中に皆聖者坐したまへり、謂く十方の佛來(ホトケ)て證明をなしたまふ、菩薩金剛前後に侍衛せり、二乘の諸衆無量無邊なり、天龍充塞して齊限すべきこと難し、其の上の空際に雅樂妙音清冷にして、情を悦ばしめ廣く佛事を作す、謂く淨居の諸天(ニ)妙妙樂を作す、諸衆の左右賢瓶閼伽（閼伽は香水なり商佉を以て抒とす。）香雲寶花繽紛として亂れ下り、香餐珍饈寶盤に流れ溢れ、芳果殊漿美味酷烈なり、寶衣掣曳して中場に光曜す、珠炬の曦暉衆色交映せり、是の如く運想し已て、次に念誦の法に依て本尊眞言に至るまで、略して誦すること多少せよ（一百八遍或は三七）

次に(ホ)虛空明妃及び(ヘ)廣大等の眞言を以て飲食を加持せよ、此れ則ち名けて法供養と

(一)妙々樂　意を詳にせず。

(ロ)虛空明妃　轉明妃なり。

(ハ)廣大　廣大不空、並に普供養なり。今案ずるに不二の供か。

なす、供養訖て念誦の法に依て撥遣せよ（一百八遍）其の火舍の法は、一(モッパ)ら前の法の護持及び念誦の法則に依れ、且らく其の火法に略して四種あり。

第一に扇底迦の法は、まさに北面すべし、鑊の法は圓に其の諸の供具は、皆悉く白色にせよ（大約(オホムネ)(一)普賢を主となす、然も當部に自ら對する法あるなり。）此れは謂く災ひを息め罪を滅するなり、衣服及び畫像等皆悉く白色なり。

第二に(ロ)補瑟徵迦の法は、まさに東面すべし、爐の法は方に作れ、其の諸の供具みな悉く黄色にせよ（大約觀音を主となす。）此れは謂く、滿願及び諸の勝事を成就す。

第三に(ハ)阿毘遮魯迦の法は、まさに南面すべし、爐の法は三角にせよ、其の諸の供具は皆悉く赤色なり（大約金剛手を主となす。）

第四に(ニ)擯(ヒヨウ)必孕の反迦縷の法は、まさに西面すべし、爐の法は(ホ)八角にせよ、蓮華葉の如くせよ、其の諸の供養皆紫檀の色なり、此は謂く大人に見えんと欲(ねが)ひ敬愛を求る法なり。已前の四の爐皆な方一肘にせよ（小尺の一尺八寸）深さは則ち之を半ばにせよ、爐の底は一の泥を以て獨股杵を捏(ひね)り作れ、杵の長さは八指、其の圓爐及び八角の爐には即ち羯磨跋折羅を作れ（謂く十字跋折羅）爐の脣皆な三重に作れ、內より高く外に向つて漸く低(た)れ、重ごとに皆濶さ四指

(一)普賢　曩和尚云ふ、此は中臺の大日なり今の曼荼羅中臺、大日尊は首陀會天、俯同像の身相にて加持身の大日の故に即ち是れ五秘密經の大普賢なる故に然れば是れ息災の部主な大日とするに契ふ。常の普賢としては道理に契はず。

(ロ)補瑟徵迦法等　大疏六にいふ。黄は是れ增益の色と。

(ハ)阿毘遮云　大疏に、赤は是れ降伏の義と。

(ニ)擯迦羅　畢哩孕迦又は冰迦羅と云ひ愛の義、今は敬愛の梵語。

(ホ)八角云云　八角は內形、蓮花葉は外相。

都て濶さ十二指 脣緣の上に任(ホシイママ)に畫くに花を作れ、如し畫くこと能はずんば即ち觀想して之を作れ、其の(一)火木及び香花等の物は並に右邊に置け、毎日三時にして日出の時、入定の時、後夜の時 時別に一百八遍、火木には穀(カチ)の木及び(二)夜合(ネムノキ)の木、桑の木、栢(カヱ)の木、松の木等を用ふ、其の木破り削るごとに大さは中指の如くし、長け十二指、節纇あらしむることなく、須く條直にすべし、中色の小樹を取て老枯の樹及び蟲ある者を用ひず、之を採(と)取らん時には必ず須らく好相あるを看て方さに採るべし、若し(三)不孝子及び不具足の人、婦人惡禽獸等を見ば、並に採るべからず、即ち別に之を覓めよ、一時毎に一百八枚を用ひよ、爐の右邊に於て(四)井欄を作て之を疊め、(五)塗香の法、白檀香一塊半斤以來の者を用ひて石の上に於て淨水を用ひて之を磨れ、沈香少分を兼ねて更に之を磨れ、又た欝金少分を用ひ、沈香を以て研磨(すつ)て細ならしめ、また龍腦亦た少分を用ひよ、もし龍腦欝金なくんば單へに檀香を用ふる事亦得たり。閼伽の法。淨く濾(こ)せる水を以て、少し計りの塗香をとり、淨水の中に點じて、妙好の淨華を以て此の水中に著き、亦た精しく新淨の瓷椀を須(も)て之を盛れ、また香水一瓶を用ひて、當さに坐する前に於て爐に對して之を置くべし火供養には、左の手には杵を執り之を按せ。丸香の法。(六)沈香二兩、淺香八兩、蘇合三兩、香附子一兩、安悉香二兩、熏陸香二兩、青木

(一)火木 護摩木
(二)夜合木 合歡木、夜時に其の葉合するを以てネムリの木といふ、敬愛に用ふ。
(三)不孝 一本には老の一字に作る
(四)井欄 檀木を積むこと井形の如くす。
(五)塗香 閼伽の法共に作る作法、常に之を用ひよ。
(六)沈香 淺香と同じきか。本草時珍の注に「木の心節、水に置けば則ち沈む故に沈香といふ、亦水沈といふ、半ば沈む者を淺香とす云云

香一兩、(一)唐唐二兩、白檀香二兩、龍腦香一分、欝金香一分、麝香(二)一分、已上の(三)三物同一處に研(スツ)て、甲香二兩漿水を以て煮洗蜜を以て和し炒て乾かしめ別に之を搗く。右和合して錬蜜を以て(四)所を得しめ、最後に龍腦等の三味を入れよ如し鄕土に得がたしとならば得るに隨ひて辨ぜよ。秣香の法。甘松二兩、零陵香二兩、芎藭二兩、丁香一兩、澤蘭二兩、沈香一兩、好淺三兩已上共に搗け(五)蘇合二兩、龍腦欝金麝香各の半分別に絹袋に盛れて諸(六)秣の中に著き了る白芥子は別に盛れ。三味法。酥蜜酪毎時各三四計り、酪は則ち減ぜよ半相和して一銅盆に之を盛る。五穀法。稻穀花(七)糠米を油を以て煮及び紫赤黃等の色に染め作せ、名けて稻穀華とす一器に盛る。(八)油麻(九)菉豆・小豆・小麥・粳米已上相和して別に一器に盛る常合香の法、謂く龍腦如(も)し無くんば合白豆蔻子一兩粒亦た得如しなくんば丁香も亦た得供養の火食爐食及び乾棗栗黃沙糖石蜜、力に隨て辨(ソナヘ)具よ。初め供養召請結界護身、一(モツパ)ら前に結界を列ぬる時の如くして、地橛金剛墻金剛網金剛火焰無動の刀の印明等を加へよ、召請の時各各八方護法天王を召請して、各誦七遍して同じく金剛召請の印を用ひて先づ(一〇)火天に供養せよ、明三味三杓五穀丸香安悉香等を以てして、然して後運心して普く五部の聖衆に供養して、廣大の眞言及び虛空明妃眞言等を誦せよ、次に本尊眞言を誦して火木を燒き、兩頭三味に搵して誦すること一遍して、即ち爐の中に擲げよ、仍ほ須らく志を定(しづ)めて安詳にすべし、卒暴なることを得ざれ。次に火木を投ぐること總て畢り

(一)唐唐 薔薇なるか。
(二)一分 一匁二分なり。
(三)三 恐くは寫誤か。
(四)所 多からず少からずの意。
(五)蘇合 種種の名香を合和するなり。
(六)秣 米の粉。
(七)糠米 煎米(イリゴメ)のこと、俗にハゼといふ。
(八)油麻 胡麻。
(九)菉豆 豌豆。
(一〇)火天の下 恐くは各誦其本の四字あるか。

て即ち五穀を燒(た)け、娑嚩訶の前に至るごとに、所祈法を加へよ、謂く某甲扇底迦娑縛訶なり數々(シバ)香水を以て徧ねく諸物及び火等に灑げ、水を灑ぐ時には軍荼利の心中心の明を誦せよ。

初に火を燃せ、眞言に曰く

唵部(ボ)嚩(リツ)惹(ジヤ)嚩(バ)二合 邏(ラ)三七遍

扇を以て火を扇げ、口を以て吹くことを得ざれ、其の火は寺內の淨處に於ては、俗家の葷穢を煮炙するの火を取ることを得ざれ、然らずんば即ち須らく別に鑽り取るべし、仍ほ口を以て吹くことを得ざれ、兩(フタツ)の香爐を用て軍荼の右邊には丸香及び沈香を燒き、軍荼の左邊には安悉香或は熏陸或は白膠香を燒け、其の供養物の數、時に隨て豐約にせよ、豐なりとも則ち多く燒くべからず、約なりとも則ち闕せしむべからず、如(も)し供養を辨ずること能はずんば、但し後夜及以び晨朝に於て運心して廣く獻ぜよ、多く廣大及び虛空明妃を誦することも亦た得。木を擲げて火を燒くには(一)火の相を看るべし、火色の法は白黃赤なるべく、若し黑色及び青色ならば並びに惡し、又た火の聲を聽け、謂く音樂悅意の聲ならば善し、若し猪狗及以び驢騾鳥梟等の聲あらば不善なり、又た焰を發し掣曳流利ならば善し、若し熅勃煙欝して人を衝かば不善なり、或は爆

(一) 火の相云云 白は息災、黃は增益、赤は降伏、青黑は惡相なり、平常の護摩も之を考へ。

吒の迸り散せば亦た非善の相なり、善相の法は人をして熱せしめず、其の炭仍ほ端直に調均なるべく、香水を用ひて徧く洗ふべし、皆長(タケ)十二指より以來(コノカタ)にせよ、其の八天の眞言及び火天の眞言は、已に別錄せり、具さに火の色若し吉ならば、則ち爐に果子を燒いて供養に充つべし、火の色若し不善ならば即ち燒くべからず、火を燒き供養すること(一)七日を限りとなす、如(も)し事已むことを獲ずんば、三七日することも亦た得、此の火供養の法は、以て念誦を資(タス)けて、速かに成就せしむ、其の阿毘遮魯迦等は亦たなすべからず、成就を求むるが爲めに、大緣を妨ぐるが故に、或は觀想及び夢寐の間に於て遇ふ所の境界は、經に廣く明すが如し、此には具さに述せず、火法また速かに成せずんば、即ち部母の眞言を加へて(二)雙べ誦すべし、又た三七日より來(コノカ)たを經て部母の眞言を加ふれども、本志を遂げずんば即ち塔を印すること毎日に一千遍して、また三七日を經べし、必ず志を果さん。其の塔の印は長(タケ)一肘にせよ、亦た自ら須らく自力の多少業行を籌量すべし、精微は課數ありと雖も(三)秉護麁疎なれば亦た相應せず、事三業調柔なるべく、事法淳熟せば自ら觀察すること、理と相應して自ら聖者を感ずること、猶し明鏡に自ら境の像(カタチ)を現ずるが如くなるべし。(四)

(一) 七日を限りとす 常の初行護摩に一七日修せしむる是れ本據。

(二) 雙誦 部母の眞言に所持の眞言を續誦するをいふ

(三) 秉護 心をとり護ること。

(四) 一本に、「然して後に道場を出で行住坐臥心に本尊眞言を念じて間斷ならしめず」此の文是の本になし。

縮餘一、續藏九套四、豊山錄外初三此の軌は別壇、護摩の軌則なり、初日等の文、一本に皆注書す、此は初に七日作壇の法を說く。

(一) 如來性　法界體にして孔字なり是れ初日の作法。第二日に白點を以て聖位を定む是を白壇曼荼羅といふ

(二) 瑜伽　一本に瑜祇に作る。

國譯建立曼荼羅護摩儀軌 法全

初日には(一)如來性を以て自身を加持し、及び地神を供養し警せよ、地中の諸の惡物を擇び築いて堅實ならしめよ、第二日には壇の內に於て一肘を堀りて、不動の明を以て五寶等を加持し、聖尊の位を定めよ、五佛四菩薩より白檀を以て位に點せよ、第三日には瓶を置いて不動の明をもて加持すること一百八遍、第四日の暮には次に香水を以て眞言すること一百八遍して、然して後に灑淨せよ、第五日には護身供養せよ、不動或は降三世を以てし一百八遍せよ、次には持地の明、第六日の夜には師弟子沐浴し、淨衣にして壇に詣し如法に供養し、印と相應して手を以て中胎を按せよ、明を持すること一遍、一たび按して乃至七遍せよ、諸尊の位も亦た準せよ、第七日には次に弟子に敎へて、三歸懺悔して菩提心を發すなり。

一切の薄伽梵　及び法諸の菩薩　密跡大忿怒を　稽首し歸命して禮し奉れ

(二)瑜伽を修するものを利せんが爲めに　速かに大悉地を成じ　諸の過を遠離して　曼荼羅を建立し

并に護摩の法を陳べよ　善住瑜伽者　先づ淨法界を以て　器世間を安立せよ

妙菩提心を觀じて　身薩埵に同ぜよ　色碧頗梨の如し　羯磨輪に住せよ

大眞言王を以て　身の支分に遍滿せよ　暗字頂にあり　欠暗をば左右の耳にせよ

額に在くを名けて惡となし　糝索をば兩肩に在け　唅鶴をば咽心に作し　嚧嚩をば齋腰となし

鑁囀を胜足となし　三處にせよ弟師壇　法の如く以て加持して　普遍く焔鬘を成ず

良日時分の　宿曜悉く相應するに遇て　食前に吉祥の相あらば　當さに地を揀擇して

諸の過惡を除去すべし　先づ諸の如來を禮し　地神を警發して　應さに是の如くの偈を說くべし　梵文は胎藏の如し

汝天親護者　於諸佛導師　修行殊勝行　淨地波羅蜜

如破魔軍衆　釋師子救世　我亦降伏魔　我畫曼荼羅

(一)地神持次第の眞言　淨土變の言なり。行者地神の威儀に住して此作法を作す、地を按するは地は地神の體なるが故に、即ち地神を按ずるに同じ。
(二)金剛縛して云云　此の印相、青龍の軌と同じ。

長跪して右の手を舒べて　地を按じて頻りに偈を誦せよ　塗香華等を以て
佛菩薩
及び地神眷屬に供養せよ　灑ぐに淨香水を以てせよ　然して復た其の地を治せ
よ　(一)地神持次第の
眞言に曰く　唵部入欠(ランボタ引ケン)
(二)金剛縛して掌を開け　仰け按して習すること三七　覆按することも亦た復た
然せよ　即ち堅牢の地と成る
掃灑し及び塗拭せよ　先づ七日前　日暮に香華を持して　獨り壇を置く處に入れ
面東にして香爐を執りて　地を啓請する偈を誦せよ。
諸佛は有情を慈愍す　唯た願はくは我等を存念せよ
我今諸賢聖を請白す　堅牢地天幷びに眷屬
一切如來及び佛子　悲願を捨てず悉降臨す
我此の地を授りて成就を求めん　證明を作さん爲に我を加護せん三遍
慇懃に奉請し已んなば　聖衆普く雲集す　大日清淨の身　法界に周遍し

十方の佛も亦た然なり　三業至誠にして禮せよ　雙膝を長脆して　定に金剛
杵を持して
心に當てゝ直く之を竪てよ　慧の手五輪を舒べて　掌を平にして地を按せよ
前の如く地神を警せよ
誦し已る毎に按せ　本眞言を習せよ一百八遍　至誠に啓告すべし　仰いで諸の如來
諸大菩薩衆　聲聞及び緣覺　天龍並に八部　此の處の靈祇等に啓すらく
我れ某甲求むる事に隨て之を告白せよ　持明藏敎に依て　某の尊の眞言を持して　無上道を求
めん爲めに
此の地中に於て　曼荼羅を建立して　念誦を精修せんと欲す　願くは尊、本
誓を憶して
我が此の建立を許して　我を護助して　天魔惡鬼神をして　惱亂して障難を
作さしむること勿れ
釋迦道樹に坐して　衆の魔怨を降伏したまへり　我れ今亦た復た然(しか)す　若し
諸の障難あらば

願くは諸佛菩薩　當さに我に先相を示すべし　鬼神をして　詐つて誑惑を現せしむる勿れ

若し障難なくんば　願くは吉祥の境を見んと　寂默として以て安坐して　本眞言明を持すること

一千一百等せよ　諸の思想を離るべし　數畢已て安に眠れ　菩提心に專注し

月輪の如意珠　內外極めて明徹にせよ　成就不成就　悉く心鏡に於て現ず

不善なるに强いて作さば　恐くは自損を招かんことを　先相善くんば建立せよ

壇處の當中に置いて

(一)頓方に各一肘せよ　之を掘て瓦石を去れよ　却て塡めて築いて平生にせよ

其の虛實の相を驗せよ

若し建立に堪ふれば　不動の母捺囉(二合)を以て　百八して其の地を護せよ　然して後に總じて堀るべし

(二)鍬印は金剛縛して　禪智進力竪てよ　眞言に曰く二十一　唵(ヲンニ)佉(キヤナウ)那(バソ)嚩蘇上提(ディソ)娑嚩(ハ)(二合)賀(カ)引

(一)頓方　蘇悉地の三に、頓方四角とあり、明本に須方といふ明本然るべきか。

(二)鍬印　印言は瑜伽の軌と同じ。

諸穢惡の　堪へざるを揀び去つて淨土を替へよ　重重に香水を灑いで　平實にして淨鏡の如くせよ

心壇五寶を置く　謂く金銀眞珠　(一)瑟瑟頗黎寶なり　靈藥は謂く赤箭と

人參と伏苓と　昌蒲と天門冬となり　稻穀と大小の麥と　菉豆と胡麻等なり

沈香と檀と丁香と　(二)鬱金と龍腦香となり　金銀の器に盛りて　地天以て結護せよ一百八

香水瞿夷に和して　無能勝を以て加持せよ　或は馬頭明王　塗地の眞言に曰く

東北の隅より右に旋て塗拭せよ、蓮子華蜀葵葉茅香墨土相ひ和して法の如く淨く揩磨して光淨ならしめよ。

唵(ヲン)迦(キヤラ)羅引黎(レイ)一摩(マカ)訶(キヤラ)迦囉引黎(レイ)娑(ソハ)嚩(ハ)(二合)賀(カ)

掃地の眞言に曰く再び香水を灑淨せよ　唵(ヲンカ)賀(ラカ)囉(ラソ)賀(ラカ)囉(ラソ)祖(キヤラ)仡囉(ハ)(二合)賀(カ)拏(ダヤ)野(ソ)娑(ハ)嚩(ハ)(二合)賀(カ)

白檀を以て尊位を塗り　辨事の明千遍せよ　次に慈悲眼を以て　諸の衆生を觀念して

(三)甘露の明を習へ　想へ其の自心の位　導師所住の處に　八葉意より生ずる

蓮華極めて嚴麗なり　圓滿月輪の中　無垢なること淨鏡のごとし　彼(カシコ)に於て

(一)瑟瑟　綠寶なり青黑色にて瑠璃に似る。

(二)鬱金　二あり一は惡臭あり染色に用ふ、一は黃色にして金に似、香甚しく香具とすべし。

(三)甘露　甘露王三昧に住して說き給ふ呪の故にしかいふ。

常に安住す
眞言救世尊　金色にして光儀を具し　毒を害して三昧に住せり　日の瞻視し
難きが如し
諸の仁者亦た然なり　其の圓鏡の中に於て　自ら其の身相を見るに　佛身に
等同なり　此の觀を作すには、先づ外緣を觀じて後に己身に引入せよ。
(二)行者佛室に在りて　頂髻の百光明を以て　遍ねく無邊刹を照せ　善く心氣
を調へて
阿字の明を連誦せよ　一息より乃ち三に至て　力を盡して當さに念誦すべし
覺觸して心相應し
一切の分別を離れ　淨法界の體より　曼荼羅を建立せよ　世尊
及び般若佛母を頂禮したてまつり　次に綵色を調へて　護するに無能害を以て
せよ　諸聖尊を運布して
而も畫いて身を莊嚴せよ　(三)次に護摩の　微密成就の法を陳べん　即ち新淨
の室に於て

(一)行者云云　行者の坐處は一佛二明王の中間なり、胎藏に約すれば較若佛母の位を坐處とし、金剛界に約すれば金剛波羅蜜の坐位なり、眞言の行者は其座に坐して密行を修すべし。

(二)次に云云　上は大壇の建立を明し以下正しく護摩を明す。

道場を建立せよ　妙香華を陳設して　虔誠にして供養せよ　法に依て以て結
淨せよ
息災と增榮と　敬愛と降伏と等なり　威神能く測ることなし　能く天地の法
を廻し
功用涯際なし　(一)巨に含靈の福を展ぶ　其の祀火の諸の壇　加臨して頗る衆
し
類に隨ひ諸願を求むるに　各各にして差別なり　護摩に略して二種あり　謂
く卽ち內と及び外となり
內護摩と言ふは　彼の諸の衆生は　皆業より生ずる所なり　業を淨除せば
卽ち是れ解脫を得　能く故業を燒くは　所謂る菩提心なり　名けて內護摩と
いふ
彼の世間の火の如きは　物を燒いて灰燼となす　今は此れ則ち然らず　己が
猛利の智のために
一切の煩惱を燒くに　劫燒の火の　遺燼あるとなきが如く　三處同一體なり

(一)巨等　巨は大、含靈は有情を指す

(二)大壇即ち護摩　護摩即ち己身　己身即ち火天　火天即ち大日

身口意和合の　三平等にして異りなし　三身を具足して　量法界に周遍す

不生亦た不滅にして　言を離れ言相を離れたり　生と無生と　大日尊に非る

ことなし

阿字門を觀せよ　本不生の義、即ち是れ菩提心なり、今顯見せんと欲するに何の方便を以て之を見ることを得ん　惑障に覆蔽され

たり

猛利智に入て　周匝して光焔となり　劫火の熾盛なるが如し　刀及び絹索を

持して

業煩惱　無明の株　等を焚燒して　復た遺餘あることなし　次に菩提心を觀

せよ

沐するに大悲水を以て　當さに身中に遍すと想ふべし　白甘露を流注して

十方の刹

熱惱の諸の衆生に灑ぎて　菩提の芽を滋長す　次第に諸字を生ず　即ち是れ五輪の字なり以て佛身を成ず

(二)大壇即ち云云　二壇別なるも而も一なることを明す、此の三平等觀、安流は酥油の時合の觀を作す他流は別に之を觀す。

即ち此の法身　祕密內護摩と名く　復た次に世尊の言く　我れ成菩提の後に

(三)十二種を演說す　智火を最も初となす　大因陀羅と名く　即ち金剛の別名なり金剛杵の形と作る、

即ち方座なり、但し四角壇中に本尊ありと觀ぜよ　菩提心の薪　即ち金剛座を表す

其の尊極て端嚴にして　焰鬘にして圍繞せり　寂三摩地に住せり　此れ即ち是れ毗盧遮那

なり、亦た內火法身の義なり下皆な準ぜよ

觀じ以て密言を誦して　能く一切の事を成す　順世の方壇爐　所供と服と皆

な黃なり

第二の行滿火　像形秋月の如し　光暉普ねく周遍し　身衣潔白の色

月輪曼陀羅　持珠及び軍持　水火蟲霜　自他の身の疾病

種種の惡災禍　猶豫不定の心を除く　此の火能く淨除す　第三を摩嚕と名く

形色極めて黑燥　塗炭等の如し　降伏の火なり　帛を執て風の吹く勢なり

風輪半月の壇なり

謂く彼の修行者　疑心數〻進退し　無始の妄惑　煩惱の根未だ除かざる爲め

に

常に繞て纏縛せり　以て暗障蔽を加す　數〻此に依て燒除せよ　散壞して重

(三)十二種を云云　大日經護摩品と大いに同じ。

雲を去れ

第四には盧醯多　身形相端滿なり　三角にして光燄鬘なり　色赤初日の暉な
り

刀を執て徴し怒相なり

第五には沒栗拏　尊形淺黄の色なり　身上に髭鬢髮あり　頂に大威光あり
目左は怒り右は笑み　色左は赤く右は黄なり　座左は方に三角なり　定には
刀、慧には杵を持せり

能く二種の事を成す　攝召と息災と倶なり

第六には忿怒火　尊の形色焔の如し　一目を閉ぢて大吼し　狗牙上下に現せ
り

蓬頭の髮上さまに聳えたり

第七をば溫腹と名く　即ち大般涅槃なり　二事火と風と倶なり　迅疾極めて忿怒なり　殃字五色を
具す

第八をば費耗と名く　色衆電を集むるが如し　極めて瞻視すべきこと難し

金剛輪の中に坐して

能く重障　及び頂行眷屬を除遣す

第九をば意生火　此の尊意に隨て成す　普門種種の身　大力自在慧なり

十をば羯攞尾と名く　其の尊右の手を側てゝ　淨行の唵の印と聲となり　第
十一（梵本に名を闕く）

十二には謨賀娜　尊形劫災の火なり　道場にして魔を降伏す　若し諸の有情類
惡を造て止むべからず　勸導すれば轉更に增せむ　其の火能く淨除す　方便
して以て制伏す

迷惑して知るなからしむ（意密）　漸次に道に引入す

次に四微密　儀軌を陳べん當さに修習すべし　本尊と眞言と印と　身口意と
相應せよ

三位正しく和合して　而して諸の事業を作す　外に由て內に引入するに　義
理差別なし

息災は初夜に起れ　增益は初日の分にし　中には猛利降伏をせよ　鉤召は一

切時になせ

夜に於て敬愛をなせ　(二)扇底迦寂災は　聰明及び長壽　並に障難を除く法な
り

五星陵逼せらるゝと　種種の諸の災難と　口舌と及び鬪諍と　王宮に逼迫せ
らるゝと

內外和順せず　七曜常の度に乖くと　風雨時を以てせざると　疫病と及び荒儉
鬼魅の諸の不祥と　是の如くの災起らん時に　面を北にして膝を交へて居し
膝を竪てゝ右の膝を先めよ

衣服は嘗さに潔白にすべし　食飮香華地　燈燭亦復然なり　月輪に眞言を布
け

文字亦た白なるべし　三解脫觀に住して　空三摩地に入り　運心して法界に
周ねし

豁然として一法なく　須臾の頃に心を澄し　一切の見を滅除せよ　空執を除
かんがために

無相三昧に入て　彼の一切の相を離れよ　次に無願三昧　彼の眞如智に於て
相を離れ本空寂　亦た願求する所なし　三摩地より起て　諦かに想へ心臆の
間に

圓明一肘なるべし　即ち菩提の心なり　猶し秋の月光のごとし　澄明にして仰いで心に
あり

次に本尊の口の　所持の秘密の句を觀せよ　分明に字道を成じて　瑜岐の口
に入れよ

文字右に旋布して　心月輪に列なり　字字皆金色にして　大光明を流出す
身心散動せずして　阿字門に入れば　則ち一一の字に於て　實相義を思惟せ
よ

此を三昧の念と名く　先づ歸命を並べ誦して　三七して乃ち之を除け　唵よ
り起して初となし

某甲がために禍を除けと　娑嚩賀は最後なり　本に無くんば事に臨んで加せよ
念誦は小聲を以て

(一)扇底迦云云以下の四種法は恒と異なる。

當さに寂靜の意を須ふべし　護尊は忿怒の相なり　若し火壇を作らば　圓に
其の鑪形を穿れ
或は方　量一肘深さは半にせよ　爐の底に泥を以て輪を作れ　其の輪は八輻
を具せり
一撰（チャク）は是れ其の量なり　高さ一指　四節を周界となす　壇を塗るに純白色にせよ
餘香は準ぜよ　壇の上には祥茅草をしけ　日に隨て右に旋布せよ　本を以て其の苗（ヌエ）
を覆へ
或は衆の彩色を布け　形輝極めて嚴麗にせよ　一切續（エダイ）て事成せよ　沈香蘇燈
を燒け
鮮妙の諸の華果　飲食を供養とせよ　月の初より八日に至る　三餘時に護摩
せよ
慈心にして歡喜を生じ　一切を顧視せよ　是れ略護摩の處なり　辨事の明を
持すべし
或は不動　吉理明王を以て　結護して諸物を加へよ　慧羽の空、地を押し

餘波羅蜜を舒べよ　逼ねく灑ぐに香水を以てせよ　眞言に曰く　唵吉哩吉哩
嚩（バザラ）日羅二合吽泮吒（ウンハッタ）
諸の事業を作さんと欲せば　結壇の法を成就せよ　身及び弟子を護り　諸の
障難を辟除せんに
此の印明に由るが故に　淨居の諸の天子　常に其の處に來りて　觀照して速
かに驗（シルシ）あらしめん
(二)鑪は曼荼羅に對して　外に相望めて別に作れ　所供は大壇の如し　(三)半鑪
に炭を燒いて充てよ
樹の中の所出の枝　乳木乾柴等　軍荼の中に擲げ　燈火を以てして舊を以て
すること勿れ
扇を用ひよ口を以て吹くに非ず　即ち香水を灑淨せよ　爐に燃して後の明を誦
せ　唵步入嚩二合攞吽
火既に光焰を發し　忿怒王を以て去垢し　契明を以て逼ねく物を加へ　觸る
る每に皆明を稱へよ

(一)鑪は云云已下は別壇護摩の出處なり。
(二)半鑪に云云檀木之を置かず、炭火を以て護摩するなり。

前の根哩の眞言なり、四輪背相ひ叉へ　便ち火焰中に於て　囉字ありと想へ
旋轉して慧を定に加ふ
變じて(一)火光尊と成る　身色赤く髮黃なり　三目にして四臂を具せり　身に
遍して火焰光あり
智者右の手を展べ　空輪屈して掌に入れ　押すに地水火を以てし　風を曲鉤
て呼召せよ
我今稽首し請したてまつる　火天上首の尊　天中の大仙　梵行崇敬せらる
護摩供を納受したまへ。
唯願くは此に降臨して　護摩供を納受したまへ。
(二)奉請の眞言に曰く　唵(オン)翳係曳(エイケイエイ)合　嚩(バリ)哩使(シシ)合　持尾(ジビ)合　惹婆多(ジヤヤタ)麼仡哩(マカリ)合
嚩(バリ)哩(リ)合　帝賀曩(ティカナウカ)賀曩(ナウカ)吽泮吒(ウンハツタ)
唵(オン)翳係曳(エイケイエイ)合　嚩(バリ)哩使(シシ)合　持尾(ジビ)合　惹婆多(ジヤヤタ)麼仡哩(マカリ)合
嚩(バリ)哩(リ)合　帝賀曩(ティカナウカ)賀曩(ナウカ)吽泮吒(ウンハツタ)
娑嚩(ソワカ)合二賀
火天來赴して坐せば　印を以て火を灑淨せよ　(三)茅草を以て小束に作れ或は三股の印、水を爐中に灑いで火を淨めよ
眞言に曰く　唵(オン)阿蜜哩(アミリ)合二帝(ティ)賀曩(カナウカ)賀曩(ナウカ)吽泮吒(ウンハツタ)
華を軍荼に散して　闕伽香水を獻せよ　金剛拳にして風を舒べて　用つて闕
伽水を攪せ

右に轉じて爐中に灑げ　想へ火天の口に漱ぐと　吉祥の眞言に曰く　唵(オン)嚩(バ)
娜縛日羅(ダバザラ)合二曇
護摩の諸の支分　備さに右邊に在け　二杓空器の物　蘇蜜油柴等
其の左に安し在け　當さに護摩の儀を以て　兩手雙膝に在き　右旋して順に
轉せよ
(一)定の羽珠杵を持せよ　(金剛拳にせよ)　風を舒べて大杓を幷せ　小をば慧手に持し
三度名蘇を取て　其の大杓に灌いで滿て　慧小を捨てゝ大を執て　句の終り
に火上に沃し
火天の口に投げよ　油と蜜と乳酪と　(二)乳粥と五穀の粥と　粳飯と稻穀華と
次第に皆三たび獻せよ　甘果李子木　薔薇乳樹等　沈檀栢楓の構
量の長さ一磔手にせよ　(或は十指或は四指、臍は頭指の如くせよ)　兩の頭皆蘇に搵け　軍荼の中に投
げよ
三遍或は二十一遍　丁香●白檀●沈　熏陸●龍腦香　荳蔻●白芥子
或は一百八遍　及以び蘇合香　半は末とし半は丸とし　丸には蘇蜜を以て和せよ　前に準じ

(一)火光尊　火天
(二)奉請の眞言　瑜伽の軌に同じ。
(三)茅草云云　茅草束を以て水を灑ぐ。
(一)定の羽云云　左に珠杵を持する本文。
(二)乳　一本に酥に作る。

(一)行人云云、行人とは弟子なり、地とは師の左の小指、彼の空とは弟子の右大指。

て火に投げ

三度皆此の如くせよ　或は一百八遍、或は二十一遍また小杓を以て二十一遍火に沃す　眞言に曰く

阿(アギヤナウ)曩(二合)曳(エイカ)賀(ビヤ)尾野(カビヤ)賀(ビヤ)尾野(バ)嚩(引)賀曩(ナウヤ)野(デ)地(ヒヤ)比(チ)野(ヒヤ)地(ヒヤ)比(チ)野(ヒヤ)扇底(センチ)、增益には布瑟置(ホシユチ)　倶(クロ)嚕娑嚩(二合)賀

賀字其の聲を引いて　却て聲を按じて齊しく果　(一)行人其の左にあり　師慧

を以て杵を執り

地彼の空輪を鉤して　火天に食を施さしむ

寂災の護摩眞言に曰く

曩莫三曼多沒馱(引)喃(一)阿(アアク)去(マカ)摩賀(引)扇底(センヂ)蘖(ギヤタ)多(二)扇底(センチ)迦(キヤラ)羅(三)鉢(ハラ)羅(エン)餤(マ)摩(ダラマ)達(ニリ)摩(ジヤタ)伱(入)睒(ジヤタ)多(四)阿(ア)

婆(バン)嚩(ソバ)娑(ソバ)嚩(二合)婆(バン)嚩(バ)(五)達(ダラマ)摩(サンマン)三(タ)摩(ハラ)多(ハラ)鉢(ハラ)羅(二合)鉢(ハタ)多(二合)娑(ハタ)嚩(二合)賀

火天を請して爐を出し　東南方位(クラヰ)に就けよ　次に香爐を執て　本宮曜

及び命業胎の宿を請すべし　拳印にして風火鉤せよ　供して以て本位に歸した

てまつる　次に本尊を請せよ

兩手に時華を捧げて　去垢し及び光澤せよ　或は部主加持　即ち當さに爐を隔てゝ

(一)羅惹　さきは王なり、五佛頂經五に云く、火食供養の六種とは一に國王王族、二に大臣僚佐、三に過現一切の師僧父母、四に業道冥官、五に十方施主、六に十方法界、六道四生、三途八難、一切有情、今も此の如く三度護せよ。

想へ華諸座に遍すと　前の如く再び火を淨めよ　尊を請して爐中に入れよ

各の本眞言を以て請して一一に供養せよ或は當部並に眷屬

誠心に而も供養せよ　專注して聖衆に於て　廣大の雲　飯食幢幡蓋を流出し

て

微塵の刹に遍ねく　聖天衆に奉獻せよ　光明の照觸する所　三惡の諸の有情

苦を息め身心樂し　乃し護世天に至る　三遍護摩し訖れ　所供の香華食

總べて皆相ひ和して　(一)羅惹(アランジヤ)のために護摩せよ　眷屬並に百宦　法界の諸衆

生と

自身とに各の三たび護せよ　滅惡趣眞言を以て三五七遍す金剛頂經に出づ　最後には爐の四面の　食飲諸

の果子を

加持して以て護摩せよ　師出でゝ手を洗ひ已て　又復た淨處に於て八方天を祀れ

一一に諸天等を供す並に別文の如し、復た飯食を取て小盆中に置いて四方の鬼神等に施せ　還り來て再び火に祀れ　及び宿曜等皆三遍祀れ

歡喜して諸天に辭(もう)せ　大天自在威神力　能く衆生の無量願を滿し　所求者の

願を皆成せしむ

增榮及び富饒を求めしめ、愛敬を求めしむ、願皆成ず

諸天に稽首して本宮に歸したてまつり　後に誠を至して哀請すること有るの時　唯願くは此に來つて供養を受けたまへ

眞言に曰く　吉理吉理囉日羅二合目(ボク)(一)賀

若し增長を求めば　布瑟置迦と名く　喜悅の心と相應せよ　月の九より十五に至り

五通と及び寶藏と　劒と輪と杵と財物と　藥丸と眼藥と俱に　遷榮と壽命を增すと

福智と及び名聞と　職任と(二)王官に依ると　吉祥勝安樂　面を東にして結跏趺し

衣服皆黃色　眞言の句を增減することなく　前の如く復た殊りなし　供養の雲を專注して

十方界に周遍し　及び諸有情を照して　皆榮盛　富貴及び延壽を獲せしむ

即ち此の光明の雲　彼の所住の處に於て　七珍の資具を雨らし　復た天の甘露を雨らし

(一) 目の下恐くは裟囉二合の字を脫するか。

(二) 王官に依る一本に王宮に仕ふるに作る、此の方佳ならん。

行人の心に灌注す　爐は方にして二肘量　周圓の深さ半肘にせよ　底に三股杵を安じ

量は前に準ぜよ　塗るに檀麝金を用ひて　白檀は燒香となし、油麻は油燈　光音及び歲星

榮友意宿等　前の印　所供は前儀に準せよ　若し歡愛法を求むるは

縛施迦羅と名く　喜怒の心相應す　十六より二十三までにせよ　人及び天龍

鬼神非人の類を召し　一切に敬愛せらる　家國及び眷屬　怨敵諸の朋友

和順して歡喜す　及び妙辯才を求むるに　天龍八部衆　諸佛及び菩薩

聲聞(一)因緣覺　一切處を護念す　所求の願滿たば　面を西にして半跏坐し

增長を求むるを上ぶこと同じ　某甲と與に某を攝し　明を持する歡喜の心を以て

(二)護尊は寂と忿との相　次に三惡趣を召く　人天に安置せよ

金剛鉤は攝召なり　鉤雲法界に供す　二乘の厭離　憎恚三重の障を射る

想へ衆鉤彼の心に入り召來すと　五處を射よ、額と兩乳と心と下分となり

及び怨害の心を除いて　極喜地に至らしむ　爐は八葉の

(一) 因に作る。一本に與に作る。

(二) 護尊云云　忿相の字、靈本には靜意に作る、朱書に別本に忿相に作るは非なるべしと。

(一)鞞曳囉　護摩祕要に、[illegible]は諸尊聖者、一切聖智火三昧に趣く祕名なり。

蓮の如し
開敷して臺蘂を具す　量一肘深さ半にせよ　底に紅蓮華を安ず　兩重に緣四
指
白色にして高さ一指　所服は紅白黃なり　空を押して風輪を擧げ　方毎に各の一點せよ
即ち大界を結することを成じ　吽字遍ねく加護せん　寶物を以て供養せよ　丁香蘇合を
燒き
燃燈には菓油を以てす　乳と刺と果と木柴と　赤華を以て供養をなす　焰中
(一)鞞曳囉(ヂヤエイラ)のごとく
紅色にして紺靑の髮あり　梵子太白天と　成と胎と親との宿等を　遍ねく護
して歡喜を乞ふ
若し降伏の法を作さば　阿毗遮嚕迦なり　二十四より月盡までにせよ　鬼神
惡人
正法眼を破壞し　及び諸の惡毒龍の　非時に暴雨を降らし　霜雹苗稼を損し
水旱以て時ならず　鬼魅遍ねく流行し　處處に變怪を現じて　人衆安寧なら

(一)器杖雲　利劍なり。

ず
所在橫に惱亂し　及び不忠孝を行ぜんを制す　此の法能く制除す　世間を安
樂ならしめん故に
此の大方便を設けて　兼ねて彼を利益す　內に慈悲心を起し　外に大忿怒を示す
左の足の指右を押し　南に面して坐して蹲居せよ　諸色靑黑を上て(すぐれ)(タツトブ)　心中の
圓明の觀
變じて大日輪に同ず　熾盛與(とも)に疇(よろこ)ぶものなし　發輝劫焰の如(ごと)し　眞言は猛勵
に稱せよ
傍の人聽くべき如(はか)り　護尊寂靜意にせよ　即ち忿怒尊を觀ぜよ　身の諸の毛
孔に遍して
(一)器杖雲を流出して　盡虛空　一切忿怒尊に供養するに　諸の器杖を雨らして
彼の上所居に落つ　火爐は三角に作れ　獨股杵を中に置き　量は縛施迦に同
じ
壇地塗ること赤黑にせよ　刺樹坐赤華　黑華の香氣なきを　散じて以て供養

に充てよ

飯食は石榴の汁を以て染む　鐵汁(一)皂礬水　黑華芥子栢を　各の少し閼伽に置け

燒香には安悉を用ひよ　芥子の油炷(アブラ)となり　牛脂嚕地羅　燈となす

聖尊を供養し　忿怒遍ねく加護せよ　眞言に曰く　吽吉理吉埋縛日囉(ムキリキリバザラ)二合吽吽(ムム)

吽泮吒(ムハツタ)泮吒泮吒

次第に軍茶を遶つて　臭惡の刺草を舖き　苦參を爐中に炷し　火著けば淨水

を瀧がんに

囉字火天となる　赤黑にして烟焰を遍す　請召は前に準ぜよ　牛脂嚕地羅血

蘇乳蜜麻油　尾沙と共に相ひ合せよ　或は頭の酢を用ひよ　三七、軍茶に投げて

骨と髮と惡木の柴と　刺棘と參と(二)尾沙とを　嚕地の油に搵(い)れて　遍ねく沃

て眞言を誦せよ

本方位に指示して　鎭熒惑を啓請し　參星と柳宿とを　發願し歌讃を以て詠

せよ

大天忿怒威神力　能滿衆生滅怨敵　今求破敵滅怨讐　稽首諸天歸本宮

(一)皂礬　膽礬のこと。

(二)尾沙　此(ココ)には毒といふ。

後有至誠哀請時　唯願來降受供養

奉送の眞言に曰く　布尒都徒麼野薄底也(ホジトシマヤハチヤ)二合蘖蹉阿仡寗(キヤシヤアギヤネイ)二合娑縛婆縛南補曩羅(ソババンバナンホナウラ)鄭(チヤキヤマ)誐麼引

那野(ナウヤ)娑嚩(ソバ)二合賀

解界は儀則の如し　政く尊の前に對して　頻申し支節を動し　滿唾及び嗚聲

是の如き等の事　之を制して憍慢すること勿れ　大敎の阿闍梨　深行巧慧者

大悉地を求めんと欲はゞ　須らく頻りに護摩すべし　三洛叉を滿する每に

一度火供養せよ

復た次に護摩の相は　赤焰或は金色　牛蘇の如く潤澤なり　香氣あつて焰聲

なし

焰の上に重焰を生ずるに　分散して傘蓋の形の如く　加持する所の物　暖煙

及び光明の

中に於て大聲を發し　梵音師子吼して　雷の如く鳴り微妙の響あり　鐘鼓雅

樂の聲あるは

應さに知るべし成就の相なり　若し其の火氣冷に　色光潤なくんば　(一)大星

(一)大　一本に火に作る。

(一)或は云云以下好相の六十三種皆是れ成就の相。

(二)若し云云已下は不成就の相、一十六種。

而も送出し
或は臭焰煙の如し　燼を知り起て地に入らば　當さに知るべし內外の障なり
初法の息災を修せよ
此は降伏と與に成す　(一)或は佛菩薩　金剛或は諸王　部主眞言主
明王或は三寶　婆羅門居士を夢みて　自身明句を持し　新妙の白衣を著す
身に諸の瓔珞を帶し　美女妙服を以て嚴る　懷姙するもの或は童子　香華瓶
蓋を持す
或は恭敬供養し　圍繞して行道し　粳米酪飯　甘露乳果華を食す
茂林若は山に登り　塔及び樓閣を履む　或は車•馬•象に乘ず　師子牛鹿等
白鶴孔雀王　金翅鳥と舟を與(トモ)にし　海清淨の水に泛ぶ　或は空に騰ること自
在に
光焰身に遍ねし　聽法の座中に在て　或は衆に處して說法し　珠珍妙寶
商佉輪劒杵を得　善言を以て慰喩し　慶雲並に閃電　微風天華を雨らす
薰香及び沐浴　此は皆成就の應なり　覺め已らば復た眠ること勿れ　(二)若し

魁膾の人
猪驢駝駝狗　或は觸れ或は近くにあるを夢む　死屍も亦た復た然なり　惡鬼
怖畏の徒
身に弊破衣を著し　女人醜惡の形　諸物不吉祥なるは　是れ障あつて成就せ
ず
或は妄念起るあつて　三昧耶を違闕す　地水を內に縛となし　火輪二風に繞(めぐ)
らして
前に合して大輪を習せよ　七三日にして障皆銷す　睡眠には部母を以て護せよ
部主を以て住處を護せよ
不祥の諸の惡夢　百遍部母の明をなせ　凡そ喫食せんと欲する時　明を持し
て本尊に奉り
部主の明眞言を以て　食を加持して及び食せよ　護摩敬法の如くして　微細
に明かに之を解け
少分も相應せざれば　衆惡皆來集せん　三俱胝數滿たば　常に本尊を見るこ

とを得
心解脱門に通じて　智慧測るべからず　世出世間の願　所求皆滿足せん。

國譯建立曼荼羅護摩儀軌　終

國譯蘇婆呼童子經卷上

唐中天竺三藏輸波迦羅共沙門　一行譯す

(一)請問律分品第一

(二)爾時に、(三)執金剛菩薩大藥叉將、威力難思にして光り千の日に超えたり、心を一にして而も住す。大會の中に於て一りの童子有り、名けて蘇婆呼と曰ふ、大悲淳くして厚し、即ち座より起て、虔誠に執金剛の足を頂禮し已て、躬を曲げて合掌して白して言く、大威の尊者我れ今疑を抱くこと日久し、少き問あらんと欲す、唯し聽許せられよ。

爾時に執金剛大藥叉將の言く、汝が疑ふ所の者を、今恣まゝに汝ぢ問へ、我れ汝が爲に決して疑情を斷除すべし。蘇婆呼童子の曰く、我れ今恣に問ふべし、尊威聽許し給へ。我が久しき疑とは、遍く一切の世間の出家と在家との善男女等を觀るに、生死の海を出離することを求むるが爲めの故に、陀羅尼の速かに成就する法を求め覓めて、節食して持誦し專心に勤苦す。是の如く修行すれども、仍ほ成就せず、唯し願くは尊

(一)請問律分　蘇婆呼童子執金剛手に許可を請ふて數多の問を擧ぐるに對して、執金剛先づ眞言持誦人の身口意の三業を律すべき法律を答へ玉ふ、故に律分品と云ふなり。
(二)爾時に　以下正宗分なり、此經に序分なし。
(三)執金剛　即金剛手菩薩なり。

者、不成就の因緣及び成就の法を分別し解說し給へ。尊威の悲光能く衆生極重の苦源を除く、演る所の眞言復た能く障を破す。菩薩因を修して其の六度を行じ、極等妙に至る、行願虛しからず、施す所の言教皆な衆生をして、菩提に進趣せしめんが爲めなり。何に因てか、衆生眞言を持し誦するに、復た果を獲ざる、師を尋ねて求むる所の眞言の悉地の上中下の法、日に尋ねて月に至り、月至て年を經、年より極めて一形を至して、具さに苦行を修すること、晝夜を闕かざれども亦效驗なし。若し以て法に依て作せども成せずんば、此の眞言句は依る可らざるなり。若し須らく依るべからずんば先きに已に行し訖るに一も證效なし。世尊教を設け給はく、若し能く眞言を持誦すれば、即ち智慧を得、無明を離るゝことを得。無明を斷するが故に、即寂滅解脫すと。若し此の如くならば、何が故に悉地の果を得ざる、願て應さに眞言を棄つべし、當さに無明に順すべし、何ぞ須らく勤苦して、眞言を持誦して悉地を求むべき、一切の聖人は教を虛く施さず、衆生は心を興し、念を動かし、意を擧げて求むる者なり。菩薩は他心智を得て、衆生の願を滿て、第一の樂を與ふ。何が故に衆生求むるものに願を滿てず、苦む者に樂果を獲せしめず、無量の衆生をして疑ひ謗る中に墮さしむるや。我れ聞く一切の聖人は皆妄語せず、施す所の言教をば、衆生聞く者の法に依て修行すれば、即正道を見る報を獲ること無邊なりと。云何んが業を作して果を得んや。

法の具せざるが爲めか、時節に依らざる爲めか、日を得ざる爲めか、月を得ざる爲めか、星を得ざる爲めか、處所を得ざる爲めか、同伴を得ざるが爲めか、專心ならざる爲めか、放逸なるが爲めか、懈沉するが爲めか、思想多きが爲めか、身の不淨なるが爲めか、衣の不淨なるが爲めか、燈を燃すこと是ならざるが爲めか、食器如法ならざるが爲めか、華如法ならざるが爲めか、食を安くこと如法ならざるが爲めに、酥酪乳如法ならざるが爲めに、佛と菩薩と金剛天等と鬼神等とを請し奉ること如法ならざるが爲めか、持誦の人穢れたる處を經過するが爲めか、持誦の人婦人と共に同牀同臥するが爲めか、持誦の人五辛を犯食するが爲めか、持誦の人佛法僧物を盜むが爲めか、持誦の人一切衆生を劫かし奪ひ、並に孤窮の人を欺くが爲めか、六度を行せざるが爲めか、佛法僧を供養せざるが爲めか、一切の善知識と、及び一切の衆生を供養せざるが爲めか、一切の衆生を輕んじ賤んするが爲めか、一切の衆生を嫉むが爲めか、呼麼如法ならざるが爲めか、眞言の

字句加減あるが爲めか、藥味周備せざるが爲めか、器の如法ならざるが爲めか、香水を下すこと如法ならざるが爲めか、尊像を浴せざるが爲めか、經行せざるが爲めか、坐禪せざるが爲めか、手脚を洗ふこと不淨なるが爲めか、楊枝を嚼まざるが爲めか、口を嗽ぐこと不淨なるが爲めか、洗淨の如法ならざるが爲めか、華を採ること如法ならざるが爲めか、弟子と師主と心に異りあるが爲めか、弟子法の如く食を辨せざるが爲めか、持誦の人觸れたる手を以て淨食を汙すが爲めか、呼摩する時に口を以て火を吹くが爲めか、柴の如法ならざるが爲めか、殘食を以て佛に供養するが爲めか、持誦の人殘食を喫ふが爲めか、持誦の人二時に讀經せざるが爲めか、師僧に違背するが爲めか、父と母とに反き逆ふが爲めか、師主の敎勅を受けざるが爲めか、持誦の人の多く世事を談するが爲めか、名利を求むるが爲めか、名聞を求むる爲めか、熾然たる世法の業を作すが爲めか、白月の作法の如法ならざるが爲めか、黑月の作法の如法ならざるが爲めか、五星の度を失ふに作法せざるが爲めか、日月の博蝕に作法せざるが爲めか、結界の如法ならざるが爲めか、護身の如法ならざるが爲めか、坐起の如法ならざるが爲めか、出入の如法ならざるが爲めか、喫食の如法ならざるが爲めか、正食の時五部の尊神王を想はざるが爲めか、本部の尊王を想はざるが爲めか、大供養の時に一切の諸の食器と、及び飮食等を結護すること如法ならざるが爲めに、魔に便りを得らるゝが爲めか、念誦せんと欲する時に、黃門に逢ふことを爲して、共に語るが爲めか、是れ處女と寡女と共に語るが爲めか、當さに地を擇て坐せざるが爲めか、是の如く等の汙觸犯事、我れ今都て覺知せず、何に況や未來の衆生、此の事を曉め悟らんや。惟し願くは尊者、大悲心を興し、衆生を救護して、念誦の法門衆て呼摩を作す、儀則を指し授け給へ。三種の悉地速かに證て効驗ありて、未來の衆生をして、一一に此れに依て行じて、咸く解脫に昇らしめ給ふなり。

(二)爾時に執金剛菩薩大藥叉將、當さに蘇婆呼童子の、是の如くの問を聞き已て須臾にして自ら言く、善い哉、善い哉、童子諸の衆生を愍念し、慈悲遍く覆ふこと、由し月光の普く世間を照すが如し、汝が此の心極めて大悲なるに緣るが故に、已に一切の諸の大菩薩の菩提心に超えたり。法門を莊嚴して己れが樂を求めず、有情を利益せんとして、能く大苦を忍ぶ。是の故に菩薩は、衆生の苦を見ては菩薩も亦苦しみ、衆生の

(二)爾時以下執金剛の答なり。

樂を見ては、菩薩も亦樂しむ。我れ汝が心を觀ずるに、終に己れが衆生を利することを能はざるが故に、是の如くの問を發す。汝今一心に思惟して、諦かに我が法を受くべし、吾れ當さに汝が爲めに、分別し解說すべし、若し一切の眞言の法を持誦することあらば、先づ諸の佛に於て深く敬ふ心を起し、次に無上菩提の心を發すべし。衆生を度せんが爲めに、廣く大願を發し、遠く貪と癡と憍慢と等の業を離れ、復三寶に於て深く珍重を生じ、亦應さに虔誠に大金剛部を遵崇すべし。當さに須く殺と盜と邪淫と妄語と綺語と惡口と兩舌とを遠ざけ離るべし。亦酒を飮むと、及び以て肉を食はざれ、口に念誦すと雖も、心意不善なれば常に邪見を行す、邪見を以ての故に、變じて不善と爲て、雜染の果を得ること、譬へば田を營むに、時に依て種子を作せども、若し燋ぬれば芽を生せざるが如し。愚癡邪見も亦復是の如し、假使ひ善を行すとも、終に果を獲ず。是の故に應さに當さに邪見を遠け離れ、恒に正見に依て而も動搖せざるべし、十善を修行して、甚深微妙の法を增長すべし。若し天と龍と阿修羅と等、及び血肉を食する諸の惡鬼の類ありて、世間に遊行し、有情を損害し、持誦の人を惱まし、心を して散亂せしむる有らんに、正く妙眞言の法を持する時は、彼れ等即ち恐怖を生ず。

念誦の人をして菩提心を退せしめんとするに、彼れ等をして、損傷せざらしめんと欲する者は、應さに須く此の三昧耶曼荼羅に入るべし。諸の大聖衆と、及び諸の天との所居の住處なるを以て、是の故に名けて大曼荼羅と爲す、又復須く諸の事法を作す、妙曼荼羅に入るべし。又能く諸の天神と、及び魔宮と等をして調伏せしむる者なり。是の故に重て更らに須く最勝明王の大曼荼羅に入るべし、

又諸の眞言大曼荼羅に入ること、上に說く所の妙三昧耶の如き者なり、持誦の人をして罪を滅することを得せしむる故に。是を以て應さに須らく數々入るべし。

又諸の使者等の妙曼荼羅に入れ、及び餘の無量の明王妃等も是の如し、普く福聚の諸明の所居の住處の曼荼羅に入り已ぬれば、一切の諸魔遙かに彼の人を見て、心に大怖を懷て、各自ら馳せ散ず、數々諸の曼荼羅に入るに由るが故に、聖衆の爲めに加被せらるゝが故に、諸魔此の念誦の人を見ること、猶し金剛自在奮迅の所居の住處の如し、猶し火聚の如し、並に皆な馳せ散ず、害を爲すこと能はず、世間の所說、及び出世間の諸の明眞言速かに成就することを得、若し此の大曼荼羅に入らざる者は、慈悲及び菩提心を具せず、諸佛を敬はず、外の餘の天に歸して、佛法の眞言を念持する者は、

即ち當さに自ら害すべし。若し念誦の人、或は遍く諸の曼荼羅に入ることを辦せざらん者は、中に於て一の三昧耶に辨ずるに隨て、深心に灌頂の師主を恭敬し禮拜して、灌頂を請じ乞へ、灌頂を得已て、其の部の中に隨て任に一業を作すべし。能く一切の藥叉と龍王と、及び諸の惡魔と毗那夜と、猛害の天と等をして惱亂すること能はざらしむ。持誦の人先づ須く持戒すべし、へ譬ば芽種の皆地に依て生ずるが如し、勤めて漑灌するに由て芽をして生長せしむ。尊所說の別解脫の法清淨の尸羅、具さに應さに修行すべし。若し是れ俗流ならば、唯し(一)僧服を除て自餘の律儀は、悉皆差ふことなし、必ず須く諸の雜染の法を遠離し、具さに(二)善逝敷演の教門を行ふべし、眞言の法則亦復是の如し、念誦の人若し疲れて倦むことあらば、應さに大乘經典を讀むべし。又罪を滅することを作さんと欲はん者は、空閑に於てし、及び清淨の處に向ひ、或は香泥を以てし、或は妙砂を用て塔を印すること以て十萬に滿てとよ、唯し多きは最も善し、內に緣起(三)法身の偈を安ずべし、或は舍利塔と及び尊像との前に於て、(四)塗香と散華と燒香と然燈とを用てし、幢旛と蓋とを懸け、及び妙音を以て諸佛を讃歎し供養せよ、恒に斷絕せざれ、先づ須く好き同伴を得べし。若し伴なくして成就すること

(一) 僧服　袈裟と僧祇支を云ふ。
(二) 善逝　釋迦佛なり。
(三) 法身の偈　諸法從レ緣生、如來說二是因一、是法從レ緣滅、ス是ヽ大沙門ノ說ナリ
(四) 妙音　五韻五調子呂律法に叶ひし音なり。

を得と云はゝ、是の處ありあること無し。譬へば車乘の其一輪を闕すれば、假令能く善く御する者も亦進むこと能はざるが如し。念誦の伴なきも亦復是の如し、縱使勤苦して業を作すとも、終に亦成せざるなり、然も彼の伴侶は須く智惠を具すべし、淨潔嚴にして、族姓に生るゝ者の勇健にして怖るゝことなく、能く諸根を調へ、(一)捨力を樂ふ者の、能く饑と渴と寒と暑との苦惱を忍びて、退を生せざる者の樂て和尙と阿闍梨とを供養して、常に恩義を懷き、三寶の處に於て深心に恭敬せん。是の如く等の行人は甚だ値遇し難し。若し是の如く等の伴を具して、或は一二三四五、唯し多きは更らに善し、眞言を持する者の、畢に福を成することを獲ん、當さに須く是の如く等の伴を覓むべし。

(一) 捨力　捨は平等の義なり。
(二) 分別處所分　前の處所を得ざるが爲めか、處所不淨なるが爲か、等の間に對して持眞言者の所住處を答ふる故に處所分と云ふなり。

請問分(二)別處所分品第二

復次に、蘇婆呼童子念誦の人、若し速かに成就せんと求むる者は、應さに諸佛の曾て經玉ひし所住の處、或は菩薩の住所、或は緣覺と聲聞との所住の所を覓むべし。是の如く等の地には、諸の天と龍と等、常に供養を爲し、及び以て衛り護る。是の故に念誦の人、先づ身と心とを洗ひ、當さに律儀を具すべし。常に應さに是の如くの勝處に

居住すべし、若しや是の如きの福地に遇はざれば、亦大河の邊に於て居止すべし、或は小河と及び(一)陂澤とに近かるべし、名華の滋茂するあらん、地も亦得るなり。當さに鬧鬧を離るべし、與に雜居すること勿れ、其水清く流れて充滿し盈溢して、諸の水族の惡毒蟲なきもの、或は山の間の閑(しづか)にして、淨き處の地に輭草を生じて、華果に豐足なるに居すべし、或は山腹と及び巖窟との中の、諸の猛き畏るべき毒獸の類のなき、是の如く等の處皆深さ一肘量を堀り取り、あらゆる荊棘と瓦礫と糠と骨と毛髮と灰炭と、(二)鹹鹵(カンロ)と、及び諸の蟲窟とを淨く除くべし、乃至深く堀れども、もし盡きざれば應さに當さに之れを棄てゝ、更らに餘の處を求むべし、得已て修治すること、一(もう)はら前の法の如くすべし、暴風をして室に入ること有らしむること勿れ、泥をも壁の孔を飾り、塗と蟻とを舍の上に停り住することあらしむること勿れ、好く蓋て漏水あらしむることと莫れ、四壁に窻を安き、極て明淨ならしめよ、其室に門を安くこと東西北方にせよ。唯し南面を除て門を置くべからず、營造し成り已んなば、牛糞を以て其室中に塗れ、彼の法事相應の方に隨て尊像を安置すべし。其尊容は彩畫し、或は刻み成し、銅と及び金と銀とを以て、かの辨する所に任せて、皆供養することを得。其畫する所の物は

(一) 陂澤　陂はイケ、澤はツツミ。

(二) 鹹鹵　鹹は人造の鹽なり、鹵は天造の鹽なり。

應さに日毎の細輭密緻なる匠者の織り成すに、兩頭に縷を存して割截せしむること勿れ、闊幅にして髮なく、未だ曾て用を經ざるを用ゆべし、先づ須く淨洗すべし、復香水を灑ぎ、畫する所の形色に膠を和すべからず、新器に置いて牛毛を筆と爲よ。其の像を畫く人は、澡浴清淨にして、應さに八戒を受くべしと。日日に是の如く爲めに八戒を受けよ、法の如く畫像成り已んなば、應さに塗香と燒香と華鬘(ケマン)と飮食と燈明とを用て、像の前に安置すべし。讃歎し禮拜し遶むる所速かに意の如く成就することを得ん。

復次に、蘇婆呼童子念誦の人は、若し是れ俗人ならば、應さに與に頭を剃るべし、唯し頂髮を留めよ、著する所の衣服は皆須く赤色にすべし。或は白衣と及び以て草衣とを著し、或は樹皮衣と芻摩布衣とを著すべし、須く四種の(二)應器を持すべし、木と鐵と瓦と銕と等の鉢、極めて須く團圓なるべし、細密にして缺くることなく、破漏せしむること勿れ、應さに此の器を持して、次第に家家に乞食すべし、食を得ること足りて已んなば、清泉の所に於て、近いて水を以て其の飯を淨洗せよ。若し食せんと欲する時は、先づ鉢の中の飯を出だして、分て五分と爲し、一分は路行に準擬す、餓へたる

(一) 應器　應量器にして即鉢なり、之れに就て在家の人は四鉢を持すると雖、出家を許すの僧は唯鐵鉢に局ると云ふ義と、又此の經文に依て在家出家通して四鉢を持することを得と云ふ義あり。

人來らば即ち是れなり、一分は水中の衆生に施し、一分は陸地の衆生に施し、一分は七世の父母と及び餓鬼の衆生に施し、第五分は足ると足らざると自ら食すべし、正く食せんと欲する時は、此の鉢中の飯を觀じて、不淨觀を作して、然して後に之れを食せよ。但し饑病を療するのみにして、美味を貪すること勿れ、食し訖了已なば、即ち河と池との泉に向て、淸淨に澡浴し口を漱ぎ、柳木を以て齒を揩り、水を出でゝ衣を著し、其精舍に入て佛を禮すること三五十廻し、然して後に大般若波羅蜜多經を讀むべし。所居の所村邑即經行すること遠からず、衆多の人の處に近からず、外道なく及び飮食に豐足なるべし、を去ること常に惠施を樂ひ、三寶に歸信する處に安居せよ、外道我慢の人と家與なる家に住止せざれ、豪族に倚恃すると、無智の人の中と、僧の利を刼めざると、慈なく悲なきと、口には善の行ずと道へども、心には毒蛇を懷くと、佛僧に依傍して、專ら名利を求むると、是の如く等の人には、愼て親近すること勿れ、深く敬て此れ等を遠ざけ離るべし、一分の衆生、或は念誦の人を見て、釋敎の法を尊崇する時に、此の類の衆生は、心に常に毒を懷て、瞋恚罵詈し、未だ得るを得ひたりと謂へ、未だ證らざるを證れりと

謂ひ、多く人の過を求め、常に便りを伺がひ覓めて、惱亂の心を興す、冀くは伴合を得ざらんことを、甚だ是れ善い哉、能く善と惡とを分別して、只時時に相ひ見て、方便をもて彼の人を化して、道芽を生せしむべし、未だ見て即ち深妙の義味を說かざれ、善根未だ熟せざるが爲めの故に、且く爲めに淺近の義を說て、漸く修行し、方に大に入るを得せしめよ。念誦の人若し是れ婆羅門種ならば、彼れ此の難を致さん、汝は是れ婆羅門種なり、云何んが釋敎の眞言を持誦せん、汝應さに自ら學し、及び以て他に敎へ、自ら受け、他に施し、自ら天神を祭り、亦他に祭りをなさしむべし。斯の如きの六法是れ汝が本宗なり。復應さに火及び是の王に事つるべし、亦須く妻を取て、男を生して種を續くべし。汝此の法を行じて、方に解脫を得べし、云何んが釋敎の眞言を持誦せんと。念誦の人若し是れ刹利の族種ならば、彼れ此の難を致さん。汝は是れ族姓刹利の種なり、應さに須く祭祀し、捨施し、自ら學すべし。斯の如きの三法は、是れ汝が本宗なり。復須らく紹繼し、怨敵を摧伏すべし。汝此の法を行して、方に解脫を得べし、是の如くの眞言をば、汝學すべからずと。念誦の人若し是れ毗舍の種ならば、彼れ此の難を致さん。汝は是れ毗舍の種及び雜業下賤の類なり、(二)興易して利を

(二) 興易 貿易にして買賣なり。

求め、廣く他の財を貪り、貴を返して賤きを求め、斗秤を翻弄し、妄語を業と爲す、是れ汝が本宗なり。云何んが眞言を持誦することを得ることを求めんや、汝釋教の眞言を學すべからずと。

念誦の人若し是れ輸達囉の種ならば、彼れ此の難を致すべし、汝は是れ輸達囉最下の種なり、應さに農田を作るべし、應さに淨行の婆羅門を供養すべしと。是の如く等の種種の諸難をもて、行者を惱亂して、退心せしめんと欲する者あらん、彼れ等の外道惡人、直に他を損するのみに非ず、亦乃し自ら損す、外道の法は午時を過て食す、聖道を修する行者は彼れと同じからず、是の故に外道の家を往き過ぎて、而も乞食を行ずべからず、若し五辛と酒と肉との家あらんに、眞言を修行する者、假使一切饑餓の苦を受くとも、亦此に於て而も食すべからず、何を以ての故に、旃陀羅の居と共にするに異ることなきが故に、亦門首を過ぎ往きて、彼の人と共に語るべからず、何に況んや食せんをや、若し彼れが食を食せば、彼の人と共にすると何ぞ異ならん、淨行と名けず、亦旃陀羅に同じ、當さに須く善く分別すべし、行と坐と住止とを知て、甚だ須く作意し觀察して、然る後に方に往來し去るべし。若し善惡因果の法を論せば、有智も無智も利

利も婆羅門も毗舍も輸達羅も等くして差別なし、良に世間の妄分別に由るが故に、假に名字を立つ、若し能く善を修すれば、當さに涅槃を證すべし、若し因果を說かざれば、四姓を論ずること莫く、一切の罪を造る者、皆惡道に入て苦を受く、但し四姓のみに非ず。

復次に、蘇婆呼童子、衆生は無始より已來、垢穢の身なることは、食淨に由らざればなり。身と心と淨かなるを以ての故に、惡業を斷除し、諸の善法を修す。方に身と心との清淨なることを獲得すべし、譬へば人有て身に瘡癬を患ひて、但し除差せんと念じて、藥を以て之れを塗るが如し、行人の食を噉することも、亦復是の如し、但し饑渴を除いて、滋悅を樂はざれ、又譬喩に云く、人の父子有て大砂磧に入らんに、路遙かに迢遞として、饑渴に逼められる。其人當さに子の肉を食すべきが如し、行者の食を噉することも亦復是の如し、但し饑病を除くのみ、其味に著すること勿れ。其の施主の飯を持して來れるを觀ずる時、心に施物の消し難きを懼れ、慚愧して當さに此の餐を食すること、子の肉を食するが如く想ふべし。喩へば物は秤るに、重きに隨て頭し下たり、其物若し輕少なれば、便即頭し高し、物若し均平なれば、其秤亦平かなるが如く、念

誦の人も亦復是の如し。量を過ぐることを得ざれ、極少なるべからず、譬へば汚たる舍の、將に崩れ倒んとするに、壞せしめざるが故に、柱を以て支へ持つが如く、行人の食を喫することも亦復是の如し。但し身を存して、實果を求覓するが爲のみにして、世間に久しく身を住せしめんことを貪するが故に、而も食味を悕はざれ。譬へば車の行くことは當さに油を塗るを以て、增々善となるべきが如し。故に應さに食を須ゆべきなり、是の故に世尊是の如きの法を說き給ふ。欲界の有情は食に依て而も住すと、行者常に須く觀念すべし、己身は由し芭蕉の如し、喫ふ所の飮食は其味を貪すること勿れ、四種の鉢に於て隨て其一を取れ、前四肘を觀て次第に乞食すべし。世尊の說き玉ふ所は、智慧方便をもて六根を調伏して放逸ならしむこと勿れ、女人の色を令くして、巧みに笑み嬌て言ひ、性矜り莊ることを愛し、行步妖艶にして、姿態をもて男子の心を動かし、迷ひ惑亂せしむ、眞言を持する者は、寧ろ火星を以て眼中に流入し、雙目に於て失して盲ひて見る所なくとも、亂れたる心を以て、女色を觀視し、種々の相好美艶なるを分別せざれ、念誦者をして威力なからしむ、緣に隨て乞食して、住著を生ずること勿れ、正思惟を以て其心を調伏し、(一)牟尼を以て行して、而も他の舍に入る

(一) 牟尼　此れに寂默と云ふ即寂靜默然として他舍に入るべしとなり。

べし、上中貧賤の家を擇はざれ。又新產の婦ある家に入るべからず。牛と馬と驢と駝と豬と犬と羊との產まで皆往くべからず。衆多の人の酒を飮むの處、婬男婬女の伴合放逸の處に往くべからず。衆多の小兒戲れ翫ぶの處亦觀視せざれ、俗家に於て婚禮の處、惡しき狗ある家、及び以て技兒の音樂を作す處、若は久しく諳せる朋類の、詐て好心なりと稱することあらん、我れ眞言章句を持すと云ふ、未だ曾て明師に(一)稟承せざれども、强て我れ眞言秘藏を解せりと道ふて、好で論端を生ぜん、無智の人の中にをいて、我れ曾て聞て解りぬ、汝が與めに師と爲るに堪へたりと云へ。若し智人の所問に逢ては啞羊の如く似たり、他の實心の好人を誑かして財物を受け、妻兒を養ひ活す心中の三毒の煩惱、癡と恚と我慢は有頂より高ふして、道心は一分もなく、詐て我れ佛法を解すと稱し、三尊を欺き慢り、亦一切の長と幼との道士の類を欺く。此の如く等の人は、過愆無邊なり、略して而之れを言はゞ、上の如き等の處には、皆往て而も乞食を行することを得ざれ、餘の處には任に往くべし、乞ふて食を得ること已んなば、即ち本處に還て水を以て足を洗へ、一ら前件の分食の法に依て本尊を供養し、(二)一通無礙一分をば自ら食し、餘をば過去七代の父母と、及び(三)水陸の餓鬼とにをいてせよ、

(一) 稟　稟の誤りなるべし。

(二) 一通無礙　此の一句は亂脫なり下の通して念誦を許すの次に廻文すべし。

(三) 水陸の餓鬼　眞言行人施餓鬼を修すべき典據。

前に於て已に釋せり。更らに名を具さにせず、時に依て而も食して、過中を犯すこと勿れ。日に三たび澡浴して、時及び節を知て、華と塗香とを獻じて供養すべし。(一)香泥を以て手に揩り觸れたる手を以て、而も手印を結ぶこと勿れ。念誦の時は茅草に坐すべし。若し諸の雜供養を辦せざれば、以て(二)華水を奉ることも亦得、華香とは一切の水より生じたると、及び野と澤と山の間との、種々の雜華の香き者を皆供養に充すべし。(三)行と住と坐と立と通じて、念誦することを許す、一ら通じて礙りなし、唯し臥して時を除て許さず、念誦し已訖ては、恒に思て(四)六念せよ、彼れ等の種々の功德を觀察して散亂せしむること勿れ。

(一) 香泥を以て塗香を行する典據

(二) 以て華水 華水供の典據。

(三) 行と住と四威儀に於て念誦許否の典據。

(四) 六念 念佛 念法 念僧 念戒 念施 念天 念世大慈父 離解脫門 有爲福田 無上菩提本 具足波羅蜜 護法利群生。

請問(五)除障分品第三

復次に、蘇婆呼童子念誦の人、若し一念の貪瞋癡等を起し、一切の煩惱と心と相ひ合する者を名けて生死煩惱と爲す。若し此の心を除けば、即ち清淨なることを得。諸佛常に是の法を讃して、名けて解脫と爲す。譬へば淨水は必ず垢穢なけれども、塵坌を以ての故に、水をして渾濁ならしむるが如し。本性は元より淨なれども、客塵煩惱心を渾して、濁らしむるを以て、眞性現れず、若し亂れ濁らざらしめんと欲はば、當さに

(五) 除障分 前の結界如法ならざるが爲めか、大供養の〇魔の爲めに便りを得らるゝか爲めか等の間に依て廣く除障の法を答ふるなり。

數珠を取るべし。念誦の人は、心を守て一境ならしむべし。數珠に多種あり。謂く活兒子●蓮華子●阿嚧陀曇阿叉子●水精●赤銅●錫●瑠璃●金銀●鐵●商佉●木槵●任に一色を取て以て數珠と爲せよ。虔心に數珠を執持し已て念誦すべし。或は右の手を用ひ、或は左の手なり、應さに眞言を念ずべし、心を專らにして誦持して錯亂せしむること勿れ。心を本尊に於て繫け、或は眞言並に手印等を思ふべし、猶し入定の如くにして心を散亂すること勿れ。諸根を調伏し、尊の前に端坐して、觀想を成し已て、微しき兩脣を動かして眞言を念持すべし、人の心の溢れ盪くこと、猶し風と電と獼猴の樹に擲つと、海波と潮浪との如し。諂曲自在にして諸境に牝著す。是の故に應さに、須く心を攝めて動せずして眞言を持誦すべし。若し心疲れ倦て、惛沈し眠睡し心悶し迷錯せば應さに起て經行すべし。或は四方を觀じ、或は水を面に灑いで醒悟することを得せしめよ。或は經行の次に、故へなきに本師の僧を憶ひ、或は舊亡の父母を憶ひ、或は同學を憶ひ、或は婬を想へば、心即動いて定らず。念誦の人即ち身と心とを責めよ。是の身主なし、業に由て一切の諸趣に流轉して依り止まる所なし。此の身を捨てゝ後に復餘の形を受く、善惡の業緣斯れに因て絕えず。生●老●病●死憂悲苦惱●愛別離苦●求

(一) 阿嚧陀羅 金剛子なり。

不得苦●怨憎會苦●と五盛陰苦と、至る所の方に隨て終に免るゝことを得ず。蚊と蟲と蚤と虱と蛇と蝎と(二)壁宮と寒と熱と饑と渇と、是の如く等の苦は處處に皆有り、諸天も共に同くして逃げ避くる路なし、心退轉せんと欲し、餘の方に向はんと擬せば斯の觀門を以て將に對治を爲すべし。若し、貪恚盛なる者は、白骨觀と及び逢脹爛壞、諸の不淨觀とを修すべし。若し瞋火盛ならば、慈悲觀を作すべし。若し無明盛ならば、緣生の觀を作すべし。有る時は怨家翻て善友と爲り、有る時は親友翻て怨家と爲る、中間平等も復變して以て怨家と爲る。此の親友を觀するに、皆不定の相なり、智者妄りに戀著を起すべからず。若し往かんと欲はゞ、平等の心を以てせよ。心に親友に往かんと欲ふ時は、斯の法門を以て應さに須く對治すべし。念誦せんと欲ふ時と、及び行住坐臥に、畢に外道と婆羅門と刹利と毗舍と首陀と、並に黃門と童男と童女と處女と寡婦等と共に、相ひ談論することを得ざれ。法事畢已て若し語らんと欲はん時は、然る後に伴侶を共にして善法を談論すべし。若し餘の雜語せば、皆是れ魔の便りを得るなり、是れ正論に非ず。若し睡眠する時は、當さに須く遠く棄つべし、棄て已て、便ち應さに澡豆をもて其口を漱くべし。若し大小便易せば、並に須く澡浴すべし。獻

(一)壁宮　いもり なり。

する所の香華然燈をもて供養し、佛を禮拜し、日夜六時に三寶を讃歎し、常に謙下を生ずべし。一切の衆生に悲の意を興發し、苦を救ふの心を作せ。上の如く精勤し念誦する所修の功德を、皆應さに無上菩提に廻向すべし、譬へば衆くの流れ大海に歸り趣むき、彼の海に入り已て便ち一味と爲るが如く、菩提に廻向することも亦復是の如し、一切の功德合集して、共に佛果を成す、譬へば人有て田を耕し稻を種ることは、唯し子實を求めて藁稈を望まず、子實成熟して子を收め穫ること已んぬれば、藁稈は求めざるに、而も自然に得るが如し。行者菩提の種子の功德を獲んと欲して、世樂の爲にせざれ。無上菩提を求むるを以て其實に喩ふ。諸の餘の世樂を草稈の求めざるに自ら獲るに況喩ふ。世樂とは天上と人中と或は二十八天の王、或は人間にして轉輪王と作て四天下に王たり。若し復た人有り、小利を求めんが爲めに彼れに於て往かんことを請す。前人の爲めに一切本願を退すべからずと、彼の前人に是の如くの語を宣て、而も彼れに於て答へよ。我れ長壽の身を獲得し、及び種々の諸の餘の資具を獲るを得て、無厭の心を以て、當さに衆生を利すべし、求むる所の種々の願を滿足し已て、然る後に彼れに往かん、珍重して我れを請して彼こに往かしむべからず、我が薄福を以て而

も詔ふ辭を說き、他の供養を求めて、以て活命を爲し、眞言密敎に違背して、而も邪命を受くることは、佛に此の敎なし、我れ終に順はずと。復次に蘇婆呼童子、凡そ眞言を持する者は、當さに須く世間の八法を遠け離るべし。善を以てすると、翻して惡名を稱すると、及び以て苦と樂と利を得ると、利を失ふと、毀謗と讃譽と、此れ世の八法なり。能く一切の不善の法を生ずるが故に、譬へば大海の死屍を宿さず、乃至刹那も終に海に住せしめざるが如し。念誦の人、若し不善の思惟を起さば、速かに應さに遠離すべし、乃至一念も心にあらしむること勿れ、譬へば室內に燈燭を然すが如きは、只風を防ぐが爲めなり、風なきを以ての故に、燈焰は轉た明かなり、眞言を持誦し、復勤苦を加へ、勇猛精進して善法をして增長せしむることも亦復是の如し。

復次に蘇婆呼童子、持誦の者、四威儀に於て常に須く作意すべし、身と心とをして調戲し躁動して、其志節を失せしむること勿れ。拍手し音樂歌舞し婚禮し博戲し、及び往て觀看することを得ざれ、亦在家を毀謗し、及び諂曲の言辭を行し、人の長短を說かざれ、非時に睡眠し、無義に談話し、文章と及び諸の邪法とを尋ね學び、瞋恚と忿恨と慳貪と憍慢と放逸と懈怠と、皆須く遠離すべし、亦酒を飲み、及び以て肉を食はざれ、(一)葱と(二)蒜と(三)薤と(四)韭と胡麻と羅蔔と、並に步底那と（此れに(五)驢駒蹄と云ふ）胡麻の油と等、並に食すべからず、亦一切の殘食を喫はざれ、鬼神を祭祀する食と、並に供養の食と、和尙の殘食と皆食すべからず。若し此れ等の食を食する者は、眞言を持する人と名けず、念誦に驗なし。

復た次に蘇婆呼童子、以て勤めて念誦して晝夜を間てざれ、呼召と發遣と、皆須く如法なるべし。若し念誦せんと欲ふ時は、敷くに茅草を以て、上に於て坐臥せよ、睡らんと欲ふの時は、先づ慈悲喜捨の觀を作し、並に三寶と及び舍利塔とに於て、深心に恭敬して、以て滅罪を求むべし。若し是の如くの觀行を作さずして、臥する者をば念誦の人と名けず、臥せる死屍の如し。復た次に蘇婆呼童子、念誦の人は常に(六)三白食を服すべし、或は菜根果と乳酪と、及び酥と大麥と麵餠と(七)油滓と酪漿を相ひ和して、之れを食すべし。種々の糜粥も亦可なり。若し成就せんと欲はゝ、麻滓を酪漿に和して之を食し、法に依て作せ、必ず證驗を得ん。

(八)請問分別金剛杵及藥證驗分品第四

復た次に蘇婆呼童子、汝が爲め、及び未來の善男子の心を發して、秘密眞言門を念誦

(一)葱 そう ひともじ。(二)蒜 さん ひる。(三)薤 かい おほにら。(四)韭 きう こにら。(五)驢駒蹄 野菜の類なるべしと。(六)三白食 乳と酪と熟蘇とを和したる食なり。(七)油滓 麻滓 何れも胡麻の油なりと傳ふ。(八)請問分別上の法を具せざるが爲めかの間、又結界如法ならざるが爲めか、護身如法ならざるが爲めか、等の間、又藥味周備せざるが爲めか、等の間に對して、執金剛菩薩、磔金剛杵、及造作の法、及び相應物の藥分成就の法と、其の證驗等を明す。故に分別金剛杵及藥證驗分品と云ふたり

する者の爲めに、(二)跋折羅を持することを說かん。汝當さに諦かに聽き聞き已て、廣く人の爲めに說くべし。跋折羅を作らんと欲はゞ、量の長けは(三)八指或は長け十指、或は長け十二指、或は長け十六指、其量の最極長きは二十指なり。若し大貴自在を成就し、及び持明悉地を求めんと欲はゞ、即ち金を用て跋折囉を作るべし。若し富貴を求めば純銀を用て跋折囉を作るべし。若し(三)海龍王を求めんと欲はゞ、熟銅を以て跋折囉を作るべし。若し脩羅宮に入らんと欲はゞ、妙砂石を用て跋折囉を作るべし。若し通じて一切を成せんと欲はゞ、金と銀と銅とを以て和して跋折囉を作るべし。若し藥叉衆を摧くことを成就せんと欲はゞ、鐵を以て跋折囉を作るべし。若し無病と及び錢財を求むることを得んと欲はん者は、(四)失利般尼木或は毗魯婆木を以て、而も跋折囉を作るべし。若し一切の病と鬼魅の著く所を療せんと欲はん者は、佉他囉木をもて跋折囉を作るべし。若し藥叉女母姉妹の法を成就せんと欲はん者は、(五)摩度迦木を用て跋折囉を作るべし。若し滅罪の法を求めんと欲はん者は、阿說他木を用て跋折囉を作るべし。若し怨敵の法を摧伏せんと欲はん者は、(六)害人木を用て跋折囉を作るべし。若し極惡怨敵の者を降伏せんと欲はゞ、人骨を用て跋折囉を作るべし。若し幻化の法

(一) 跋折羅　此れに金剛と云ふ。
(二) 八指　一指量を五分とす故に八指は四寸なり。餘は准知すべし。
(三) 海龍王　龍宮城に入らんと求むるを云ふ。
(四) 失利般尼　法天の木には妙吉祥木と。
(五) 摩度迦　甘草なり。
(六) 害人木　むはらある木なり。

を成就せんと欲はゞ、水精を用て跋折囉を作るべし。若し人をして相ひ憎ましむることを成就せんと欲はん者は、(一)苦練木を用て跋折囉を作るべし。若し鬼魅の人をして枯瘁し闘諍せしむる事法を成就せんと欲はん者は、(二)龍木を用て跋折囉を作るべし。若し龍女敬念の法を成就せんと欲はん者は、毗梨勒木を用て跋折囉を作るべし。若し天龍と藥叉と乾闥婆と阿脩羅との法を成就せんと欲はん者は、(三)天木を以て跋折囉を作るべし。若し變形の法を成就せんと欲はん者は、迦談木を用て跋折囉を作るべし。若し求財の法を成就せんと欲はんものは、(四)遏迦木を以て跋折囉を作れ。或は龍木を用ひ、或は無憂木も皆之れを用ふることを得。若し對敵の法を成就せんと欲はゞ、失利般尼木を以て跋折囉を作れ。或は阿沒羅木、或は遏順那木、或は柳木皆之れを用ふることを得。若し意樂の諸欲を求めんと欲はん者は、白檀木を用て跋折囉を作れ。或は紫檀木を用ふ、皆之れを用ふることを得。

上の如く說く所の諸の色類の金剛杵(シヨウ)の法は、一一に皆須く而も五股を作るべし。淨妙端嚴にして缺減せしむること勿れ。行者念誦せんと欲ふ時は、香泥を以て塗り、並に上妙の好華を散して而も供養し、大慈心を發して手に金剛杵を執り　眞言を念誦し、

(一) 苦練木　ねるでの木。
(二) 龍木　龍花樹の類か。
(三) 天木　法天の木に柏木及杉木と
(四) 遏迦木　まるめるなり。

法事畢り已て、復重て供養し上り已て、其杵を本尊の足の下に置くべし。後に念誦の時も亦復是の如くすべし。若し妙金剛杵を執持せずして、而も念誦を作せば終に成就せず。何を以ての故に、鬼神懼れず善神加被せざるを以てなり。是の故に一切の法事驗を成すことを得難し。若し金剛杵を造ることを辨ざせれば、亦須く彼の印を作すべし。然る後に心を一にして如法に念誦すれば、亦成就することを得。放逸を生じて徒らに功夫を喪ふこと勿れ、別に餘業を修せんには如かず。

復た次に、蘇婆呼童子、凡そ眞言を念誦して、藥法を成就するには十七種の物あり、第一雄黃●第二牛黃●第三雌黃●第四(二)安善那●第五朱砂●第六咄他香●第七跋折囉●第八牛蘇●第九菖蒲●第十茂拏刈哩迦●第十一衣裳●第十二古叉●第十三鹿皮●第十四橫刀●第十五絹索●第十六鎧甲●第十七三叉●なり。

上の如く說く所の物に皆三種の成就を具す、假使餘の眞言法の中に說く所の成就の諸の物も、皆此の三種を離れず、時に臨て樂ふ所の事法、意に任せて之れを作すに果を剋す、獲ざる者なし。

復た次に、蘇婆呼童子、世間に諸の障難の毗那耶迦有て、常に過を覓め求むることを爲すが故に、念誦する人、便中に於て好く須く作意すべし、方便と智慧とをもて、善く分別して知るべし、魔黨に合して幾部かある、總じて之れを言はゞ都て四部あり、何等をか四と爲す。

一には摧壞部、二には野干部、三には一牙部、四には龍象部なり。

此の四部より無量の毗那夜迦の眷屬を流れ出たす、後に具さに列ぬるが如し。

摧壞部の主を名けて大將と曰ふ、其部の中に雜類の形狀、七阿僧祇(アソウギ)ありて以て眷屬たり、護世四天王の說く所の眞言を、人有て持誦すれば彼の類恒に障難を作す。

野干部の主を名けて(二)象頭と曰ふ、其部の中に於て、形狀具さに名く可きこと難し、十八俱胝(クテイ)有て以て眷屬たり。

摩醯首羅(マケイシュラ)天王の說く所の眞言を持誦する者あれば、彼の類恒に障難を作す。

一牙部の主を名けて嚴髻(ゴンキツ)と曰ふ、其部の中には種々の身形にして面貌異るべし。一百四十俱胝の眷屬ありて、以て隨從たり。大梵天王の說く所の眞言と僑尸迦と日月天王と那羅延天王と諸の風天と等の、說く所の眞言を持誦する者あれば、彼れ等の雜類恒に障難を作す。

(一) 安善那　銀の未だ練らざる物、即眼の藥なり。

(二) 象頭　世に行はるゝ歡喜天なり

龍象部の主を名けて頂行と曰ふ、其部内に於て種々の形ありて知り名く可らず、一倶胝那由他一千の波頭摩ありて、以て眷属と爲す。釋教に説く所の深妙の眞言を持誦する者あれば、彼れ等恒に障難を作す。

又呵利帝の兒を名けて愛子と曰ふ。(二)摩尼部の中に説く所の眞言に於て持誦する者作す。

又摩尼賢將の兒を名けて滿賢と曰ふ。般指迦の説く所の眞言を持誦する者に彼れ障難をあれば、彼れ障難を作す。

是の如くの諸類の毗那夜迦、各各に本部の中に於て、而も障難を作して修道を樂はず。持眞言者をして成就せしめず、自ら變化して、而も本眞言主と作て來て、念誦の人の道場の中に就て供養を受く。時に明王來て是の事を見已て、即ち本宮(ホングウ)に却(しりぞ)き還て是の如くの念を作す。云何んが如來、彼れが誓願を許して、念誦の人を惱亂し、法をして成せざらしむやと。是の如くの障難あれば、假使ひ梵王と及び僑尸迦と諸天と龍と等も、彼の毗那夜迦の障難を破すこと能はず、念誦の人、唯し心を堅ふして意を進めて大誓願(セイグヮン)を發すべし、世尊の説き給ふ所に大明眞言の教あり、我れ今法に依て修行す、

(一)摩尼部　五部の中寶部に非ず摩尼賢將の部類を云ふなり。

要らず此の難を破せんと、是の故に念誦の人、遍數滿し已て、復應さに更に諸の事を成就する妙曼荼羅を作(つく)るべし。此の法を作し已はんぬれば、彼の障難者即便(すなはち)退散して敢て足を停むることなからん。

復た次に蘇婆呼童子、念誦の人、師訓を承けすして眞言を持誦し供養し、及び以て呼摩すること、法教に依らざれば彼れ等の諸魔尋(つい)て其便りを得て、而も障難を作さん。念誦の人をして心に常に猶預して、念念に疑を生ぜしむ。此の明眞言を誦することを爲さんか、彼れを供誦せんや、是の如くの念を發して誦する時、彼れ亦便りを得ん、即ち多く無義を語し世俗の事を談じ、或は輿易を説き、或は田農を説き、或は名利を論じ、心をして散亂せしめ、譬へば人あり水を尋て、而も行くに影水中に入り、形と影と相ひ逐て相ひ捨離せざるが如し、彼の毗那夜迦等念誦の人の身中に入て、恒に相ひ離れざることも亦復た是の如し。

復た毗那夜迦有て澡浴の時に便りを得て身に入り、或は毗那夜迦有て(二)正く念誦する時に便りを得て身に入り、毗那夜迦有て念誦の人正く眠臥する時に便りを得て身に入り、毗那夜迦有て正く供養の時に便りを得て身に入ること、譬へば日光の火珠を照して

(二)正く念誦　正念誦の語の出處なり。

而も便火の出づるが如し、毗那夜迦の行者の身に入ることも亦復是の如し。念誦の時に心をして散亂し、貪と癡と無明と等の、火を增長せしむることも亦復是の如し。復毗那夜迦と云ふ者あり、名けて水行と曰ふ、正く洗浴する時に、法に若し闕することあれば、彼れ即ち便りを得て遂に身中に入り、念誦の人をして種々の病を起らしむ、所謂(いはゆる)饑渇と咳嗽と懈怠と多睡と四肢深重と、故なくして瞋多きとなり。復た毗那夜迦あり名けて食香と曰ふ、正しく塗香を獻つる時に、法に若し闕することあれば、彼の魔身に入て即ち念誦の人をして遂に病起ることあらしむ。所謂(いはゆる)思想して(二)生緣の處を憶ひ、或は餘處を思ひ、或は寡婦を思ふて而も懈怠を生じ、或は舊(もと)の欲に耽(ふけ)りし處を思ふて道業を休廢し、或は舊日廣く財寶を用ひ、酒に耽り肉を嗜み、朝廷に伴合し、貴と賤とを分別せしことを思ひ、諸の色境を觀じて好貪美欲して而も道心を退す。復た毗那夜迦あり名けて燈頂と曰ふ、正く燈火を獻(たてまつ)つる時に、法に若し闕けたることあれば、便りを得て身に入り、遂に念誦の人をして種々の病をして起さしむ、所謂(いはゆる)心痛み(ママ)壯かんに熱して心を損す。

復た毗那夜迦あり名けて笑香と曰ふ、正く花を獻つるの時に、法に若し闕る所あれば、

(二) 生緣の處　古郷なり。

彼れ即ち便りを得て身に入り、遂に念誦の人をして種々の病をして起さしむ。所謂壯かんに熱して鼻塞がり(二)噴嚏し、眼中より涙出で、支骨酸疼し、及び伴侶と相ひ諍て離れ散す。復た毗那夜迦あり名けて嚴髻と曰ふ、正く念誦の人、法に若し闕することあれば、彼れ即ち便りを得て、遂に念誦の人をして諸の病を起すことあらしむる、所謂壯かんに熱して便利出でず、諸の毗那夜迦、身に入て即ち心をして迷惑を生せしめ、西を以て東とし、南を以て北とし、諸の異相を作し、或は即ち吟詠し、或は緣事なきに遊行することを得んと欲し、心に異想を懷て決せざる所あれば、便ち邪見を起して是の如くの言を作す、或は大威の眞言あることなく、亦天堂も無く、善惡あることなく、亦纏縛し及び解脫を得ることもなしと說き、持誦者は其功を唐捐すと說て即ち邪見を生ず、善と相ひ隔ち因果を撥無し、手を以て草を斷ち、及び土塊を弄び、眠る時に齒を嚙み、或は欲想を起し、及び妻を娶んと欲するに、自ら愛樂する者は彼れ相ひ愛せず、自ら樂はざれば彼れ即ち愛樂す、既に意に順せざれは臥せども睡らず、往て他の婦兒を侵さんと欲して、竟夜(コヨスガラ)眠らず、設ひ若し睡ることを得れば夢に(三)大蟲と師子と虎と狼と猪と狗とに趁はると見、駝と驢と猫兒と及び鬼と野干と鷲と鳥と鷲と(四)鷲と

(二) 噴嚏　鼻より液を出だすを云ふ

(三) 大蟲　虎なり

(四) 鷲　鵰に同し　シマツトリと訓す

烏と及び獦胡とを見る。或る時は夢に故き破れたる衣を著たる不淨の人を見る。或る時は夢に裸形にして、禿髮なる黑體の人を見る。或は夢に裸形外道を見、或は枯れたる池と及び以て枯れたる井を見る。或は髑髏を見る、或は骨聚を見、或は壞棄たる舍屋宅を見、或は石礪を見、或は恐怖すべき惡人の手に槍刀と及び雜器仗を執り來て相ひ害せんと欲するを見る。當さに是の如くの惡相を見るべし、即ち彼れ等の毘那夜迦の障難を作さしむと知るべし。行者即ち軍荼利忿怒明王の眞言(二)辟魔の印等を用て而も護身を作すべし。上に說く所の如き、諸魔の障難悉く消滅することを得て惱亂すること能はず。若し彼の眞言を念誦する者あれば、諸の毗那夜迦終に便りを得ず。

復た次に、蘇婆呼童子念誦の人、障りに著かれたる人を救ひ解脫せしめんと欲はゞ、即ち應さに群牛ありて、所居の處、或は一樹の下、或は神廟の中、或は四衢道、或は空閑の室、或は林間に於てすべし、上の如き諸地を得ては、任に一所を揀び取て一ばら地を治する法の如くし、畢て即ち牛糞を取り、香水に和して地に塗り、乾き已んなば、復た香水を取て重て其地に塗れ、然る後に五色の土を以て下して曼荼羅を作り、五色の土を用ひよ。其壇(三)頓方量の闊さ三肘にして四門を安立せよ、中に於て二肘の

(一)辟魔の印なり。三

(二)頓方　壇の四方を云ふなるべし但し頓の字の意未だ詳かならず。

方量に坑を作り、坑の內に布くに茅草を以てし、坑の外兩肘に各位座を分て、明王●眞言主●等を安置すべし、八方に於て各本方の大神を畫け。復四口の新瓶を取れ、黑色の太だ燋げたる者を得ざれ、香水を盛り滿ち、及以び五寶並に赤遠華、諸の雜草の華の香しきをば皆供養に充てよ、或は生果樹●(二)嫩枝等皆瓶の內に插て、五色の線を以て、瓶の頸に纏ひ繫けて四方に於て安き、然る後に應さに彼の明王等を請して、諸の供具を以て而も之れを供養すべし、復た酒肉と蘿蔔と及以び衆多の波羅々食を以て、彼れ等の八方の大神と、及び一切の毗那夜迦に供養せよ、彼の障りに著かれたる人を將ゐて、坑の中に入れしめ、面を東に向けて坐し、眞言一百八遍を誦し已て、然る後に彼の置く所の四角の瓶水を取て、還て阿密利枳當伽(此れに赤色と云ふ)明王主と及び結唎吉囉明王と、並に捺囉弭良拳明王と等の、眞言を以て持誦すること數一百八遍を過ぎ已て、與に彼の頂に灌げ、是の如くの四瓶、次第に應さに灌ぐべし、此の法を作し已んぬれば、彼の障りに著かれたる人は即ち解脫を得、此の曼荼羅は獨り能く一切の毘那夜迦を除くのみにあらず、亦能く官事の人と女人の嫁し難きと、與易の人の資利を獲ざると、農を營みて子實を

(一)嫩(ニン)　シナヤカと訓ずべし。

収めざると、魍魎に著かるゝと、及び壯かんなる熱を患る孩子と、鬼魅に著かるゝと、及び呪精噓鬼の便りを得る者と、夜臥して常に惡しき夢を見ると、癇病に纏はるると、及び十種の病あると等を利益す、此の曼荼羅を作て、彼れが與に頂に灌ぐ。諸の是の如き色類のもの皆悉く利を獲、覓求する所の者、並に皆滿足し、諸の餘の疾病亦復能く差へ又復能く無量の罪障を消滅するなり。

國譯蘇婆呼童子經卷上 終

音釋　闘　音潰、市の外門なり。緻　直利の切密なり。箔　薄交の切、薄なり。磧　七迹の切、水中に石ある者なり。坌　蒲悶の切、塵壒なり。蹙　徒朗の切、震なり。脖脹　脖は匹江の切、脹は知亮の切。蓁稈　蓁は古志の切、稈は古旱の切、蓁稈は禾稭なり。蒜薤　蒜は蘇貫の切、薤は胡戒の切、蒜薤並に葷菜なり。濘　側氏の切、瘁　秦醉の切、憔悴なり。噴嚏　噴は普悶の切、嚏は都計切、噴嚏は鼻液なり。獯　許云の切、碓は都回の切、聚石なり。

大正九年二月廿一日國譯畢

權田雷斧　七拾又五歳

國譯蘇婆呼童子經卷中

唐中天竺三藏輸波迦羅共沙門一行　譯す

請問(一)分別成就相分品第五

復た次に蘇婆呼童子、諸の障難に於て解脫を得已て、身心清淨にして諸の垢穢(クエ)なし、譬へば明月の而も雲に於て埋れども、雲除き散滅して麗乎として天に光り、虛空の中に於て朗然として顯現するが如し。念誦の人の修する所の種々の功德、毗那夜迦の作す所の障難を除斷して、悉く皆消滅することも亦復是の如し。持する所の眞言悉く成就することを得て、譬へば種子の地に因り、幷に及び時雨既灌潤澤し調順し、好風雨を得て、然して後芽生し、乃至成熟するが如し、然も其種子若し倉の中に在ては、芽尙生せず、況んや枝と葉と及び華と果實をや。眞言を持誦するに法則に依らず、及び供養せざれば、清淨ならざるを以ての故に、眞言の字句或は加減あり、(二)聲相正しからずして、廣大の諸の妙悉地を獲ざることも亦復た是の如し。譬へば雲を興し雨を下すに、衆生の福に隨て而も下ること多少あるが如く、持誦の人の施す所の功勞、獲得し

(一) 分別成就、上の眞言の字句に加減あるが爲めか、又嗽口不淨なるが爲めか、洗淨如法ならざるが爲めか、等の間に對して惡地成就の相を辨說する故に、分別成就相分と云ふ、分別は即辨說の義なり。

(二) 聲相正しからず念誦する所の眞言文分を闕するを云ふ。

成就することも亦復是の如し。若し行者ありて、清淨の處に於て、時と及び節と所制の法とに依れば、犯す所の罪は漸々に消滅し、福聚圓滿（フクジュエンマン）して能く眞言及び(一)霏たる成就を獲。若し罪滅せざれば功德圓ならず。法則に依らざれば眞言成せざること、此れに翻して應さに知るべし。復た次に蘇婆呼童子、其の念誦の人中間にあらゆる闕犯は、或は間斷（ケンダン）ありて、本の所誦を棄てゝ、別して餘の明を持し、自ら持する所の者を他人に授け與へぬれば、念誦の遍數滿すと雖も成せず。復た更らに應さに須く每日三時に如法に供養すべし、念誦の數一十萬遍を滿せば、即ち應さに如法に呼摩供養すべし。當さに大麥を以てし、稻穀華を用ひ、或は油麻を用ひ、或は白芥子を用ゆべし。其一を取るに隨て酥と相ひ和して、眞言の數四千に滿たせよ、或は七八千にせよ。

或は(二)優曇鉢羅（ウトンハラ）木、或は阿說他木、或は波羅賒木、或は遏迦木、或は龍木、或は無憂木、或は蜜魯婆木、或は尼居陀木、或は奄沒羅木、或は佉陀囉木、或は賒彌迦木、或は鉢落叉木、或は阿波末迦木、或は末度迦木、或は謀母迦木。

上の如く說く所の諸木の中に隨て一木を取れ、麤と細とは指の如く、長と短とは十指許り。、、、、酥と蜜と酪とに柴の兩頭を搵て、每日の呼摩の數は上の說の如し。

(一) 霏　タナビクと訓ずべし、即明かなる貌なり。

(二) 優曇鉢羅　此れに瑞應と云ふ、阿說他は白楊、波羅賒は胡桃（クルミ）、遏迦は榲榜（マルメル）、賒彌迦は枸杞根、尼居陀は楊柳、奄沒羅は柰、鉢落叉は赤色、阿波末迦は牛膝なり。

闕犯あらば還て清淨なることを得て、然る後に眞言を誦せよ、悉地障礙する所なし。復た次に蘇婆呼童子行者の持する所の眞言を、餘の持誦者明王を繫ぎ縛（つけしは）り、或は斷じ或は釘破して成就せざらしめば、即ち須く應さに本尊の形像を作て、當路の部主の足下に置いて、面を須く相對すべし。然して結利吉羅（キリキラ）等の諸部の明王大威の眞言を以て誦持し、酥と蜜とを以て本尊を灌浴すべし。是の如くすること十日、此の法を作し已んぬれば、彼の餘明の所縛、即ち解脫することを得。

復た次蘇婆呼童子眞言の中に、制する所の諸法に於て、並に皆修行して、一として遺闕なけれども、仍ほ成せざれば、即ち應さに猛毒を以て彼の尊形を作るべし。結唎吉羅等の諸部の明王の眞言を以て、(一)其像の形を截て段々に片と爲し、白芥子の油を和して每日三時に而も呼摩を作すべし。是の如く七日すれば、即ち悉地を得。若し成就せざれば、應さに夢中に入て障因を示し見せしむべし、眞言の字に加減あり、或は法具せずと說かん。然も諸の明王自ら此の法を說くべし。(二)有用の行者、相好を示現すること、猶し海潮の終に時を違へざるが如くならん。其實の眞言は終に相ひ破れず亦相ひ斷し及び繫縛せず、其眞言の法も亦是の如し。是の故に行者明及び眞言を相ひ破

(一) 其像の形を截て　此れは治罰本尊法なり。

(二) 有用　用は力用なり、即力用ある行者なり。

し、乃至繫縛し、及び以て禁斷すべからず、眞言を加減して授け與ふべからず、曼荼羅も亦復是の如し。彼の法を廻換すべからず、阿吠設那すべからず、打縛すべからず、彼れを害せんが爲の故に呼摩すべからず、及び肢節を損し、惡疾を摧滅し、他をして癡鈍迷悶ならしむべからず、龍鬼の類を科罰すべからず、亦人をして毒を發して相ひ憎ましめ、及び損し厭縛すること勿れ、嬰兒の魅を治療すべからず、諸の衆生類を捕網し損壞する所あらしむべからず。

復た次に蘇婆呼童子、(二)餘の外宗の說く十種の法有て眞言成ずることを得と、所謂る行人と眞言と伴侶と所成就物と勤精と處所と淨地と時節と本尊と財物と、此の十法を具して眞言成ずることを得んと。又餘宗の說く三種の法を具して眞言成することを得と、謂く眞言と行人と伴侶となり。

又餘宗の說く四種の法を具して、眞言乃し成ずと、謂く處所と精勤と時節と依法となり。

又餘宗の說く五種の法を具して眞言乃し成ずと、謂く眞言と所成就物と處所と本尊と財物となり。是の如くの諸宗、或は十法を說き、或は八法を說き、或は六を說き、或

(二) 餘の外宗 外道の敎なり。

は四、或は三、或は二、各本法に於て演說すること不同なり。然も此の釋敎には二種の法を具して眞言乃し就す。一には行人、二には眞言なり。行人具さに戒律を行し、正勤精進して、他の利養に於て貪嫉を起さず、身と命と財とに於て常に戀着なく眞言の文字を脫錯し、加減せしむること勿く、聲相圓滿分明にして、所成就の法皆悉く具足して、佛と菩薩との所居の處に於て、法に依て念誦すれば、即便ち當さに意樂成就を獲べし。譬へば師子の饑餓に逼められて、大勢力を以て大象を殺害し、若は野干及び諸の小獸を殺すに、施す所の勢力、彼の象を殺すと一にして異る所なきが如し。行者上中下の事を成就するに、發す所の精進も亦復是の如し。行者若し鬪鬧の處に住する時に、即ち蚊と蚤と蠅と蚤と有て齧唼し、種々の音樂の聲を聞き、或は諸の人の歌ひ舞ふと、吟詠と小男と小女と婦人と等の、鐶釧と瓔珞と種々の音聲を聞き、若し人間、河と澗と及以び大海とに住すれば、即ち寒熱等しからざることあり、因て即ち病ありて、苦惱は身に逼り、又猛獸の大惡聲を發し、或は相ひ害せんと欲するに値て、人をして驚き怕れしめ、或は海邊に住しては海潮の波を見、及び大聲を聞き、行者をして恐怖せしめ、若くは江河と池沼とに住しては、即ち蚖と蛇と蝮と蝎との毒蟲の類饒し、皆

一 蚖 いもり。蛇 くちなわ、蝮 はみ、蝎 すくもむし。

是れ眞言を持する人の障礙の處なり、是の如くの種々の障礙の緣等は、當さに須く遠離すべし。好勝の處を覓め、勤加して心を勞し意を固くせよ、境に逢て心即ち散亂し、不定ならしむること勿れ。一念も退心あらば、還て初始より善く方便を行して、時を覓め節を觀じて、以て愚を執することと勿れ、惡人惡魔其便りを得ん耶。癡人をして罪苦の果を獲せしむること莫れ。

請問(二)念誦眞言軌則觀像印等夢證分品第六

復た次に、蘇婆呼童子念誦人、(三)太だ緩なるべからず、太だ急なるべからず、聲も亦此の如く大ならず小ならず間斷すべからず。人と共に語り心をして異境に於て緣せしむること勿れ。各其の字體訛錯すべからず。譬へば大河の日夜に流出して恒に休息なきが如く、持誦の人の修する所の福報●供養●禮拜●讚歎●の一切の功德、日夜に增流することも亦復是の如し。(三)念誦の人、心若し雜境を攀緣し、或は懈怠(ケダイ)を起し、或は欲想を生せば、應さに速かに心を廻らして、眞言の字句を觀ずべし。或は本尊を觀じ、或は手印を觀ずべし、譬へば觀行の人、心を眉間に置て散亂せざらしむれば、後時には境に對すれども心即動せず、彼の人をば即ち觀行成就(クワンギヤウ)と名くるが如し。念誦の人も亦

(一)眞言を念誦する軌則と、行人の心散亂せざれば本尊の像、及び手印を觀ずる等の法と、夢の好相を明す故に、念誦眞言○夢證分と云ふなり。(二)太だ緩以下念誦の軌則を明す。

(三)念誦の人心以下像と印とを觀ずる等を明す。

(一)少淨　少の字未詳。

復た是の如し、所緣の心處若し動搖せざれば、即ち持誦の眞言成就することを得、是の故に行者悉地を求めんと欲はゞ、當さに須らく心を一境に攝すべし、其心調伏すれば、即ち歡喜を生ず、其の歡喜するに隨て即ち身輕安なり、身の輕安なるに隨て、即ち身の安樂なり、身の安樂なるに隨て、即ち心定まることを得。其心定まるに隨て即ち念誦の人心に疑慮なし、其念誦するに隨て即便(すなはち)罪滅す。其の罪滅するに隨て即ち心淸淨なり、即ち心淸淨なるが故に即ち成就を獲、是の故に如來是の如くの說を作し玉ふ、一切の諸法は心を以て本とす、心淸淨なるに由て人天殊勝の快樂を獲、心雜染なるに由て便ち地獄に墮す、乃し傍生と貧窮の苦に至る、心極て淨なるに由て、乃し地と水と火と風と生と老と病と死とを遠ざけ、離るゝことを證して二邊に著せず、寂滅解脫す、(二)少淨の眞言に由て亦成す、當さに無常敗壞の樂を離るべし。是の故に諸法は皆心より生ず、自然に現ずるに非ず、亦時に由らず、自在天の作には非るなり、因緣なきにも非ず、亦我より能く諸法を生ずるにあらず、但し無明に由て生死に流轉す、四大和合するを假りに名けて色と爲す、色は是れ我に非ず、我は是れ色にあらず、色は我所に非ず、我所は色にあらず、是の如く四蘊は知るべし、是れ空なり、色は是れ無常なり、

猶し聚沫の如し。受は浮泡の如く、想は陽燄の如く、行は芭蕉の如く、識は幻化の如し、是の如くの見を名けて正見と爲す。若し異る見ならば名けて邪見とす。

(二)復た次に蘇婆呼童子、若し眞言を持する者の念誦の數足りなば、即ち自身悉地に近らんと欲すと知るべし。何を以てか知ることを得る、眠臥に於けるの時に當て夢中に好相あるべし。

或は自身高き樓閣に登ると見、或は大樹に昇り、或は師子に騎り、或は白馬に乘り、或は大白虎に騎り、或は大高山に昇り、或は犀牛に騎り、或は白象に乘り、或は空中に於て大なる雷の聲を聞き、或は白牛に乘り、或は黃牛に乘り、或は錢財を得、或は華鬘を得、或は好淨の五綵の衣を得、或は酒肉を得、或は水類の果を得、或は白と青と紅と赤色との蓮華を得、或は如來の舍容を得、或は如來の舍利を得、或は大乘經藏を得、或は身大會に於てり、處佛と菩薩と聖僧と共に同座して食し、或は駱駝を得、或は犢子を得、或は車に滿てる載物を得、或は白拂を得、或は鞋履を得、或は橫刀を得、或は孔雀の尾の扇、或は金の瓔珞を得、或は寶珠傘佉を得、或は端正の美女を得、或は己身の父母に遇ひ、或は金寶嚴身の具を得、或は牙牀に臥して覆ふに白衣を以てするを得、或は自身大海に汎び過ると見、或は江河と龍池と(二)陂漾とを渡り、或は飮酪を得、或は血を以て自身を澡浴すと見、或は自身寺塔と僧房とに入ると見、或は如來座に處して人天八部の爲めに六波羅蜜の法を說き給ひ、身亦會に就て、佛の法を說き給ふを聽くと見、或は菩薩爲めに法を說くと見、或は優婆塞世俗を厭離するの法を說くと見、或は優婆夷女人を厭離するの法を說くと見、或は大力の諸の天王、爲めに天上快樂を見、或は國王を見、或は大力の阿修羅衆を見、或は大淨行の婆羅門を見、或は英俊の丈夫を見、或は端正の婦人を見、或は大富の正直善心の長者を見、或は己親の眷屬一處に聚り會するを見、或は苦行の仙人を見、或は持明の諸仙を見、或は妙なる持誦人を見、或は日月を呑納すと見、或は身大海に於て臥して海中の衆生腹中に流れ入ると見、或は四洲の海水を飮むと見、或は龍に乘じて水を灑ぎ四洲に於て潤すと見、或は自身空に飛ぶと見、或は身須彌山に端坐し四洲の龍王皆來て頂禮すると見、或は自身屎坑に於て墮すと見、或は自ら人の精を飮むと見、或は人の肉血を喫ふと見、或は大火聚に入ると見、或は女人隱れて己身に入ると見る。

復次に蘇婆呼童子、凡そ持眞言者功行畢らんと欲して、是の如く等の殊特の夢を見已

(二)復次に蘇婆以下夢證即夢中の好相を明す七十五種あり。

(二)陂漾　澤なり

んなば、應さに知るべし、一月及び半月にして、當さに大悉地を獲べし。若し持誦の眞言を論ずれば、夢想の境界を說き盡す可らず、略して粗知ぬべきのみ、精進不退にして即ち是の如くの上上の境界を獲べし。

請問ニ悉地相分品第七

復た次に、蘇婆呼童子、我れ今轉た悉地に近き法を成就することを說かば、其念誦の人當さに愛樂の心を生發すべし、雜染の境を攀緣することを得ざれ、亦饑渴と寒熱と等の苦を辭せざれ、諸地の外相の境に於て心を動搖せざれ、境に逢て亂れざれば、一切の蚊蝱及び蛇等の諸の惡毒蟲も皆敢て害せず、毗舍闍鬼及び諸の餓鬼富單那等の諸の餘の鬼類、敢て近く念誦の人の影の中を過ぎず、何に況や身に觸れんや。出す所の言敎人皆信受し、轉た聰明を加へ、善く文章を綴り、諸の書算に於て轉た巧妙を成す、善法を樂ふを以て勤て淨行を行す。復た地中の伏藏を見、身に病苦及び汚垢膩なし。身に香氣あり、若し人の見及び以て聞くことある者は、悉く敬念を生じ、一切の貴妃女自ら來て呼召す。心淨なるを以ての故に、虛空の中に於て諸天の語するを聞き、復た彼の形及び乾闥婆と夜叉との類を見る、其持誦者其勝妙なる好相を見已んなば、即ち應さに

（一）妙臂童子の請問に對して煖氣と煙相と火光との三種悉地の相等を明す故に、悉地相分品と云ふなり。

自ら我れ眞言の悉地に於て近かしと知るべし。即ち應さに成就の法事を被るべし。

復た次に蘇婆呼童子、念誦の人起首して悉地を求めば、應さに戒を具すべし、或は二三日亦は須く斷食すべし、然る後に成就の法を作すべし。

爾時に蘇婆呼童子執金剛菩薩に白して言く、尊者先きには食に由るが故に淸淨なることを獲得すと。今云何んが應さに須く斷食すべしと言ふや。世尊亦說き玉はく、車に膏して牛の氣力を省けば、車即ち易く牽くが如し、衆生も亦爾り。若し食飮せざれば身命全ふし難し、何に況や道を修するに前み進み、果實を求め望まんや、身力の爲めの故に、我れ今未だ斷食の意義前後不同を知らず、略して少分を決し給へ。時に執金剛菩薩、蘇婆呼童子に告げて言く、我れ今汝及び未來の衆生の爲めに疑惑を除き去らん、諦かに聽き善く之れを思念せよ、疑慮を生ずることを勿れ。汝が問ふ所は先きに食に由るが故に、淸淨を獲得すと說く。今復云何んが而も斷食せしむるやと、汝が言ふこと是の如し、深心にして諦かに聽くべし。童子の言く、善い哉唯然り、敎を受く願樂して聞かんと欲ふと、我が出す所の語は、心を淨からしめんが爲めの故に、敎へて斷食せしむ。但し諸の衆生は、皮を以て血と肉と髓

と腦と肝と膽と腸と胃と心と腎と脾と肺とを纏縛し、脂膩と痰癊と屎尿と、種々穢れたる物常に流れて停らず。是の如きの身は、地と水と火と風と、假りに合して成立す、四の毒蛇を之れを一篋に置くが如し。彼れ等をして屎尿涕唾の臭穢を出さしめずと欲するが故にして、爲めに斷食せしむ、道を妨ぐるが爲めに、而も斷せしむるには非るのみ。若し持眞言者心に婬想を生せば、上に說く所の如く、不淨の身を、慧を以て觀察して、起す所の欲心即便消滅し、身と命と財とに於て亦戀著せざれ。眞言を持する者、斯の觀門を具することあらば、此れ等の人類は、念誦の法速疾に證驗す。即自身悉地を去ること遠からずと知るべし。自心に知り已んなば、應さに白月の八日、或は十四日或は十五日を取るべし。一ばら依ること前の如くにして、好上の地を得て細瞿摩を用て、地に塗り淨め已て、次に香等を塗り、尊像を安置し、及び彼の尊容に香華飲食及び遏迦水を供養し訖已て、便即ち十方の佛菩薩を讃歎し供養すべし。次に復た(二)本部の王を供養し、次に復た(二)自部の明王を供養すべし。然る後に供養する所は、(三)本所持の尊なり。次に復た重て妙菩提心を發し、廣大なる慈悲の願を興すべし。一切衆生の常に(四)四趣に溺るゝを出ることを得せしめんが爲めの故に、又應さに大乘開經、或

(一) 本部の王　部主なり。
(二) 自部の明王　本部の結界の尊なり。
(三) 本所持　本尊なり。
(四) 四趣　地獄・餓鬼・畜生・修羅。

は(一)吉祥偈、或は法輪經、或は如來秘密經、或は大燈經を讀むべし。中に於て任に隨て一部を讀むべし。然る後に即ち須く、八方界を結し、並に虛空と及び地界等を結し、又眞言を以て自身被甲(カウ)すべし。上の如く說く所の諸の曼荼羅は、淨彩色を以て意に隨て一を作せ(二)八方を護する神を要ず須らく彼れ等を安置して、能く諸の障難を摧くべし。

復た次に、蘇婆呼童子、應さに師子座明王を以て、其(三)茅座を眞言して、曼荼羅の內に安すべし。先づ其身を護る所成就物を壇上に於て安せよ、持誦の人彼の物の上に於て、須臾(シュ)の間に復香水を灑ぎ、相應の法を以て呼摩すること一千遍、先づ三箇の阿說他(アヒッタ)葉(エラ)を取り、所成就に擬する物を葉の上に於て置き、白淨の氎布を以て而も其上を覆ひ、即ち應さに如法に專心に念誦すべし。乃至當さに三種の相を現はし已るを即成就と名くべし。何等か三相なる。煖と煙と火と是れを瑞相と名く、即ち三種悉地成就と名く、其三種の相現ずる時、一時に頓に現ず可からず。瑞に下と中と上とあればなり。何を以て是の如くなるや、一人有て世間にして名利を求め覓めて、富貴自在にして、去る處に他人をして敬念せしめんことを得んと欲す。如上の一人、是れ第一に煖氣の悉地

(一) 吉祥偈　吉慶の讃。
(二) 八方を護する神　即帝釋等の八方天なり。
(三) 其茅座を眞言して　加持するを眞言して云ふ、即師子座の眞言を以て茅草の座を加持するなり。

を得る者是れなり。第二の中人あり、世間の八苦に惱まさるゝを厭離し、自ら己身は久住處の法に非ずと觀して、罪を造ること彌々多くして、三途に墮落せんことを恐れ畏み、所以に形を轉じて其身影を滅することを得んと欲して、中壽の身を得、世間の人は得べからず、煙悉地の者是れなり。一人あり下と中との生處を欲せず、直に三界に於て出でんと擬し、永く諸苦を離るることを得んと欲して、持明仙人と作て、四大の軀を變じて清淨微細の身を求め、龍天八部も見ること能はざる所なり。何に況んや人をや。若し身を見せしめんと欲せば、意に隨て自在に天人の座に於て處して衆の爲めに說法すべし。或は一小劫、或は一大劫、或は無量劫說法絕えず衆生を利益す。是の如くの辯才を盡し求むべからず。菩薩の位を紹がんと欲ふが故に、譬へば人の死して冷觸身に遍し、却て中陰身中に來り入るを得、却て甦活を得て壽命百年たるが如し。又日光の以て火珠を照せば、便ち其火を出すが如し。亦此の如く等は、後に於て是の如く等の上上の人有て、能く勤苦し念誦し精進して懈らず、眞言の悉地成就を獲。菩提心の光を以て無明の闇を照し、慧珠便ち出て四辯俱に發し、三明を證得して三毒永く滅し、八苦俱に無ふして八聖道を得、九惱休息して九次第定を得、十惡屛け除き十一

(一)若し心內上の煙火光の悉地の相は心外に現はる、之れに對して心內の相を明すなり。

切入を得、諸力具足して金剛菩薩の如く、神通自在にして障礙あることなし。當さに金剛不壞の身を獲べし。是れ火光悉地を得と名くる者是れなり、是れを成就の法と名づく。(一)若し心內成就の事を論ずれば、其相若し現ずれば即便ち悉地す。云何が心內の悉地、或は佛像の頂上に於て華鬘の動くを見る。

或は尊容の眉の動くを見、或は嚴身の諸の瓔珞を見、或は空中に種々の天華を雨らすを見、或は空中に於て微し香風有て諸の林中に動き、或は細微の香氣の雨を下し、或は地動を覺へ、或は空中に聲有て、是の如くの言を作して、汝が求むる所の者、今當さに之れを說くべしと云ふを聞かん。或は燈焰明盛にして、其色潤澤に曜くこと金光の如く、增長して高さ一丈に餘るを見、或は油盡きんとして、燈光轉た盛んなるを見、或は自身の毫毛頻頻として悚竪して、心に歡喜を生ずるを覺へ、或は空中の天樂の聲を聞き、或は空中に本尊及び其眷屬圍遶して下來するを見ん、若し上の如き斯れ等の相貌を看ば、報て自身必ず悉地を獲と知て疑ひなし。即ち應さに速かに香華を辨ずべし、淨器の中に於て香水を盛り滿て、復た五寶を安する是れは遏迦とす、珍重奉獻し、即ち深心を以て恭敬し胡跪して頭を叩き、本の功夫を量て應さに果を求め願ふべし、

即ち自ら陳說せよ。彼の尊の言玉ふ所は、善い哉佛子、汝が求め願ふ所豈に小なるのみにあらざらんや。若し衆生ありて、心を發して菩薩の行を修すれば、佛身すら尙ほ獲、何れの處にか此の願の汝に於て隨はざることを慮らん。今より已去汝が所欲を恣にすべし。終に違せざるなり。汝願を得るに因て、一切衆生も亦復是の如くならんと。速に菩提を發して早く解脫を求むべし、既に願を得已て、歡喜して深心に頂禮(一)胡跪して讃歎(サンタン)し、後遏迦を以て如法に供養し、持する所の眞言、彼の尊の前に對して之れを誦せよ。然る後即ち應さに如法に發遣すべし、一切の眞言を持する者の法皆是の如し、錯悞して抂けて功夫を棄てしむること勿れ。

請問(二)下鉢私那分品第八

復た次に、蘇婆呼童子、若し念誦の人、鉢私那を問ひ下さんとならば、應さに當さに是の如くの法をもて請召すべし。所謂(いはゆる)手指或は銅鏡及び淸水と橫刀と燈焰と寤等と虛空と尊像と童子と眞珠と火聚と石等と、是の如くの處に於て、鉢私那を下すとは、請召し來し已んなば、當さに即ち自ら天上人間及び過去未來現在と、三世を超越せる善惡等の事を說くべし。一一に具さに說くべし。法若し闕することあり、眞言を持するに

(一) 胡跪　胡國の坐法なる故に胡跪と云ふ、即互跪なり。

(二) 鉢私那を下して三世非世吉凶禍福等の事を知ることを說く、故に下鉢私那分品と云ふなり。

字數或は加減あり、或は經て誦せず正信を具せず亦供養せず。不淨の地に於き天晴明ならず、童子の身分或は臏り或は少けん。斯の過等あらば私那下らず。若し請せんと欲はゞ、初に應さに私那の眞言を持誦すべし、持誦の功畢て、即ち白月八日、或は十四日、或は十五日に於て是の日食せず、瞿摩(コマ)を以て地に塗り、牛皮の形の如く、即ち童子を將て淸淨に澡浴し、新白衣を著して其上に於て坐せしめ、華香等を以て而も供養を爲し、自ら亦內に於て、面たり正東に向て而も芽草に坐せよ。

又若し彼れをして、鏡の中に相貌を現はさしめんと欲はゞ、則ち先づ其鏡を取て梵行婆羅門の呼摩の灰を以て、鏡を揩て淨かしめ、或は七八遍乃至十遍して、曼荼羅の上に於て置き仰き著けよ、鏡中に即ち世間の事を現出すべし。

又橫刀の中に於て、事法を看ることは、亦同じく鏡の如くせよ。

若し手の指の面の上に於て、吉凶を看んと欲はゞ、先づ紫鑛水を以て、其指を淸潔にして、後に香油を以て之れに塗れ。即諸の吉凶の事を現せん。

若し水中に於て看んと欲はゞ、其水を淨め漉て、瓶の中或は甕の中に於て置き、然る後に一りの童子を遣はして、中に於て之れを看せしめよ、即ち皆一切の吉凶を見ん。

又寶等に於て下るを見せしめ、及び眞珠の中に看んと欲はゞ、即ち淨水を以て寶等及び珠の上に於て灑いで、端心淨住にして眞言百八遍を念誦せよ。即ち一切の相貌を現せん。

又若し尊像をして下らしめんと欲はゞ、華を以て供養すべし、即ち自ら之れを現す。燈の中も亦前の法の如し、乃至夢中に爲めに諸事を說くことは上の所說の如し。下私那の法具さに修行するに、若し下らざれば即應さに一日斷食して、具さに八戒を持して大慈悲を發すべし。或は制底に於てし、或は巖嚴の像の前に於て部母の眞言を取り、或は部主の眞言を取て作すこと是の如し。復た誦念の法極て專心を須ゐよ、身を搖かし及び眠ることを得ざれ、茅草に於て坐して前の部母と部主との眞言等を持して、任に(一)一道を誦して數落叉、或は二落叉に滿て意に將に足ぬとす。此の法の若きは我が唵字を呼ぶ、枯木尙ほ其中に入て下語せしめん、何に況や人をや。

又若し童子の所に下さんと欲はゞ、即ち三十箇を揀び取り、或は八或は七、或は六、或は五、或は四、或は三、或は二、或は一、或は八歲の者の身分の血脈、及び諸の骨節悉く皆現はれず、圓滿し具足して、眼目端正にして青白分明に手指纖(ホソ)く長く、

(一)一道　一種と云ふ意なり、即眞言一種なり。

(二)十箇　人數なり或は八等亦然かなり。

脚掌齊く平かに、八處表裏圓滿し、身相具足し、鬚髮青黑にして、人の見る所の者心に愛樂を生ぜん。若し是の如く等の童男を得ては、白月八日、或は十四日、或は十五日に於て、澡浴清淨にして新淨衣を著し、香華と然灯と塗香と、燒香と種々の飮食を以て本尊を供養し、及び八方を獲る大神、及び阿修羅と諸の餘の鬼類一一に皆須く供養すべし。又妙華を以て彼の童子の身上に散らし、及び香をもて身に塗れ。然して後に念誦の人、手に香爐を執り、本尊を誦禮して眞言を念誦す。先づ幹字を中間に置て、應さに揭唎忻拏之句を呼ぶべし。又阿毗舍(二合速と云ふ)遍入の字と云ふ)を呼べ、私那下り已んなば、即此の相現することある時に、眼目歡悅して物を視るに瞬かざることを爲し、出入の息なくば、即ち當さに知るべし、私那合すと、即ち遏伽水と及び燒香とを取て供養し、心に(二)最勝明王の眞言を念じて、即ち應さに敬て問ふべし。尊者は是れ何れの類の神なるや。自と他とに於て疑惑する所あらば即應さに速かに問ふべし。彼れ自ら當さに三世の事の利を求め利を失ひ、及び苦樂等を說くべし。聞く所の敎宜く速かに受持すべし。

(二)最勝明王　無能勝明王なり呪は吽なり。

疑惑を生ずること勿れ。問ふ所の事畢て即ち發遣すべし。若し此の法を具すれば、私那速かに下る、若し法に依らざれば、即ち成就を得ず人の爲に笑はれん。復た私那自ら下るとは、彼の童子等面貌怡悦し、容顏滋潤し、眼目廣長にして、黒睛を遠て外に徹し赤色あり、精神意氣大人の相有て出入の息なく、眼も亦瞬がざれば即ち應さに知るべし、是れ眞の私那なり。若し魔等下らば、即ち別に相貌あらん、眼赤く復圓にして、人の瞋て視るが如し。眼睛轉せず、口を張て恐怖し、亦出入の息なし、眼亦瞬がざれば、當さに知るべし、夜叉等下ると、即須く發遣すべし。若し肯ひ去らざれば、即應さに便ち(一)妙吉祥の偈を誦し、或は(二)不淨忿怒金剛の眞言を誦し、或は大集陀羅尼經を讀むべし。上の如く讀誦しても、若し去らざれば即ち應さに師子座の眞言を以て遏伽水を用ひ、或は波羅賀木と酥と共に相ひ和して、呼摩すること百八遍、或は胡麻を以てし、或は稻穀華と酥蜜と相ひ和して、呼摩すること百遍、最後に軍荼利の眞言を以て呼摩すること七遍、或は三遍すべし、即便ち捨て去らん、智者善く是の如くの妙法を解し、復能く一一に法の如く修行すべし、久く勞苦せずして而も成就を獲ん。

分別(三)苦難分品第九

(一) 妙吉祥の偈　吉慶の讃。
(二) 不淨忿怒　烏瑟沙摩明王。
(三) 苦難　高本和本遮難とあるを是とす、此品眞言の悉地を得る遮難を分別し明す故に難分と云ふなり。

復た次に蘇婆呼童子、念誦の人有て、過去に阿羅漢を殺し、今世に父と母とに返逆し、並に和合僧を破し、瞋心を懷くを以て、佛身より血を出し、惡習氣の故に今生に人の過惡を求め、事に觸れて閑ならざれども、詐て解する相を作す、是の如く等の人善友に値はず、其友惡しきが故に反て邪見を生じ、又窣覩波を破り、及び畢定の菩薩を殺し、自ら羅漢母を汙し、人を敎へて殺さしめ、或は僧の財物を盜むこと、或は多或は少ならん。世尊は是れを五逆無間の罪人なりと說き給ふ。若し犯すこと一罪ならば一倍を增す。若し具さに五逆を犯さば、轉た五倍を增し、て命終し當さに無間地獄に入て、十大劫の苦を受くべし。復た現身に罪を造ること邊際を知らず、癡心高慢にして過を懺首せず、轉た我見を生ず、而も眞言秘藏を誦持せんと欲して、假使ひ勤苦して眞言を念誦すとも、終に亦惡地を獲ず、障り重きを以ての故に、未だ對首して其罪を懺謝せざるが故に、未だ佛物と法物と僧物と及び一切の衆の知識等の物を償はず、凶突頑愚にして、曾て一毛頭の分をも改悔せざるが故に、何んが能く眞言を持誦して、悉地の果を獲んと求ん耶、四趣長遠なり、一たび中に於て墮せば、何れの時か當さに出離解脫を得べき。此れ等の苦類の一切衆生、惡道の業を受けざれば、世尊一闡提及び地獄等の苦あ

りと說き玉ふべからず、何ぞ須く解脫を得んことを求めて、心を苦しめ體を毀て、而も悉地を求むべけん。

又諸佛の說き玉ふ所の微妙の經典を、瞋れる心をもて損壞し、或は火を放て焚燒し、或は水中に棄て、或は不淨の厠の中に棄て、或は法身を謗り、或は持戒の比丘と比丘尼と優婆塞と優婆夷とを殺し、或は打ち罵らんと欲ひ欺き陵りて、惡言をもて謗り毀ち、其長短を求め、火を持して伽藍精舍を燒き、尊容及び僧房等を毀ち壞る。此れ等の罪をもて、斯の人の報盡き命終して、當さに十方一切の阿鼻地獄等に墮して、皆千劫を受くべし、然して後に餓鬼の中に墮す、鬼の身畢り已て、復た傍生に墮す、傍生畢り已て、最後に復た人身を得ぬれば六根具せず。常に下賤の家に生れ、乞匄して而も活す、身力を役使して恒に死屍を儲擔するを以て、財を求め命を活し、食も飮も其口に充たず、恒に饑餓を受く。食と飮とを擇はず、或は狗猪猫鼠等の肉を噉て、以て其命に充つ、若し善友に逢へば即ち菩提を發し、若し闡提愚痴等の人に値へば還て惡業を造り、復た地獄に墮して還劫數を經る。世尊の說き玉ふ所は諸佛如來も、還て如來を供養し給ふ。何を以ての故に、福を求め玉ふ故にと。何に況んや凡夫として、專ら頑愚を事として、福を求めざらん耶、菩薩は衆生を憐愍して而も佛身を得、一切の衆生を捨てざれば、見る者觀視し敬念して猒足あることなし。菩薩は一衆生の命をも害せず、何に況んや多の命をや、害せざるを以ての故に、而も諸の病苦無きことを得。身具足することを得て、佛を得たるの後、復壽命を增す。食を施すことも亦爾なり、壽命の長きことを得。衆生佛の影の中に遇へは、皆安樂を得て身命を保全す、菩薩は常に衆生に謙り下て承接し供養す。若し須むる所あれば、前意に違はずして皆悉く之れを給す。若し前人法を解すれば、身を以て牀座として其上に坐せしむ。妙法を聽くを以て、得て以て奉行し退轉を生せず。佛の常身を求む、何に況んや、凡夫一も解す所なく、福は毫分も無ふして一切を輕んじ、慢り而も高心を事として、智者に遵はず、擅惡の業を行す。今罪福の二を說くこと等し、粗略して之れを言へば、罪ある人は先づ懺悔を求め、對首して其過を發露し、一一具に述ぶべし、覆藏して述べざれば罪亦滅し難し。然して後に好き明師を尋ねて、遵承し供養し珍重し看仰して三昧耶に入る。法を請ひ求め許を蒙りて壇に入ることを得已て、後に於て漸々に眞言の法則を諮問し得已て、修行して當さに悉地を得べし。善心なき者は虛く語切を費せども、唯し地獄の苦楚能

く此れ等の類を廻す。

復た次に、蘇婆呼童子、若し念誦の人は、先づ三寶の處とに於て恭敬の心を起し、謙下卑順して前に向ひ、胡跪し合掌して、尊者に白して言く。我れ今懺悔す、一切の罪障、願くは悉く消滅せん、今より已後更に重て造らじ、願くは尊慈悲して我れ等を攝受し玉へ。佛法の中に於て無上菩提を發す。佛を得るに至るより已來、惡魔の我が菩提眞實の見を壞するに値ふこと勿らん。願くは尊證知し玉へ、今より向去更に餘の邪魔外道惡人に歸せじ。亦雜類の諸の天神等を禮拜せじ。唯し佛菩提及び三寶の所にをいて心を繫け念を一にして誓て移易せじ。常に是の如く等の願を發せば、其所作念誦の事法速かに悉地を得、亦衆生を救攝することを得て、代て苦惱を受け、衆の須むる所の物、我れ薄福なりと雖、其力に隨て辨じて、悉く充足せしめん。我れ菩提心を發し、眞言を念誦する威力を以て、我れをして猛害毒惡の人類を摧伏せしめ、害を爲すこと能はず、自然に消滅せん。一切の衆生をして、悉く畏れ懼る、ことなからしめん。我れ今眞心をもて念誦するを以て、諸天善神衞護するが故に、眞言の威力思議すべからず、一切の衆靈欽敬し恐怖す、何に況んや凡夫の惡人として、而も摧滅せざる者あらんや。行者凡そ眞言を持する者は、故らに手を以て草木を斷ち、脚を以て蓮花及び諸の壇地、並に契印等を踐踏することなかれ。亦復た諸の藥等の類を、禮拜せよ、亦鬼神を供養し及び祭祀するの食を喫し、或は地に棄著する所の食を喫することなかれ。婦人と共に語り及び畜生等と清淨の處に於て、爲めに非法の事を行ずること勿れ。明と及び藥とを以て、諸の蛇類を捉へ、或は象に乘り、或は及び生驢を走らしめんと欲ふが故に、杖を以て之れを打ち、病難に於て致し、及び苦難に遭ふ人の處に慈悲心を發さざらん。是の如きの人は、眞言を念誦すとも、亦成就し難し、智人と名けず。譬へば虛空の絲に量るべらざるが如く、三寶と及び衆人との處に於て、益及び損を行じて、善と惡との報を獲ることも亦復是の如し。又網羅と羂索と及び諸の方便とを作して、衆生を傷害し及び猫狸殺羊を畜ひ、鸚鵡と及び諸の鳥の類を籠禁することなれ。是の如きの人は、今世後世に眞言を念誦すとも亦成就せず。是の故に世尊に供養するの物を受用すべからず。所供養の食亦踐むべからず。脚をもて踏み地に墮するの食は供養物に堪へず。大自在天と及び日月天と火天と那羅延天とを頂戴し亦禮拜すべからず。假令苦に遭ふとも亦禮すべからず、彼れが所說の教も誦すべからず、亦供養すべから

ず、人有て彼の天を持誦せば、持誦の人に亦瞋を生ずること莫れ。但し隨喜すること莫れ。當さに憐愍を邪見に墮する人に加ふべし、亦彼の眞言を誦し彼の德を讃歎すること勿れ。設ひ若し財有て供養すとも、慈悲を以て願を至せ、一切の衆生當さに正見に住すべしと、是の如くの願を發すべし。凡そ所作の業あらば、先づ當さに一切の諸佛、及び所居の處を禮拜し、次に一切の金剛護法善神の衆を禮すべし、譬へば初月の未だ圓滿ならずと雖、然も諸人等く敬を致し、禮拜するが如し。念誦の人常に須く菩薩と金剛と及び緣覺と聲聞衆とを尊敬すべし。未だ覺滿せずと雖、漸々に當さに菩提の滿月を成ずべければなり。是の故に當さに須く敬を致して、諸の菩薩一切の聖衆を禮拜すべし。彼れ等の菩薩は、能く一切衆生を荷負し救濟するを以ての故に、大慈悲を發し、已に淳熟するが故に神力思議すべからず。大精進を具して眞言秘藏此れより而も出づ。愚痴下劣の衆有て、若し拜せざる者は、但眞言を成せざるのみに非ず、亦諸佛を毀ち謗る。譬へば華より乃ち果實を成するが如し、華は菩薩の如し、果は菩提に喩ふ。是の故に應さに須く佛法僧寶を頂禮し歸依すべし、菩薩復欲を行ずる者に於ては、欲を行ずることを示現し、剛强の者に於ては剛强を示現し、柔輭の者に於ては柔輭慈悲を示現すと雖、然れども彼の菩薩には憎愛なし。云何んが彼れ等の菩薩を禮せざらん、種々の眞言法則を行ずるを以て、類に隨て能く諸の衆生の願を滿するが故に。復た能く一切の業果を了知せり、是の故に應さに尊師を禮すべし。

國譯蘇婆呼童子經卷中 終

音釋

搵　烏沒の切。齧　五結の切、噬なり。濼　匹角の切、陂澤なり。腎　時忍の切、水藏なり。[illegible]　時正の切、多なり。礦　古猛の切。傭　餘計の切、賃なり。羖　公戶の切、牡羊なり。

國譯蘇婆呼童子經卷下

唐中天竺三藏輸波迦羅共沙門一行　譯す

請問(二)分別道分品第十

復た次に、蘇婆呼童子、我れ今念誦の人の爲めに八聖道の法を說かん、謂く正見と正分別と正語と正業と正命と正勤と正念と正定となり。此れは是れ諸佛所行の道なり、念誦の人此の道を行せば、眞言乃し成じ、此の報盡くるに於て、復た人天勝上の妙處に生せん、過去の諸佛此の道を行ずるが故に等正覺を成す。現在と未來との諸佛も亦復是の如し。身と口と意との業に修する所の功德、常に正敎に依て疲倦を生せず。是の如く修行せんと欲するを、乃し正業と名く。飮食と衣服と臥具と、及び湯藥を受くるに、常に知足を懷いて染著を生せず、是れを正命と名く。己れの身を讃せず、他人を毀らず、諸の過を遠離すること、火坑及以び猛獸を避くるが如くし、常に寂靜を樂ふ、是れを正語と名く。吉凶男女の事を占相すると、天文と地理と調應と調馬と、及以び調象と射藝と書算と世間の言論無益の典とを學ばず、斯の過を遠離するを是れを正分別と名

(二) 此の品最初に八正道を結する故に分別道分品と云ふなり。

く。象鬪ひと馬の鬪ひと、牛羊雞犬等の鬪ひと、男女の相扠相撲とを觀ず、亦往て觀ず、上の如きの戲れを離る、是れを正念と名く。王臣と盜賊と鬪戰相殺と婬女の論、及以び謎語を說き、往昔の事を說かず、念誦の人乃至未だ成就せざるより、中間に城と村落と邑里と及び生緣と伽藍制底の處と、外道神祀所居の處とに入るべからず、若しは園林池河此の如く等の處に並に往くべからず。

若し前の如く七愆の事を作さずして、常に山林高峻崖峯四絕の頂きに居し、晝夜に懈らず、眞言を念誦すれば、果を獲ざることなし、是れを正勤と名く。

復た次に蘇婆呼童子、若し念誦の人、前の如き上妙の勝れたる處を獲ざれば、應さに空閑の神廟に居すべし。或は樹下に居し、或は河邊に住し、或は山の側に居し、或は泉池と林間と、或は無人の處と、或は空室に居して一心に念誦し、或は一年の中に安居を除ての外か、春秋の二時意に隨て、山林と河邊と泉池と空室とに遊行し、心を專らにして念誦すべし。譬へば比丘の夏の月、安居するが如く、念誦の人も亦復是の如し。行人念誦の遍數を滿つると雖、正夏は安居して成就の法を作すこと勿れ、作法せずと雖、念誦間斷することを得ざれ、夏を解き已て後に、如法に護身し、方に成就の法を

作すべし、愼て法の外に事を行ずること勿れ。

復た次に蘇婆呼童子、今念誦の人の爲めに、呼摩の法の爐を置く差別の法を說かん。此の法或は圍圓に作り、或は三角に作り、或は四方に作り、或は蓮華の形の如くすべし、並に須く基あるべし。爐の口に脣を安き、泥をもて拭て細滑にして、外邊の(二)基階並に須く牢固にすべく。

若し善事を作し、及び錢財を求め、他をして敬念せしめんとして、息災の法を作さば、其爐須く圓なるべく。

若し一切の諸事を成就せんと求め、或は女人及び童子女等を求めば、其爐須く蓮華の形なるべく。

若し阿毗者囉の法を作し、或は走等の事を爲さば、其爐須く三角に作るべし。

若し諸龍及び餘の鬼類を調伏し、或は火に燒かしめ、或は苦しましめんと欲はゝ、其爐は須く方なるべし。某脣及び爐は翟摩を以て塗る。復た茅草を用て基の上に於て布き、及び基の下に安し、塗る所の處に塗華香等所辨の物に隨て三寶と及び本部主と並に諸明王と本眞言主等とに供養せよ。爐の中に火を生すに口を以て吹くべからず、扇を以

(二) 基階　爐の緣を云ふ。

て火を扇ぎ、然して後に稻穀の華を取て酥に和し、或は胡摩を酥に和して、本部の明王の眞言を以て念誦して、而して呼摩を作すこと七遍、或は八、或は十乃至二十一遍して明王を供養すべし。其作法の人は、面を東に向て坐せよ。酥蜜酪等を取て、共に一器の中に和して呼摩の木を取り器中に向け、兩頭に於て攪し、爐の內に擲げて之れを燒く。是の如く日日停めず、或は七日と二七と三七と四七と五七と六七と七々日と或は一月、或は百日、或は百二十日すれば其驗證現はる。若し上の如く作法しても、成ずることを得ざれば、年を以て期とせよ。三年六年或は十年十二年作すこと不退ならば、畢に大悉地を得ん。必ず須く如法に呼摩すべし。正く燒火の法の時は、應さに火の色を觀ずべし。其の爐中に於て火色爆焰の聲あらば成ずべし、成せざれば自ら相貌現はるゝことあらんのみ。其の火煙りなくして、焰金色の如くにして右に旋りて宛轉し、焰烽熾多なり。其色或は白或は紅色の如く、或は焰極て赤きこと猶し珊瑚の色の如く、滋潤して其焰上に衝き、復た流れて下に廣く、或は日月の光の如く、其焰の形狀、瓶と憧と傘蓋と(二)吉祥の字形と螺貝と蓮華との如く、或は呼摩の酥の杓等の形の如く、或は三股と五股との金剛杵の形に似たり。或は橫刀の如く、草束の形の如く、或は車の

(二) 吉祥の字形卍字なり。

形に似たり。或は蠅の拂ふ聲の如く、笛と臧と篥と等を吹く聲のごとく、或は螺の聲の如くならん。上の如き種々の音聲を得、其氣猶し酥を燒くの香の如し、復爆烈なし。其火扇がざるに自然に斯の如くの相現はるゝことを得ば、必ず當さに廣大の悉地を獲得すべし。又燒火を觀るに、不成就の相貌の法とは、正く燒火の時、或は煙りを起すこと多く、亦復爆烈して其焰發り難く、假令發る時も亦增盛ならず。後時に頓に滅ること、由し火なきが若し。焰色憔悴して黑きこと、闇雲の如く波羅賒の形の如し。猶し一股の叉の如く、又箕と男根と牛角との形の如し、其火聲を出すこと狀驢の鳴くが如し。又復火を迸らしめて、念誦の人を燒き、爐の內の香煙、死人を燒くの氣の如くならん。斯の如くの相を現はし已んぬる時は、念誦の人悉地得難し。行者斯の不祥の相を見ば、即應さに(二)赤身明王、或は(二)吉利吉羅を以てすべし、或は不淨忿怒等の明王の眞言を以て、而も呼摩を作さば、其不吉の相即當さに消滅すべし、必ず須く如法なるべく、是れ輕爾に非るなり、念誦の人愼で(三)三處の毛を剃除すること勿れ、亦火をもて燒き、復藥を塗りて落さしめ、及び手を以て拔くべからず。譬へば人あり手に金刀を執るに、若し善く解せずして執持すれば、自ら損害すべきが如し。眞言を持する

(一) 赤身明王　馬頭觀音。
(二) 吉利吉羅　軍荼利なり。
(三) 三處の毛　脇の下及び大小便道なり。

者法則に依らず、婬亂熾盛にして、三處の毛を除て、女人に呈示して、欲想を發生するを以て、但眞言成せざるのみに非ず、利刀を執て自ら其身を害するが如し。念誦の人縱ひ法則に依らざれば其部主の明王眞言主等は、皆是れ菩薩なれば終に人を損害せず、左右の侍從は彼の過を見るが故に、即便ち損害す、當さに須く謹卓すべく非違を行じて自ら其禍を招くこと勿れ。

復た次に蘇婆呼童子、若し念誦の人、及び成就せんと欲し、並に諸法を作すに、障難あること無く悉地を求めば、諸の飮食を以て諸天と修羅と藥叉と龍等と伽路羅と共命鳥等と、(一)羯吒布單那と乾闥婆と(二)部多と諸鬼魅等との、或は地に居し、或は虛空に在て行く者を祭祀すべし。右の膝を地に著け啓請して言して曰く、妙高山に居する天の諸の部多の歡喜園、及び餘の天宮に居し、日月宮に居し、或は河海の所に居し、或は陂澤泉水に居し、或は村落及び諸の神廟に居し或は空室に居し、或は天室に居し、或は伽藍制底に住し、或は外道の草庵に居し、或は象室に居し、或は庫藏に居し、或は街巷に住し、或は四衢道の邊に居し、或は獨樹に依り、或は大路に在り、或は塚間に住し、或は屍陀林に居し、或は大樹林に寄り、或は師子大蟲遊戲の處に居し、或は大砂

(一) 羯吒奇と云ふ、布單那は此れに臭鬼と云ふ。
(二) 部多　化生の鬼なり。

磧の中に住し、或は諸洲の上妙の處所に居するを皆諮て啓請す。諸の眷屬と與に降臨して、此れに來り、我が營み辨ずる所の華鬘と塗香と燒香と飮食と及び燈明と、願くは(二)歆饗を垂れて、後に應さに別日に護方の諸神を供養すべし。前の如く供を辨じて、我が求むる所の事にをいて、其果を滿足せしめよと、以て諸の鬼神を供養し已て、

胡跪合掌して即應さに召請すべし。

謹で東方の憍尸迦天を請す、諸の眷屬と與に道場に來降し、願くは供を受くることを垂れよ。

次に東南方の火天仙等を請す、諸の眷屬と與に道場に來降し、願くは供を受くることを垂れよ。

次に南方の閻摩羅法王等を請す、諸の眷屬と與に道場に來降して、願くは供を受くることを垂れよ。

次に西南方の泥唎底部多大王等を請す、諸の眷屬と與に道場に來降し、願くは供を受くることを垂れよ。

次に西方の嚩嚕拏龍王等を請す、諸の眷屬と與に道場に來降し、願くは供を受くることを垂れよ。

次に西北方の風神王等を請す、諸の眷屬と與に道場に來降して、願くは供を受くることを垂れよ。

次に北方の多聞天王等を請す、諸の眷屬と與に道場に來降して、願くは供を受くることを垂れよ。

次に東北方の伊舍羅天王等を請す、諸の眷屬と與に道場に來降して、願くは供を受くることを垂れよ。

次に上方の梵天王等を請す、諸の眷屬と與に道場に來降して。願くは供を受くることを垂れよ。

次に地居所有(アラユル)の諸大神王等を請す、諸の眷屬と與に道場に來降して、願くは供を受くることを垂れよ。各本方に住して辨する所の供養、願くは納受を垂れよ。復た願くは常時に我に於て衛護せよ。是の如く諸の鬼神等及び護方の神王を供養すれば、行者をして諸の難事なく、意に求願する所皆悉く滿足す。

請問(二)分別諸部分品第十一

(二)此の品下に明す五部の相を辨ずる故に分別諸部分品と云ふなり。

復た次に蘇婆呼童子、世尊未來の一切の衆生を利益せんが爲の故に、三俱胝(テイゴ)五落叉(ラクシャ)の眞言及び明を說き玉ふを名けて持明藏と曰ふ。

又聖觀自在、三俱胝五落叉の眞言を說く。此の部の中に於て、眞言王を何耶吉唎婆と曰ふ（此れに馬頭と云ふ）此の部の曼荼羅を名けて你毗耶二合と曰ふ。

復た七の眞言王あり、十二臂を眞言王とす。

六臂と上髻と滿如意願と四面と不空羂索と二臂と、猶し日光の世間を照耀するが如し。此れ等の七眞言王は、並に是れ馬頭曼荼羅の所管なり。

復た八の明妃あり、謂く(一)目睛と妙白と居白と觀世と獨髻と、金顏と名利稱と慈唎俱胝と、此れ等は皆是れ蓮華部の中の明妃なり。

復た種々の妙曼荼羅、及び諸の手印を說く、我れ貧窮の衆生を利益し、及び諸の鬼類を摧く故に、七俱胝の眞言及び曼荼羅を說く。

復た十の使者七の明妃あり、又六十嬪あり、又八大心眞言あり、又軍荼利等の無量の忿怒あり、又最勝明等の無量の眞言王あり。

是の故に此の部を名けて廣大跋折囉と曰ふ。

(一) 目睛は多羅菩薩、妙白は大妙白身、居白は白衣、觀世は正觀音、獨髻は一髻、金顏は千手、名利稱は耶輸多羅、慈唎俱胝は毘俱胝觀音なり。

復た大神あり、名けて般支迦と曰ふ、二萬の眞言を說く。此の神に妃あり、名けて彌佉羅と曰ふ、一萬の眞言を說く、名けて般支部と曰ふ。

復た大神あり、名けて摩尼跋陀羅と曰ふ、十萬の眞言を說く、多聞天王三萬の眞言を說く、名けて摩尼部とす。

復た諸天及び阿修羅等ありて、世尊の前に於て、無量の明及び諸の眞言を說く、其の中に金剛部の內に入る者あり。

亦蓮華部に入る者あり、亦般支迦部に入る者あり、亦摩尼部に於て入る者あり、亦部の所管に非る者あり。如上所說の眞言は、略して種々の法則を敎ふ。(二)五部の中に於て並に應さに修行すべし。

復た諸天の說く所の眞言にして、世尊の印可し許し給ふものあり、亦應さに修行すべし。是の如くの法則は、若し此の法に乘する者は、即所願成就することを得。

復た次に世尊、內に於て亦、勝上の妙寶あり、此れより復た究竟の法寶を流す、中より復た八大丈夫不退衆寶を生ず。是の如くの三寶は世の稱する所なり、是の故に念誦の人、若し罪を滅し、福を生せんと欲ひ、速に現前に願を滿てんことを希ふ者は、先

(二) 五部とは蓮華部と金剛部と般支部と摩尼部と非部所管との五なり。

づ三寶に歸命し奉るべし。

又若し金剛部内の眞言を持誦せんと欲する者は、初に三寶に歸し已て、次に(二)那謨施旃荼跋折囉波拏曳、摩訶藥叉栖那波多曳を稱し、次に後に即ち眞言を誦すべし。蓮華部の内も亦然かなり、般支迦部も亦上の法の如し。初に三寶に歸し、次に部主に歸し、然る後に乃し眞言を念誦すべし。若し釋教に歸依せずして、復た聲聞乘緣覺乘を行ずる者は、信具足せず。内に腐朽を懷いて、外に精進を示し、復た慳悋を懷く者なり、我が此の跋折囉を執るべからず。

若し蕊翳と蕊翳尼と及び優婆塞迦とにありて、深妙の大乘を毀呰して、此の所說は皆是れ魔說なりと言ひ、復た愚痴を懷て言をなさん、執金剛菩薩は是れ大藥叉なりと。復た諸の大菩薩を敬禮せず心に輕慢を生じ、利の爲の故に詐て解して是の如くの妙眞言を持誦する者、是の如く等の愚人は久しからずして、當さに自ら軀命を損害すべし、亦前に說くが如し。佛菩薩は終に人を害し玉はず、然れども部内に於て諸の毒猛の鬼神ありて、彼の痴人の謬て金剛杵を持する者を見て、便瞋怒を生じ即彼の命を害す。

(二) 那謨○波多曳金剛部に惣通する敬命の句なり。

摩醯首羅天十俱胝の眞言を說き　那羅延天王三萬の眞言を說き
大梵天王六萬の眞言を說き　日天子三十萬の眞言を說き
伽路荼王八萬一千八眞言を說き　摩登伽天王復た三千の眞言を說き
火神王七百の眞言を說き　摩醯首羅大妃八千の眞言を說き
諸の龍王妃五千の眞言を說き　羅刹大將一萬の眞言を說き
四天大王四十萬の眞言を說き　阿修羅王二十萬の眞言を說き
忉利天王三十萬の眞言を說き
各各に俱に眞言手印、及び曼荼羅を說く、法に依て受持せよ。若し此の數を爲さば、眞に非れば成せず亦當さに自ら害すべし。

請問(二)分別八法分品第十二

復た次に、蘇婆呼童子、念誦の人、所有の成就の法に總じて八種あり、何等をか八とす。謂く成眞言法と、成金水法と、成長年法と、出伏藏法と、入修羅宮法と、合成金法と、土成金法と、成無價寶法となり、是れを八法と名く。中に於て三あり、成眞言法と、入修羅宮法と、得長年法の是の三種の法を、是れを上上悉地法と名く。或は無價寶法

(二) 此の品に延命長壽等の八法を辨說する故に分別八法分と云ふなり。

と、土成金法と、出伏藏法と。

此の三種の法を、是れを名けて中とす。合成金法と、成金水法と、此の二法を是れを下法と名く。若し衆生に有て、眞に戒慧有て此の法を樂はゞ、是の如きの人は上上の成就を樂ふべし。若し衆生の多貪財欲の者あらば、是の如きの人は、中成就を樂ふべし。若し衆生有て愚痴多きが故に、價を反へして利を求むる者は、是の如きの人は下成就を得。上上の人は、唯し應さに上驗を求むべし、中下の證を求むること勿れ。若し窮貧に遭ふ者は、應さに中品を求むべし、亦上驗を求むること勿れ、亦下證を求むること莫れ。下下の人は前に依て之を求めて、亦改易すること勿れ。

若し如上所說の種々の成就を獲得せんと欲はゞ、應さに須く福を修すべし。福を具するの人は、前の八種の樂を求むるに、延命長壽と、威力自在と、端正と聰慧と、皆成就することを得ん。若し人家業を戀ふて、善法を修し、三寶を敬ひ念じて、常に離れず、心に眞言を憶して、念誦に間あらずんば、是の如きの人は速に成就を得、衆生を救はんと念すれば、復た能く己身の罪を滅す、並に能く今世及び後世の樂を獲、眞言の外に更に異の法の能く衆生に樂を與ふる者なし。譬へば天火の下降し、及與び霜雹能く衆

物を損すれども、避脫すべきこと無きが如し。眞言の威力衆生の、心田に降下して、能く苦惱及び諸の罪障を除き、碎壞して餘なく、善功德の芽日日に滋茂し、如意寶樹は能く有情の種々の意願を益するが如く、眞言の妙藏も亦復た是の如し。或は菩薩の位地乃至佛果を成就することを與へ。或は明仙の位地を成就することを與へ。或は富樂色力長年を與ふ。諸の菩薩有て諸の有情を觀ずるに、諸の苦難及び餘の怖畏王難と、惡賊と火と雹と等の苦に遭へば、即自ら身を變じて、眞言主の形と爲て、衆生を救濟し、苦難を脫せしめ、安くして怖れなく、快樂情に恣にして、報の壽命を盡せしむ。若し復た人ありて、居家に處し、諸の欲樂を受くと雖、佛の說き玉ふ眞言を、心を發して持せんと欲し、設ひ少法を得れども、行するに似て行せず、念誦に多く違犯あらん。其の事法を作すに多くは備具ならず。彼の人毎日喜ばずして、念誦の遍數足ると足らざると、中間に即停めて、心に餘部の眞言を貪すれば法則ち驗なし、却て瞢業に就き而も心を尅期す、心に休廢せずして、數當さに漸く滿すべし。忽に少驗を覺て、心に歡喜を生じ、歡喜し已て即發露し、以て諸の過を首すれば、其罪即滅し、五欲の障を離れて、還て戒體を具して、清淨の身となる。還て靜室に入り、更に眞言を誦して十

萬遍を滿し已て、即須く成就を求むる法を作すべし。久しからずして即ち意に樂ふ所の如く、眞言の悉地を得ん、後に作す所の一切の諸の餘の眞言法則に於て皆成就を得ん。

復た次に、蘇婆呼童子、若し念誦の人、正く澡浴する時は、淨き土を用て水に和して、遍く其身に塗り、然る後に清淨の大水に於て入て、意に隨て洗ひ已て、或は面を東に向へ、面を北にして、手と足とを洗ひ已て、其兩手を以て膝の內に於て置き、水を以て遍く身に於て灑ぎ、水を吸へば聲あらしむること勿れ、即右の手を用て水を掬する法を作し、其手の掌に於て沫あらしむること勿れ。水を呪すること三遍、水を吸ふこと三遍、聲あらしむること勿れ。手の母指を以て、兩邊より口を拭ひ、及以び身を灑で即護身を作すべし。護身を作し說て、然る後に齒の間の垢穢舌中に觸することを覺へば、或は復た欬嗽涕唾し更に須く上の如く水を呪して口に吸ふべし、乃至口を拭ひ澡浴し畢り已て、即淨室に往け、中間に餘の外人、或は男或は女、出家と在家と淨行の婆羅門と童男と童女と、及び黃門等と與に語らひ、及與び相ひ觸るゝことあらば、一ばら如前に依て澡浴し、及び水を飲み口を拭ひ、然る後に人と共に語ること莫れ。即ち淨室に入て念誦するに、設使ひ急事ありとも、停休するを得ざれ要す須く數を滿すべし。然る後に精舍に於て出てよ、亦他の利養を受くること勿れ。乞食し已ては作業せよ、日夜に闕せざれ。是の如きの人、妙眞言神唐然として身に入る。若し成就を求むる者は、念誦の時、施主有て衣裳と金銀と珍寶と安乘と嚴具と塗香と燒香と飮食と臥具とを惠み施すとも、如上等の物乃至分毫も納受すべからず。復次に、蘇婆呼童子、念誦の人、大小便利し畢り已て、應さに五聚の土を用ゆべし。三聚を以て前を洗ひ、其一聚を以て獨り左右の手を洗ひ、即惡處を出でゝ、淨處に於て、就て土を分て十聚にし、先づ三聚を用て、獨り左の手を洗ひ、復七聚を用て其兩手を洗ひ已て、後更に三聚を取て二手の內外通じて、淨く洗て淨からしむ。然る後已て重て土水を用て、清淨に之れを洗ふべし。譬へば春の時に風樹木を揩て、自然に火出で、以て功力を省て遍く草木を燒くが如く、念誦の火を以てし、淨戒の風を用ひ、勤て相ひ揩るを以て、盡く罪草を燒くことも亦復是の如し。復た寒霜の日曜けば、即消るが如く、戒日を用るを以て、念誦の光曜罪霜を消することも亦復是の如し。譬へば室內に久きより來た闇あり、若し灯を將て入れば、即便

暗滅するが如く、念誦の灯を以て罪障の闇を照せば、悉く消滅することを得。眞言を念誦し乃至呼摩すれば、便成就を獲。若し此の法成就せざれば、應さに江河潭上に近て淨妙の砂を取り、十萬の窣堵波を印成し、河の邊りに安置して、香泥を以て塔に塗るべし。是の如くして一一塔の前にして、各本眞言を誦し、誠を至して懺悔し、滅罪の法を作すべし。無始より已來た造る所の罪障、悉く皆消滅して、此の世に當さに現の報を成就することを獲べし。

念誦の人は持戒を本と爲し、精進忍辱にして、諸佛の所とに於て深心に恭敬し、菩提心を發して退轉せしむること勿れ、恒に須く念誦すべく懈怠あること莫れ。譬へば國王の七種の法を具して、能く人民を治し、及び自も安樂なるが如し。持誦の人此の七法を具すれば、即ち諸罪を滅して、乃し成就を獲。初には應さに念誦すべし。如法にして闕錯あること勿れ、以て次に呼摩せよ、呼摩を以ての故に、本尊歡喜して即便ち如意の樂果を施與し玉ふ。

復た次に蘇婆呼童子、念誦の人若し喜人を攝する法を成就せんと欲ひ、乃至百由旬の外を取らんと欲はゞ、皆是れ藥叉の婦の力なり、欲を受けんが爲めの故に、此の法を成

することを求む。藥叉女とは、假令ひ悉地するものは、還て藥叉の婦と與にす。譬へば女色を街賣する者、財を規るが爲の故に、男子の欲に共するが如し。其藥叉婦も亦復是の如し。復共に居ること一劫すと雖、終に善意なし。又の其過を伺ひ、損害し食噉す、愚痴の人餘色を貪するを以ての故に、此の法を行せんと欲ふ、成し已て直斯の邪行の咎を犯すのみにあらず、亦乃し自ら當さに損することあるべし。諸の念誦の人は法を廢すべからず、他業の相當するものあらば、任に此の法を行す。佛法の中に於て心趣向すること有らん者、此の軌を行すること勿れ、利益の事にあらず、是れ愚人の法なり。初學の人の爲に示現して之れを說く、是れ正道に非す。

復た次に、蘇婆呼童子、諸の菩薩と金剛と、及び天と龍と藥叉と修羅と等あり。佛の前及び緣覺と聲聞衆との中に於て對して、各自ら眞言を說く。世尊我が爲に證明し玉へ、如來は諸の有情を利益せんが爲の故に、皆悉く證し許し、後慈を以て加被し玉ふ。我れ今眞言を說くに皆三品あり。

上品を成する者は、謂く空に昇て而も去り、修羅窟に入り、自在に形を變じて藥叉女の夫主者と作り、長年にして幻化の法を成し、自ら己身を變じて密跡等となる。

中品を成する者は錢財乃至自在富貴を獲得して、意を擧くれば心に從ふ。
下品の者は、人をして相ひ憎ましめ、及び能く攝し來り去らしめ、乃至枯らしむ。下
中下の者は、鬼魅龍鬼嬰兒を療せんが爲に、人をして昏沉して睡り多からしめ、兩手
或は展べ舒べ、或は攫み拳り縛り抱かしめ、及び耳語し、及び阿引吠設那せしめ、鞭
打して去らしめ、乃し損害するに至り、及び衆人をして共に眞言を誦せしめ、或は衆
人をして脚を以て地を踏ましめ、鬼魅を著かしめ、悶絶躃地して四衢道の頭りに於て
置き、白氈を以て來る者を蓋ふて看せしめ、復一人をして脚より徐く。白氈を挽き起
るに隨て氈盡き、本心に還復し、及び鼠毒を療し、人を攝め閉て諸の龍を呼び召き、
衆多の人を縛して動くことを得ざらしめ、毒を破れるを療治し、及び能く毒を移し、
毒を以て人を毒なひ、毒をもて人の眼を成し、亦復却て之れを破る、人を治し禁して
引發せざらしめ、毒蛆を遣て人を傷らしめず、人を作し及び使者を成し、人龍を示現
して、以て音樂を爲し、著魅の者をして差へしむ。是の如く等の類は皆是れ外法なり、
依り行ふべからず。
復た毒蛆の類あり、合して八十あり、其中に二十あり、頭を擧げて而も行く中に於て、

六種は住する時は即身を盤まる。
復た十二種あり、人を螫すと雖毒なし、
數の內に復た十三の蛆あり、蛆中の毒なり、外の蛆に於て餘は人を螫すと雖、時ありて
毒を破り、時ありて毒なし。復蝦蟇と辟宮と(二)蝪蜥と蜘蛛と等の類、及び雜毒の蛆蟲
あり。此の如く分別するに、其數多しと雖、然れども所行猛烈なる毒は、數六種に過
きず。
二には溺て人の身に著て便即ち毒あり　一には其蟲の屎穢人に溺すれば便ち毒あり。
若し人の身に觸れば即便ち毒あり　三には觸毒蟲行く時、人に見せしめず、
四には涎唾、人に着けば即便ち毒あり
即ち毒あり
六には醫毒、其蟲人を著ば便即ち毒あり　五には眼毒、其蟲眼を以て人を視れば便
其眞言を持する者は彼の毒を畏れず。是の如くの諸蟲の上中下品を分別するに、合し
て數種の毒を成す。是の故に餘の天神、是の如くの諸蟲を說く。或は毒惛醉するを以て、
而も猛毒を放ち、或は大に瞋るを以て、而も猛毒を放ち、或は死する時至て、而も猛

(二) 蝪蜥　ヤタシャク　イモリと訓す。

(二)齧(クツ)カム又クラフと訓す。

毒を放つ。其齧(クツ)毒に復四種あり。一には傷、二には血塗、三には極損、四には命終なり。其(二)齧毒とは云何んが知る耶。齧(か)まるるに一齒の痕あり、其毒微なれども、是れを名けて傷とす。血塗の毒其狀云何、二齒の痕ありて血あらしむることを致す、名けて血塗と曰ふ。

極損の毒に三齒の痕あり、肉を傷らしむるを名けて極損と曰ふ。命終の毒其狀云何、齧まるる處に四齒の痕あり、便其身を纏ふ、是れを命終と名づく。此れ之の一毒縱使ひ外道の眞言妙藥も、能く治差することなし。譬へば猛火の身を燒き、或は刀を以て割くが如く、毒を破るの苦も亦復是の如し。眞言を持する者は、其毒即滅す。譬へば大火の興盛なれども、若し雨を以て灑げば、其火便滅するが如く、眞言の毒を攝むることも亦復是の如し。智者妙に種種の類を解し、即以て大威の眞言を持誦すれば、諸毒と共に戲ふるれども、一も怖れ畏るることなし、恐懼するの心あることなきが如し。

復た次に、藪婆呼童子、世間の人等は常に種種の鬼魅病苦あり、或は天魅、或は龍魅、或は阿修羅魅、或は乾闥婆魅、或は伽魯荼魅、或は緊那羅魅、或は摩呼羅伽魅、或は藥叉魅、或は羅叉莎魅、或は持明所魅、或は餓鬼魅、或は毗舍遮魅、或は宮盤荼魅あり。

上の如き種種の諸の鬼魅等、祭祀せられんことを求むるが故に。或は戲弄するが故に、或は殺害するが故に、或は世間に遊行して、多く利を求むるが故に、或は人の過失を伺ひ求むるが故に、或は常に瞋怒するが故に、或は常に血肉を噉ふが故に、或は衆生を繫捉するが故に、或は衆生を繫して、他心をして亂れしむるが故に、或は煩惱熾盛なるが故に、或は飢餓の故に、或は喜び或は悲むが故に、或は愁惱を懷くが故に、或る時は亂語するが故に、上の如きの種々の異相は、人をして惶しく笑ひ病しむる等なり。應さに金剛鉤を以てし、或は(二)甘露瓶忿怒金剛等の眞言を以てすべし、作法療治すれば、上の如きの病患の徒、即除差することを得。又火神の眞言、風神の眞言、摩醯首羅の眞言、大梵天王の眞言、忉利天王の眞言、那羅延天王の眞言、四天王の眞言、日月天王の眞言、藥叉王の眞言、金翅鳥王の眞言、彼れ等の鬼魅上の如きの餘の外の天神の眞言を懼れざる者、若し金剛鉤の名號を聞かば、自然に退散すべし、何に況や作法し眞言を持して、而も療治す

(二)甘露瓶 軍荼利明王なり。

るに愈へざる者あらんや。智者彼の鬼魅の性行、及び療治の法を知て、然る後に畏ることなし。諸佛菩薩の說き玉ふ所の眞言は、如來の加被力を以ての故に、餘の外かの天神の眞言は、上の如きの眞言の者を破壞すること能はず。

又罪を滅せんと欲ふ者は、空閑靜に於て、應さに香泥を以てし、或は江河に近き處を以てして、砂を以て制底を造り、中に緣起法身の偈を安すべし。梵天と藥叉と持明大仙と迦樓羅と乾闥婆の類と、部多等の類と、此の法を聞き已て、恭敬頂禮し、一時に合掌して而も是の言を作さん、希有なり尊者、衆生を愍念し玉ふ。希有なり是の如くの微妙の悲行と、或は尊者を見るに、手に赫燿たる大跋折羅を執り、或は堅固の鐵杵を執り、或は手に不空羂索を執るを見、或は手に三股の大叉を執れる見、或は手に弓箭を執るを見、或は手に棒を執るを見、或は其器仗殊異にして、人をして怖れ畏れしむるを見、或は相好端嚴にして、人をして樂ふべからしむるを見、或は尊者の藥叉將と爲るを見る。我れ等大慈悲修行者を歸命す、我れ等の諸天●修羅●人●非人等●恒に常に護念し、深心に恭敬し、敎に依て修行して、敢て忘失せず。若し世間閻浮提の內、及び四天下に四衆の比丘と比丘尼と

優婆塞と優婆夷と童男と童女と有て、此の法を聞くことを得ば、苦難を離ることを得。若し能く法の如く敎に依て一切の眞言を修行すれば、此の敎と相應して、報めて悉地を得ること疑ひあることなし。一切の眞言を護衞するが故に、一切の惡魔、毗那夜迦、藥叉等の類其便を得ず、何に況や敎に依て修行して而も果を獲ざらんや。若し貧窮の衆生有て、此の法敎に依て、明眞言を持せば、現世に貧窮の苦惱を遠離し、富貴自在にして人に欽敬せられ、一切の鬼神冥に護衞を加へん。若し進て勝上の出世の解脫を求めんと欲はゞ、前件に已に列す、意の樂ふ所に任す、敎に依て修行すべし。勤精して退かざれば、久しからずして持明悉地を獲得し、世間に威耀すること、日の出現して障礙あることなきが如くならん。心に亂動なく日夜に懈らざれば、我等眷屬常に左右を離れずして、其力を助益し畢り、成功することを獲ん。不至心を除く時に執金剛主告て言く、汝等天龍八部、能く我が語に隨ひ、眞言及び大乘藏幷に一切衆生を衞護して、修道の者を助成すべし、我れ亦往昔に天身龍身と作て、幷に一切大力の身を受けて、彼の身の中に於て威力を以ての故に常に佛法を護り、僧寶及大乘藏眞言密典に於てし、幷に衆生を愍れみ、修道

の人の力を佐助して、惡人をして其便りを得せしめざるが故に、國王大臣に瞋怒を生せしめざるが故に、凡より金剛に至るより已來た、此の願曾て退廢せずして、今是の如くの執金剛忿怒自在の身を獲たり。我れ若し左に顧み右に眄りみ、十方を觀察し、兩目をもて視瞬すれば、一切世界地六たび震動し、上有頂に至り下も水際に至る中に於て魔宮あり、眷屬光明色を失ふこと、猶し聚墨の坷貝の邊に在るが如し。所有の宮殿碎壞して、猶し微塵の如く修羅の種類、四もに散して逃げ避り、自然に殄滅し、魔家の眷屬迷悶し避地す。或は身體猶し火の燒くが如くなるあり、或は身乾枯する者あり、或は屎尿の中に臥す者あり、或は山に身を壓さるる者あり、或は氷山の中に臥す者あり、或は鐵圍山の中に臥す者あり、須彌の峰に臥して、倒れ墜れて墜んと欲して、恐怖を生ずる者あり、或は大河波の中に臥して恐怖を生ずる者あり、或は海底に臥して日月の光を見ざる者あり、或は空中に臥して日の炙る所を被て、苦惱を受くる者あり、或は飢寒の者あり、或は貧窮を受くる者あり、或は地獄の苦を受る者あり、或は餓鬼の身を受くる者あり、或は畜生の身を受くる者あり、或は飛鳥の身を受くる者あり、或は毒蛇の身を受くる者あり、或は本身の形生を失する者あり、或は身より火を

出だして、自ら燒て而も苦を受くる者あり、或は兩目より火を出だして、自ら面を燒く者あり、或は男身の上に女根を生じて、不淨の臭穢を出だす者あり、或は女身の上に男根を生じて羞ぢ恥ぢざる者あり、或は屎尿口より出づる者あり、或は猛獸に食噉せらるる者あり、或は蚰に螫されて苦痛を受くる者あり、或は食飯するに、口中に火を出だして舌を燒き齒を燋す者あり、或は手脚墮落する者あり、或は身體洪いに爛る者あり、或は病に臥す者あり、或は氣斷せんと欲する者あり、或は死する者あり、或は矛稍の苦を受くる者あり、或は火輪の苦を受くる者あり、或は劍戟の苦を受くる者あり、或は白象に踏まるる者あり、或は水牛に觝殺せらるる者あり、或は人に殺さるる者あり、汝等天人雜類應さに知るべし、此れ等の天魔、常に修道の人を障ふるが故に、我れ今少く右を顧み左を視る。三昧神通を現ずれば其の魔の眷屬即ち斯の如くの苦惱を受く、何に況んや、火三昧に入り奮迅神通を現じて、往しより今に至る迄、常に此の修道持眞言の人を護り、及び佛法幷に一切衆生を護るが故に。此の如くの力を得て、魔をして怕懼して正く我が面を視ることを得ず。況んや世間の惡人能く怕れざる者あらんや。若し比丘或は在家の菩薩ありて、能く丈夫の心を發して、佛法僧寶を

恭敬し、及び大乘典秘密藏、幷に眞言を修持する者を護り、能く國王大臣及び一切の惡人等の毀訾し、惡言する者を制して、便りを得せしむること勿れ。此れ等は福を獲、神通威力を得て、共に我れと異ることなけん。一切の魔王怖れ懼れて、其苦惱を生せんこと、前の件と別なることなし。當さに果報を得て、我が住處に至るべし。汝等天龍・八部・人・非人等・今我が前に於て大誓の莊嚴を發して、衆生の心を護り、幷に法藏を護て其力を佐助す。汝ぢ善心深厚なるを以ての故に、善い哉善い哉甚善し、汝亦久しからずして、當さに執金剛の身を獲べし。奮迅自在無礙を得て、魔怨を降さんこと、我が若く同等ならん、(一)時に執金剛主蘇婆呼童子に告ぐ、汝當さに世に於て流行すべし、忘失せしむること勿れ。時に蘇婆呼童子言く、尊の敎へ玉ふ所の如く、展轉流行して敢て忘失せずと。時に會する大衆皆悉く起立す、蘇婆呼童子、人天八部大梵天王幷に及び四衆圍遶すること數帀して、頂禮し恭敬して、頭面を地に著けて、各誓願を發さく、願くは我れ及び一切衆生、此の法を聞くことを得て、敎に依て修行して、速かに是の如くの大威神の身力を獲ん。重て執金剛主の足を頂禮し已て、各本座に乘じて辭退し、宮に還て忽然として現せざりき。

(一)時に執金剛以下流通分なり。

國譯蘇婆呼童子經卷下 終

音釋

篥 觱畢吉の切、篥刀質の切、觱篥は葭管なり。欬嗽 欬苦蓋の切、嗽初奏の切、欬嗽は上氣なり。揩 苦皆の切、摩なり。攫 居縛の切、持なり。螫施隻の切、蟲行毒なり。蜴 蜥蜴羊益の切、蜥先的の切、蜥蜴は守宮なり。眄彌兗の切、視なり。矟 所角の切、矛屬なり。觝 都禮の切、觸なり。

于時大正九年三月廿一日國譯了願此功德平等利益

國譯者 權田雷斧 時年七十五

國譯佛說大吉祥天女十二契一百八名無垢大乘經

唐三藏沙門大廣智不空　譯す

是の如く我れ聞く、一時薄伽梵、大菩薩衆と(一)安樂世界に住す。所謂る觀自在菩薩●得大勢菩薩●除一切除蓋障菩薩●地藏菩薩●普光菩薩●虛空藏菩薩●金剛手菩薩●除一切怖畏菩薩●持一切清淨吉祥菩薩●持一切福相菩薩●持日月三世菩薩●文殊師利菩薩●是の如く等の菩薩摩訶薩を上首と爲す。その時に觀自在菩薩摩訶薩、世尊の所に往詣して、頭面に足を禮して退いて一面に坐す。無量百千帀圍繞して及び一切安樂世界所住の菩薩を禮して、退いて一面に坐す。その時に世尊、吉祥天女の無量百千の福相をもつて莊嚴し、(二)俱底の如來圍繞し、一切の(三)釋梵(四)護世は、讃揚、稱歎したまふを見たまひて、大梵音を以て觀自在菩薩摩訶薩に告げて言はく、觀自在菩薩、若し國王●王子●比丘●比丘尼●優婆塞●優

(一) 安樂世界　極樂國の異名、阿彌陀佛の淨土のこと。

(二) 俱底　梵語にして數の名、千萬或は百億を云ふ。

(三) 釋梵　釋は帝釋天、梵は梵天を云ふ。

(四) 護世　護世四天王にして、常に須彌界に屬する四洲を守護する故にタづく。

婆夷●婆羅門●刹利●(一)毘舍●(二)首陀ありて、若し吉祥天女の十二契一百八名の無垢讃歎を受持せば、其王刹利の國界にあらゆる衆生の怖畏、逼惱並びに皆一切の怨賊、人、非人の怖を息除して害を爲さず、また一切の財穀皆豐饒にして、吉祥天女、彼の王刹利の宅の中に於て常に、居止する所あらん。時に彼の菩薩摩訶薩、是の如くの言を說く、善いかな、善いかな、世尊妙へに此の語を說きたまふ。若し吉祥天女の名號を持する者あらば、是の如くの福利を獲んと。時に無畏觀自在菩薩摩訶薩即ち佛にまふして言さく、世尊、吉祥天女は曾つて何れの處に於て善根を種植せるや、佛のいはく、彼れ(三)恒河沙の(四)如來應供正徧知の處に於て善根を種植せるや。無畏觀自在菩薩、我れ過去世を念ふに寶生世界に於て寶華●功德海●吠瑠璃●金山●金光明●吉祥●如來應供●正徧知●世に出興したまひき。大吉祥天女彼處に於て善根を種植し、及び餘の多くの如來の處にて是の如くの如來の名號を稱へしに由りて、此大吉祥天女善根を成就せり。此の諸の如來常に大吉祥天女に隨逐して善根を成就せしむ。此の諸の如來常に大吉祥天女に隨逐して能く一切の罪を脫し、一切の煩惱を除滅し、一切の身を無垢ならしめ、一切の財穀を召集し增益し、能く貧窮を除き、能く一切の天●龍●藥叉●羅刹●乾闥婆●阿修羅●迦樓羅●緊那羅●摩呼羅伽を攝召し、能く一切の逼惱●諍訟●鬪戰を息め、能く(五)六波羅蜜を成辨す。謂ゆる

曩謨吉祥密如來
曩謨寶華功德海吠瑠璃金山金光明吉祥如來
曩謨恒河一切津口吉慶吉祥如來
曩謨栴檀華威德星光吉祥如來
曩謨普徧照曜勝鬪戰吉祥如來
曩謨法神通幢進吉祥如來
曩謨曜寂靜香照曜吉祥如來
曩謨衆生意樂寂靜身吉祥如來
曩謨願海光吉祥如來
曩謨妙徧稱讃名號吉祥如來
曩謨不退轉寶處吉祥如來
曩謨日輪照曜踊起吉祥如來

(一)毘舍　印度四姓の第三位に屬し商業とす。
(二)首陀　印度四姓の最下族なり。賤業に從事す。
(三)恒河沙　恒河の沙の意にて無數無量の大數を現はす語。
(四)如來、應供、正徧知。何れも佛十號の一にして、佛のこと。
(五)六波羅蜜　六度とも云ふ。波羅蜜は梵語にして度又は到彼岸と譯し、菩薩の修する行にして、檀那、尸羅、羼提、毘梨耶、禪那、般若の六波羅蜜なり。

曩謨無數精進(セウジン)妙住吉祥如來
曩謨無量善住吉祥如來
曩謨音聲支分吉祥如來
曩謨般若(ハンニヤ)燈無數光幢吉祥如來
曩謨那羅延禁戒(ナラエンキンカイ)甲冑(カッチウ)吉祥如來
曩謨梵(ボン)吉祥如來
曩謨摩醯羅(マケイラ)吉祥如來
曩謨日月吉祥如來
曩謨甚深法光王吉祥如來
曩謨虛空燈(コクウトウ)現喜吉祥如來
曩謨日光幢吉祥如來
曩謨香燈吉祥如來
曩謨海藏生吉祥如來
曩謨變化雲(ヘングウンゾウ)妙聲吉祥如來

曩謨一切照曜莊嚴吉祥如來
曩謨樹王增長吉祥如來
曩謨寶焰(ハウエン)山王吉祥如來
曩謨智焰海吉祥如來
曩謨大願精進吉祥如來
曩謨大雲吉祥如來
曩謨金幢(コンドウ)王吉祥如來
曩謨帝幢旛王吉祥如來
曩謨鉤召一切財穀吉祥如來
曩謨鉤召寂靜吉祥如來
曩謨鉤召吉慶吉祥如來

是の如くの如來名號を若し恭敬し受持し讃誦するものあらば、彼の善男子、善女人甚多の福聚を發生するを得ん。一切如來、大吉祥天女に授記して、汝當さに吉祥寶莊嚴世界に於て等正覺を成じ、吉祥摩尼(マニ)寶生如來應供正徧知と號すべしと。其世界は種種

天寶を以て莊嚴と爲す。彼の世界に於て唯此の如來のみ光明を作る。彼の菩薩衆、彼の世界の中に於て、自然光明壽命無量にして、空より佛法僧の音聲を演出し、所有の菩薩彼の佛世界に於て生する者は、一切皆蓮華臺より化生せん。云何んが、十二契、一百八名無垢讃歎なるか、無畏觀自在、汝今諦かに聽け、謂ゆる、

一切如來所灌頂一　一切如來母二　一切天母三　一切如來吉祥四　一切菩薩吉祥五　一切賢聖聲聞緣覺吉祥六　梵毗紐摩醯首羅吉祥七　一切天上首吉祥八　一切處到吉祥九　一切天龍●夜叉●羅刹●乾闥婆●阿修羅●迦樓羅●緊那羅●摩睺羅伽●吉祥十　一切金剛手持金剛吉祥十一　四王五護世吉祥十二　八曜●二十八宿吉祥十三　唵娑尼怛哩十四　馱怛哩麼多十五　四明吉祥十六　吉祥鬼母十七　勝十八　最勝十九　恒河二十　一切津二十一　一切吉慶二十二　無垢吉祥二十三　一切除罪二十四　無逸二十五　月吉祥二十六　日吉祥二十七　一切曜吉祥二十八　乘師子二十九　百千俱胝頻婆羅蓮華莊嚴三十　蓮華三十一　大蓮華三十二　蓮華座三十三　蓮華藏三十四　持蓮華三十五　具蓮華三十六　無量寶光明三十七　施財三十八　白三十九　大白四十　白臂四十一　持一切吉慶四十二　莊嚴一切福身四十三　調柔者四十四　百千臂四十五　百千眼四十六　百千頭四十七　持種々間錯摩尼冠四十八　妙色四十九　種種色五十　名稱五十一　極名稱五十二　寂靜五十三　貳母多五十四　清淨髮五十五　月光五十六　日光五十七　作端嚴五十八　一切有情對面吉祥五十九　聖者六十　依華六十一　花自在六十二　一切須彌山王吉祥六十三　一切江河吉祥六十四　一切海水吉祥六十五　一切津口吉祥六十六　一切藥草樹穀財吉祥六十七　施全六十八　施飲食六十九　色清淨身七十　色者七十一　一切如來自在者七十二　一切天衆對面吉祥七十三　焰摩水天俱尾羅嚩娑嚩、上首吉祥七十四　與者七十五　食者七十六　威光七十七　具威光七十八　豐饒七十九　榮盛八十　增長八十一　高遷八十二　法吉祥八十三　依眷八十四　俱尼陀藏八十五　慈悲者八十六　依丈夫身八十七　一切清淨吉慶手八十八　除一切不吉祥者八十九　鉤召一切福吉祥九十　一切地王吉祥九十一　一切持明吉祥九十二　一切鬼●夜叉●羅刹●餓鬼●毗舍遮●鳩槃荼摩睺羅伽吉祥九十三　一切天宮諸天吉祥九十四　一切念誦護摩吉祥九十五　曜極喜九十六　福德遊戲九十七　一切僊清淨吉祥九十八　一切吉祥九十九　一切宮殿尊勝吉祥一百　一切緊那羅吉稟一百一　一切日勝吉祥一百二　無罪處流者一百三　意樂一百四　適悅者一百五　俱尾羅一百六　愛者一百七　法王吉祚一百八

如上一百八名眞言に曰く、

唵怛儞也陀尾路迦野跢囉野謨者野薩嚩耨契毗樂薩嚩補尼野糂娑囉曩麼目契矩嚕娑嚩訶唵凝誐薩嚩底陀目企娑嚩訶唵娑尾底哩娑嚩訶薩嚩瞢誐攞馱哩抳娑嚩訶者咄吠娜薩嚩諾

乞叉怛囉蘖囉訶誐拏地蘖帶曳娑嚩訶沒囉紇縻野娑嚩訶尾
濕嚩目佉野娑嚩訶唵儗里寧儗里寧薩嚩迦哩也僧婆駄寧私寧私寧寧寧寧阿擺乞史弭茗
曩捨野阿嚩訶泥尾室利吠室囉縻拏野娑嚩訶蘇羯拏駄曩駄寧夜羯灑抳娑嚩訶薩嚩補尼夜
羯灑抳娑嚩訶室利泥嚩跢羯灑抳薩嚩訶薩嚩播跛曩捨寧薩嚩訶薩嚩擺乞史弭鉢囉捨縻寧
娑嚩訶薩嚩怛佗誐跢毗色跢曳薩嚩訶薩嚩泥嚩跢鉢羅目佉室
利曳娑嚩訶阿欲縻擺羯拏迦囉曳娑嚩訶薩嚩訶跛尾怛囉誓誐囉訶娑跢曳娑嚩訶僧賀嚩嗢奈
曳娑嚩訶跛納縻三步跢曳娑嚩訶薩嚩訖哩丁也迦屈娜尾曩施奈曳娑嚩訶

無畏觀自在菩薩、此の大吉祥の眞言及び一百八名號を以て、能く一切煩惱を除き、能く一切の罪を摧き、能く一切の福を鉤召し、能く一切の不祥を除き、能く一切の福德を鉤召す。若し人ありて諸の如來の名號を受持し讀誦するものは、彼れ當さに早起きして香を燒き及び華を供養して、吉祥天女の爲めに檀香を燒き此經を讀むべし。其人久しうせずして、一切の吉祥、一切の安樂喜悅を獲得すべし。一切の天擁護し、一切の事業悉く皆成就すべし。佛此經を說き已はりて觀自在菩薩摩訶薩及び大吉祥天女一切の大衆、佛の所說を聞き皆大に歡喜して信受し、奉行したりき。

天阿蘇羅藥叉等　法を來聽せんものは心を至して
佛法を擁護し長存せしめ　各各世尊の敎を勤行すべし
諸有の聽徒此に來至せるものは　或は地上に在り、或は空に居し
常に人世に慈心を起し　晝夜自身法に依りて住し
願くは諸の世界常に安穩にして　無邊の福智羣生を益せん
所有の罪障竝びに消除して　衆苦を遠離して圓寂に歸し
恒に戒香を用ひて體に塗塗し　常に定服を持し以て身を資け
菩提の妙華徧く莊嚴して　所住の處に隨つて安樂ならん

國譯佛說大吉祥天女十二契一百八名無垢大乘經 終

坎三、縮閏十四、藏廿六套十。

(一) 雙身毗那耶迦 雙身とは夫婦の雙身なり、毘那耶迦とは障礙神といふ、常隨魔ともいふ、大聖天とは別名なり、即ち障難を息めんが爲めに此法を行ふ。

(二) 放著 畫像なれば影を鏡に移して浴す。

國譯大聖天歡喜(一)雙身毗那耶迦法

唐ノ北天竺三藏沙門大廣智不空　詔を奉じて譯す

身呪　曩謨尾那翼迦瀉、賀悉底母佉瀉、怛你野合佗、唵娜翼迦娜翼迦、尾娜翼迦尾娜翼迦、怛囉合簸哩怛囉翼迦、餉佉賀悉底、餉佉迦只多扇底迦囉娑嚩賀

心呪　唵、儗哩虐

心中心呪　唵引一虐虐吽娑嚩二合引賀引一

若し此の天法を作さんと欲はば先づ須らく像を畫くべし。或は白鑞●銅●木等及び華ある木を用ゆ。若しは鑄、若しは刻、並びに得。其の像の形は夫婦の二身を相抱きて立たしむ。各々長さ五寸、或は七寸、皆な得、並びに象頭人身に作れ。像を造るに價を還すことを得ず。其像を成し已んなば當さに白月一日を以て、淨き室内に於て淨き牛糞を用て摩(ね)りて圓壇を作るべし、意に隨て大小にせよ。當さに、一升の清麻油を取りて淨き銅器を以て之を盛り、上の呪文を用て、油を呪すること一百八徧して、即ち其の油を煖め、然る後像を將て油の中に(二)放著し壇の内に安置し、淨き銅匙●銅杓等を用

て油を攀んで其の二像の頂身に灌ぐこと一百八徧すべし。一日の中に七徧之を灌げ、平曉には四徧、日午には三徧、共に七徧を成じて、已後毎日更に舊油を呪し以て其の像に灌ぎて是の如き作法を乃ち七日に至れば心、の所願に隨ひて即ち意に稱ふことを得、正しく油を灌ぐの時、數數發願せよ。復た酥蜜を用て麨に和して團(ダン)を作り及び蘿蔔根(ラアコン)並に一盞の酒及び(二)歡喜團(クワンキダン)、時の新なる華果等、是の如く日別に新しき者を取りて供養せよ。一切の善事意に隨ひて成就し、一切の災禍は悉く皆な消滅す。其の獻せる所の食は必ず自食すべし、始めて氣力を得べし。

請召印は二小指、二無名指を以て相鉤して內に向け、即ち二中指を以て竪て相叉へ、又二頭指を以て各各中指に竪て附け、二大指を以て亦た竪てて頭指の側に附け近づけ大指を來去せよ。呪に曰く　唵、篋迦囉主拏(ハシャラシュダ)儞(ダイ)去(ハタヤ)擎(ギャ)囉多野(ハタヤ)　誦すること七徧せよ。

讃歎呪　唵、誡娜(ギャダハチ)篋底(センチッハシッチ)、扇底娑(シッチマ)囉悉底(カキャダハチ)麼賀誡娜篋底娑囉賀

送呪　唵、篋迦囉主拏(ハシャラシュダ)儞(ダイ)囉哆野(パタヤ)娑囉賀　誦すること七徧せよ。

水を呪し身を護する呪　唵、吉里(キリ)吉里、跋折羅、吽發吒

若し作法せんと欲ふ時には、先づ上の呪を以て水を呪すること七徧して、用て口を洗ひ

(二)歡喜團　團子なり、大聖天の持物にして又此を大聖天に供ふ、本と聖天に浴油したる油にて此の團子を揚げて供物となす。

更に水を取りて呪すること七徧して、楊柳枝を以て身上に散灑し即ち護身を爲せ、然して後に持誦の室中に入りて、之の所にて作法せよ。

洗浴呪　唵、阿拏婆折唎(アダバジリ)婆跛(ハレイダ)絲拏訶(カ)　上の呪を以て、水を呪して、當さに用て洗浴すべし。

毗那耶迦を調和する法　一切の天を請するに(一)帝殊囉(タイジラ)施(シ)の印を作せ。二小指無明指を以て掌內に相叉へ、二中指を竪て、指の頭を相ひ捻し、二頭指を以て各各中指の背の第一節の下半分に加へ、大指を來去せよ。呪に曰く、　唵、鑠都嚕(シャトロ)、波囉摩(ハラマダ)獸(ニイ)你曳(ネイ)、娑訶引四　誦すること七徧せよ。但だ是の呪を誦する人は夢中に驚怖し、諸の畜生、惡境界等を見るは、當さに知るべし是れ毗那耶迦王の瞋なりと。夢中に覺り已れば即ち慙愧して乞ふべし。瞋すること莫れ、明日自ら飲食の勞謝することあり。水を以て地を摩(ネ)りて二肘の水圓壇を作れ、槃の大の如くなるも亦た得、即ち蒸餅●五顆●蘿蔔根●三顆の火に燒き熟せるを取れ。白膠薰陸等の香を燒きて壇中に安じ呪人は壇の西にし、て面を東に向へて坐し、大自在天の呪を誦すること一百八徧し已りて口に慙愧好去と云ふべし。是の如く語し已りて壇中の雜物を盤に盛りて門を出で西に向ひ棄却せよ。

(一)帝殊囉施　光聚佛頂の印なり、後に掲ぐる陀羅尼集經にあり。

西北も亦た得。口に薩婆藥叉囉闍阿藹捨訶娑鉢闍伽車と云ふべし。是の語を作し已りて棄却して即ち歸れ。

(二)大自在天呪　唵、毗哆囉薩尼、波囉末唎達尼、瞋達尼瞋達尼瞋達尼、頻達尼頻達尼、娑嚩訶　呪を誦すること一百八徧すれば即ち心に歡喜す、但だ夢中のみに非す、但だ魔事あることを覺へば即ち前の法を作せば定て好し。

像を造る法　其像の形を端しく立て象頭人身なり。左の牙は出で右の牙は折れたり。面を少しく左に向け其の鼻は外に向ひ僂れり。六臂ありて其の左上手に刀を把り、次の手に果盤を把り、右の上手に棒を把り、次の手に索を把り、下手に牙を把る。此の像を造るに價を還すことを得ざれ、數を足して之を付けよ、若しは鑄、若しは刻、若しは畫並に得。右此の大聖天祕要法は人間に希有なり、實に之を傳ふる勿れ、宜しく誡め愼むべきなり。

國譯大聖天歡喜雙身毗那耶迦法 終

(一)大自在天呪　欲界の舍那天は障礙をなすが故なり

國譯底哩三昧耶不動尊聖者念誦秘密法卷上

大興善寺三藏沙門不空　詔を奉じて譯す

底哩三昧耶不動明王本事神力息障祕要品第一

(一)底哩三昧耶不動明王本事神力息障祕要品第一

我れ薄伽梵大日世尊、復た修眞言者のために除障の因を說かん。一切の障法は無量ありと雖も、要を以て之を言はゝ但だ心より生ず、又た行者過去世に慳法に隨順するに由るが故に今世に多く諸障あり、當さに知るべし亦た是れ心の因緣に從て生ず、當さに知るべし彼の慳貪等は是れ諸障の因なり、若し能く彼の因障を除けば諸障自ら息む、若し能く除對治は即ち淨菩提心なり、若し菩提心を念ずるが故に、即ち是れ能く諸障の因を除く、又た一切諸障は分別心に由て生ず、心思有なるは即ち是れ障なり、謂く心中の煩惱・隨煩惱等なり、若し諸の分別を離るれば即ち是れ淨菩提心なり、眞言行者の此の心を憶念するに由て即ち一切の諸過を離る、意に常に無動聖者を思惟す

(一)底哩云云　此の品は露地に灌頂壇を築いて修行する故に雹電風雨の外難あり、而も此の心外の障は內の煩惱より起るが故に先づ煩惱を治めて外難を止むる觀行等を示す。

續藏三套ノ一、豐山鋒外中一。

れば即ち能く一切の障をなす者を除くこと、前の所説の如し。無動明王は此れは是れ如來の法身なり、大願を以ての(一)故に、無相の相の中に而も是の相を現じて、一切の眞言行者を護す、若し能く常に念ずれば、能く一切の障を離るゝなり。謂はゆる無動とは即ち是れ眞淨の菩提の心なり、是の義を表せんがための故に、事に因て名を立つ。此の明王一目を閉づるは亦た深意あり、佛の明鑒唯一にして無二無三なるを以てなり、其の印は下に自ら當さに之を說くべし。

秘密主一切の惡風には阿字を誦すべし、亦た深意あり、正しく阿字を取て身となす、此の本無生の字門を以て而も我が身と作すなり、無我に於て訶字を作して心に誦せよ。塗香を地に點して七の圓點を作せといは、此の風には先づ訶字を想へ、中に在て七點を加して而して好く之を蓋へ、方は(二)縛度に依て瓦椀を以て蓋として之を合ふて、此の瓦椀は(三)大衆生の彌盧を思念して、時時に彼の上に阿字並に點を想へ、是を作して風大を縛繼すべし、先佛の所說なり。謂く壇を造立する時、或は大風の障をなすことあらば、露地に立つを以て故に須らく之を止むべし、此の阿字、身分の內に遍して此の字金剛不動色を作すと想ふべし、謂く眞金色なり、是の如く想ひ已て又た心に阿字

(一) 故に乃至中に一本に「無相の中に於て」に作る。

(二) 縛度 風なり。

(三) 大衆生の彌盧に依れば大中小の三彌盧の中、今は大須彌なり、百億世界の總體となる。

を誦し、風方四北方なり に於て塗香を用ひ、地に於て(一)一の小圓點を畫作して、各の彈丸許りの大さの如く數の如く足て、即ち瓦椀を用ひて之を蓋ひ、瓦器の上に於て阿字を想へ、此の字を以て金剛山となして之を鎭押す、三千大千の諸の須彌山を合して一體となして其の上に蓋ふ。又た時時に器の上に阿字の想を作す、此の阿は是れ金剛不動の義なり、一點を加ふるは是れ一切處に遍するなり、今此の金剛は不動にして一切處に遍す、即ち是れ增廣の義なり。

秘密主、水障の法とは、當さに囉字を思ふて身內に遍すべし、赤色の大力焰を作すこと即ち是れ火焰の鬘なり、內より出でゝ身上に遍して鬘の如し、大力可畏の惡形を作て手に大刀の印を執て噴形を作すこと已て、地に畫いて雲の像を作す、或は龍蛇の像を作すべし、刀印を用ひて其の形を斬斷すれば、雲即ち散滅す、雲は是れ諸水の因依する所なるを以ての故なり、障を起さん所の方に隨つて之を作れ、如し雨東より來らば即ち東方に於て作せ、或は金剛橛を作りて此を用ひて其の風を止む、其の橛には佉陀羅木を用ひて、獨股金剛杵を作て、金剛の眞言を以て之を加持して、一切の金剛に同なりと想ふて、而も以て之を打つべし、亦た所在の方面に隨ふべし、此れは自身一切

(一) 一に作る。或本に七

の金剛に同じて然して後に之を作すべし、此の概は是れ三股金剛なり、邊支を除去すれば即ち獨股金剛となる、其の最小の者を金剛針と名く、一切の障難を息除す。復た大威德忿怒不動大力の眞言法を說かん。本曼荼羅の中に於て住を作し、持誦者曼荼羅の中に於て彼の形像を畫作して、左の脚を以て彼の頂上を蹈め、當さに除息すべく、死すること疑ひなけん。復た更に異の方便を以て一切の障を除くなり、即ち前の所說の不動明王の本曼荼羅なり、即ち是れ三角曼荼羅、其の中黑色なる是れなり、持誦者自ら己身不動尊明王の像となると想へ、又た此の中の作法に於て二の意あり、一には不動尊圓壇中に在て彼の上を蹈むと想へ、二には自身不動尊なりと想ふて、即ち本眞言印を以て上を蹈むなり、三角の中に彼の障をなす者の形を畫け、然して後に中に入て左脚を以て彼の頂上を蹈み、大忿怒の形を以て之を加せよ、彼れ當さに時に應じて退散すべし、若し彼れ此の敎に違戻すれば、主必ず自ら其の命根を斷ず、是の故に持誦者慈心を生じ念言して、彼をして命を斷せしむること勿るべし。然も此の中の密意は、不動は謂く障をなす者なり、即ち是れ心より生ずる所の慳貪等の法、能く行人のために一切障事を作す、今此の無動明王は即ち是れ一切智智の大菩提心なり、當さに知るべし(一)此は即ち是れ大力威猛にして能く永く一切の隨眠等の過を害す、彼をして永斷せしむるは即ち是れ死の義なり、瑜伽の(二)會中の如き、佛初めて正覺を成じたまふ時に、大集會の中の一切曼荼羅の所攝の三界の衆に、摩醯首羅といふ、者あり、即ち是れ三千世界の主、三千界(三)の中に住して心慢する故に、肯て所召の命のみに從はず、是の念を作さく、是れ三界の主なり、更に誰の尊有てか我を召さんやと。復た是の念を作さく、彼の持明者は一切の穢惡を畏る、我れ今一切穢汚の物を化作して、四面に圍繞して其の中に住せば、彼が施す所の明術、何んぞ能くなす所あらんやと。時に無動明王、佛の敎命を承けて彼の天を召すに、此の如くの事を作すを見て、即ち(四)受觸金剛即ち是れ不淨金剛を化して、彼をして之を取へしむ。爾の時に不淨金剛須臾に悉く所有る諸穢を噉ふて、盡して餘りなからしむ、便ち彼を執へて佛の所に來至す、彼れ復た言く、我は是れ諸天の主なり、何んぞ能く爾が所召の命を受けんやと、尋で即ち逃れ歸る、是の如くすること七遍、爾の時に無動明王、佛に白して言さく、世尊此の有情故に三世の諸佛の三昧耶の法を犯す、何事をもつてか之を治すべき。佛の言はく、即ち(五)彼を斷ずべしと。時に(六)不動明王即ち彼を持へて左足を以

(一) 此 一本に此の心に作る。
(二) 會中 一本に所說に作る。
(三) 界。の中 欲色二
(四) 受觸金剛 烏瑟沙摩明王
(五) 彼 一本に彼の命に作る。
(六) 不動明王云云

て其の頂の半月の中を蹈み、右の足を以て其の妃の首の半月の上を蹈む。爾の時に大自在天尊で即ち(二)命終しぬ、爾の時に悶絶の中に於て無量の法を證す、而も授記を得、灰欲世界に生じて作佛して(二)日月勝如來と號す、此れ皆秘密なり。一切穢惡の汚を食すといは、是れ惡業煩惱等の垢穢滓濁を噉するなり、之を謂つて(三)法本命終とすることは、是れ彼の一切の心法永く斷じて、無生の法性に入る故に、此の中に於て一切の佛の記を得、是れ殺には非るなり。爾の時に諸天等、三千界の天王の諸佛の三昧耶に順せざるを以ての故に、自ら命終を取るを見て、一切敬畏して自ら相ひ謂て言く、天主すら尙ほ爾なり、我れ云何んして往かざらん、即ち共に佛の所に來詣して、大曼荼羅の中に於て法利を得たり。時に無動明王、佛に白して言さく、此の大自在天をば當さに更に云何んがすべき、佛の言はく、汝之を甦らしむべしと。時に無動明王即ち法界生の眞言を說く、爾の時に大自在は即ち復た蘇息して大歡喜を生じて佛に白して言さく、甚だ希有なるかな、我れ初め召されしとき至り已て佛に向ひたてまつる(四)故に此の夜叉は是れ何等の類ぞ、我れ解せざる所なりと。佛の言く是れは諸佛の主なりと。我れ是の念を作さく、諸佛一切の尊ならば、云何んが此を以て更に主とせんや、是れ

(一) 初地の淨心顯現する時、而二の隔執蕩盡するは不動尊(初地淨心)自在天(根本無明)を降伏して無明即明となる義なり。

(二) 命終 注に云く、斷惑の意なり。

(三) 日 一本になし。

(四) 法本 一本になし。

(四) 故 意詳ならず。

解せざる所なりと、今乃ち之を知んぬ、此の大王の力の故に我をして現前に得記作佛せしむ、當さに知るべし實に是れ諸佛の尊なりと。(一)秘密主大自在天は三千世界の主なり、即ち是れ衆生の自心なり、所謂る(二)無明住地、諸惑の中に於て自在を得、唯だ大菩提心を除いて能く伏する者なし、其の命を斷じて已るといは、即ち寂然世界に於て作證するなり、所謂る生とは即ち是れ佛慧の門を起すなり、是の故に眞言行者一一に思ふて諸佛の密語に順ずべし。又たの法。芥子及び諸の毒藥を用て二種相ひ和して、彼の障をなす者の形像を作つて、用ひて之に塗り、彼の身をして火燒くが如く速かに中傷を被むらしむる故に速被著といふなり、乃至大梵等の障をなす、尙ほ能著を被むる、何に況んや餘をや。又た凡そ此の法は皆是れ久しき時に持誦せる大成就解法の者のみ、乃ち能く之を作す、若し但し法を聞いて即ち是の如くの用を得んことを求めば、此の理なし。其の佉陀羅木の橛は、若し此れなくば當さに苦楝木を用ふべし、乃至(三)資鐵を用ふるも亦た、得ること之を知れ。時に金剛手、佛に白して言さく、我れ佛世尊の所說の義を知るが如く、我れ亦た是れ曼荼羅の位に住することを知る、世尊の尊主威を現じて彼の位に住せしむ。是の如く如來の敎敕敢て隱蔽せず、何を以て

(一) 秘密主 此の三字一本に「然る所以は」に作る

(二) 一本に無始無明に作る。

(三) 資 一本に鎖に作る。

の故に、此の佛の三昧耶は一切の諸の眞言の師とする所なり、謂く性に住する者なり。金剛手、佛に白して言さく、此の(一)大無動明王即ち是れ尊主は能く是の如く威猛の事を作して、能く難調を調へ、是の如く秘密の敎令を傳ふる使となる、如し本尊是れ佛部即金輪の中にす、若し是の如く作せば必ず靈驗あり、此の現威は即ち効驗の語なり、修行者をして若し是の如く作さしめば必ず効あらしめん。諸の生死の中に普ねく聞知することを得しめ、敢て此の眞言主を隱蔽せず、是の故に持金剛者(二)大威猛敢て隱蔽せざる所なり、謂く此の尊靈驗あるが故に所作の善事皆成す、諸の障を爲す者敢て如來の敎勅したまふ所を隱蔽せず、此れ即ち是れ十方三世諸佛の三昧耶なり、我れ等一切の執金剛も亦た此の法をなすべし、作すべき所の者は此の三昧耶に隨て敢て失墜せず、何を以ての故に、此れは即ち是れ諸の執金剛の性なり、是の故に當さに斯の法に住すべし、四姓等の各各に家法あるが如き、若し家法を失すれば則ち先祖父の敎に敬順すと名けず、世人名けて惡子となす、今此の大雄猛、難調を調伏し難信の敎を宣布す、是れ我が金剛等家姓の法なり、所謂る如來種姓の家なり、是れ等は眞言門修行の諸菩薩等、本中に於て住して一切の事業を作すとは、是れ金剛手身を以て勤懃にして之を行じて

(一)大力に作る。一本に大

(二)大力に作る。一本に大

言く、我れ等が作すべき所の事業亦た復た是の如し、若し未來世の持眞言者亦た此の位に住すべし、所謂る如來の家法なり、無量の門を以て諸障を降伏し、如來の法をして敢て隱蔽することなからしむべし、此の眞言行人も亦た諸尊に於て若し降伏を作さんと欲はゞ、即ち自身無動尊と作て火輪の中に住すべく、亦た火生三昧と名く。秘密主若し諸の彩色を以て、曼荼羅中の諸尊の色を畫かば、先佛の說とは謂く本尊に各の形色あり、下に當さに之を說くべし、上に說くが如く本位に隨て住して事業を作す、謂く會中に於て所有る諸尊、若し其の黃色を見ば、即ち金剛中に坐せしむべし、白色ならば即ち水輪の中に坐し、黑色ならば即ち火輪の中に坐せよ、次の下に色の字あり、梵音別名なり、此れは是れ形相なり、是の如く寂然として即ち須らく圓の壇に坐せしむべし等の類、一一に敎に依て畫くべし、是の(二)故諸佛の所說なり、其の道玄に同なりと欲するに非ず。秘密主未來世に當さに衆生あつて劣慧不信のもの此の法を聞かんに、先きより信根なきを以ての故に、此を聞いて信ずること能はず、此の衆生等鈍根少智にして信具せざるを以ての故に、此の甚深の事を聞いて曉了すること能はず、更に疑

(一)故一本に古に作る。諸の字一本になし。

て一切智智の心に同ず、是の如く疑慮なければ一切の障法其の便を得ることなし。

次に復た法界生の眞言を說いて曰く　曩麼三曼多沒陀南一達磨駄睹二薩嚩合婆嚩二句痕(ナウマクサンマンダ ボダナン ダラマダト ソバハバクカン)

秘密に曰く、不動とは是れ菩提心大寂定の義なり、我が薄伽梵大日世尊最初正覺に寂滅道場に坐せしより、大願を以ての故に三世の諸佛の應正等覺を證す、皆四祕密三菩提より起て、三身を應現し等正覺を成ず、如來成道の時先づ寶菩提樹に坐して魔を降し道を成ずるは即ち是れ大寂定不動の菩提の本因三世諸佛皆な幻化の義、種種の身雲を現じて諸の衆生を敎化し調伏す、故に事に因て號を立て不動尊と號す。又た明といは尊の義なり、即ち是れ大日世尊の差別智身なり、大願を以ての故に、無相中に於て而も相を現作す、一目を閉づることは深意あり、極惡醜弊の身を示現するなり、唯し佛世尊のみ廣大圓滿し、衆相具足したまへり、我れ下劣卑弊の身なり、亦た是れ怖魔の義なり、(一)頭上の七種の髮は七菩提分を表す、左に一髮を垂れ下に向ふは是れ慈悲を垂るゝの義、下惡極苦惱の衆生を悲念するなり。無動使者といふは即ち大日如來なり、世間の王勅の敎命の如きは一人をして火急に(二)追役使せしむる人至り已らしむるに、上み王公に至り下も凡庶に及ぶまで貴賤を問ふことなく、更に敢て拒逆せず、皆使に

(一) 頭上の七種髮　古來の說詳かならず、運敞の谷響集、長宴の四十帖にも出づ經軌には奴僕の垂髮を示す。

(二) 追役使　一本に追捉役使に作る。

網を增すべし、此れを即ち說いて障の所由となす、是の如く眞の畫色及び持誦等、一一に皆深意あり、畫は是れ如來不思議の事なり、此の如く畫色等皆な法に依て疑はざれば、乃ち能く深く法界(一)不思議に入る、唯し信ずる者のみ入ることを得、若し心を以て數へ下して量らんと欲はゞ、云何んぞ所以を知て疑はざることを得んや、謂く如來眞空無相の法に非ず、自傷に從るなり。此の色の字をば亦た通達といふ是れ正義なり、謂く異の方便事として解せずといふことなきの義なり、(二)已彼の先と此との一切說梵音廻互せり、上文已に諸佛を明し今此の下の句に先佛といふ、是の如くの說を作し已て、彼此一切說利益なり、求むる者彼の凡夫なれば知らず、說法の相は空一切諸法の相を常と說く、當さに眞言業に住すべし、善を作して疑ひなき者は此の意の言く、如來は一切智を具して諸法の中に於て自在を得、衆生は劣慧にして未だ頓に如來自證の不思議の力用を說くに堪へざるを以ての故に、此の畫色等の方便を作して、諸の衆生をして所作の者に隨て、能く所求を滿して利益を得しむ。然る所以は、諸の衆生は未だ諸法の空相を解せざるを以て、是の故に無相の中に於て有相の方便を作して之を說く、若し人、佛の深意を得ば、當さに眞常の行に住すべし、諸有の所作皆な理體に入

(一) 不思議の下、一本境の字あり。

(二) 已　一本也の字に作る。

隨て彼の王の所に往至す、善惡を問ふことなく一ら敎命に依る、無動使の義も亦た復た是の如し、能く眞言行者をして親しく佛を見たてまつるが故に、廣大心を發して(一)灌頂位の中に佛の長子とならしめ、佛、淨佛國土の遊戲神通を願せしむ、右手に劍を執ることは、世間の征戰防禦の如きは亦た利器を執て然して初めて勝つことを得、菩薩も亦た爾なり。左手に索を執ることは是れ繫縛の義なり、又た世間の密かに一人を捉ふるに、如し違逆難伏の者あらば即ち繩を以て繫縛し捉將す、諸佛の祕索四魔を降伏するが如き、亦た復た是の如し。(二)盤石の上に坐することは亦た是れ不動の義、世の山岳の亦た石を以て鎭押して、方さに始より動せざるが如し、又た大海の亦た須彌山を以て鎭押して然して始めて常安を得、湛然圓滿なるが如し、不動も亦た爾なり、其の大石の性は能く一切の寶物を出生す、無動の大盤石に坐することは、亦た能く佛の功德の寶を出生す、亦た是れ降伏四魔の義なり、不動は亦た自身に遍に火焰の光を出すこと、即ち是れ本尊自ら火生三昧に住するなり。又た明さく、火に四義あり、二種は世間、二種は出世間なり。世間の火とは一は是れ內火。三毒の煩惱之を名けて火となす、能く諸の衆生の諸善の功德を燒くが故に。二には外火。能く衆生を成就し萬物を長

(一) 灌頂位　等覺位なり。

(二) 盤石上に云云　不動の坐する座を大盤石といふは堅固不動なを表す、大盤石座即ち須彌座、須彌座は淨菩提心の堅固不動を表す。

養す。出世間の火とは是れ大智火なり、九十五種の外道の法の中に事火を最とするが如し、大火龍の世の火を變出して衆生を燒損し、亦た能く衆物を焚燒するが如く、此の無動の智火は(一)先づ能く火龍を降伏し諸の異道を制して、上み等覺に至り下も衆生に至るまで、皆能く諸の煩惱乃至菩提大智の習氣を燒き、亦た一切衆生の無明の煩惱黑闇の障を燒くが故に。又た本尊の眞言句に自ら火生の義あり、即ち摩賀盧沙の句是れなり。此の智火は阿字の一切智門に住して重重に諸の菩薩の廣大の習氣煩惱を燒いて盡して餘なからしむ、故に火生三昧と名く。又た無動の義とは利劍を執持して能く生死の業愛煩惱を斷壞するが故に、三世の貪・瞋・癡・我慢の煩惱を降伏するが故に。殘食を喫することは、一切衆生の惡業煩惱の重障を啜つて、盡して餘ならしめ、無生法忍を證するが故に、三たび未來世を降して無明煩惱の習氣の見障を斷ずる故に。金剛索を執ることは、大菩提の路に引至し佛の解脫門に住し、三寶の種位に紹隆して斷せざるが故に(二)降三世の義と名く。是の故に本尊、四密門に住するなり、所謂る(三)阿路唅輪重重なり、是れ怖魔の義亦た是れ種子の義なり、世間の良田の善種を下すに堪へたるが如く、諸佛の智種も亦た復た是の如し、能く大悲曼荼羅を成就す、一切陀羅尼門三摩

(一) 先に作る。一本に光

(二) 降三世の義　使者の法も爾かいふ。

(三) 阿　大疏に訶路唅絵、此の四字皆阿の聲ありと云へり。

(一) 嗢勃楹桲か。

(二) 久 一本に人に作る。

(三) 簸拏曳二 一本に簸二拏曳二合に作る。

(四) 娑太野 一本に娑悉地野に作る。

(五) 亦たの上、恐くは眞言文及び句脱するか、更に考へよ。

地門を出生す。拘底支木(槐木是れ)烏伽木(一)(嗢勃是れ)阿彌尸利師木(守宮槐木是れ)鎭頭伽木(柿木、未だ詳かならず)篤迦木(栗の木是れ)播囉師木(胡桃木是れ)羊素佉木(甘草)居凌迦木(李子是れ)舍利般那木(墻徵是れ)

復た次に或有は眞言の中に三の吽字ある者は、能く一切の事を成ず、所謂る護身結界召請供食相助決罰敎授等の事なり、若し(二)久しく一切の眞言を持するに成就せざる者は、此の眞言を持するに當さに一切眞言の法を成ずべし。三の吽字眞言に曰く、

曩謨喇但曩怛囉夜耶一曩莽室戰二合荼嚩日囉二合三簸拏曳二摩賀藥乞叉二合細那鉢多曳三唵四蘇悉地耶蘇悉地耶五(四)娑太野六蘇悉地羯羅七吽吽吽八泮吒泮吒

蓮花部の明王を賀野羯利婆と名けて、補瑟徵迦の明王の眞言となす、(五)亦た降三世明王と名く、眞言に曰く

曩謨囉怛曩二合怛囉二合夜耶曩莽室戰二合荼嚩日囉二合簸拏曳摩賀藥乞叉二合細曩鉢多曳唵嚩婆徐嚩婆吽庀哩二合疊拏二合庀哩疊拏二合吽庀哩二合疊拏二合播耶吽阿娜耶護引薄伽梵尾你夜嚩日囉二合囉闍吽泮吒曩莽

蓮花部明王心　唵微路枳寧莎嚩二合訶引

佛部明王心　唵若嚩囉路者寧莎嚩二合訶引

金剛部明王心　唵滿度哩儞異鉢帝莎嚩二合訶

念誦し已て眠らんと欲する時には、前の光莊嚴の印を作すべし、又た部母を以て護身し再び被甲し所臥の處を加持し、然して後に身心を澄淨にして、明を誦して曰く　唵吠賒你吽

此を以て加持すれば惡夢なからしむ、若し諸の惡相を夢みることあらば、即ち此の明を誦して曰く　唵嚩日囉二合那羅呵那摩佗盤闍囉拏吽泮吒

誦すること一百八遍、所眠の處に於て如法に辟除結界せよ、若し善惡の相を知らんと欲はゞ、前の三部の明王心を用ひて檀香水を加持すること七遍して三掬を飲み、並に以て身上に灑ぐべし、若し念誦して成就を求むるの時、上の如く作法して方さに善相を取るべし。

一切衆生は　無明に覆はれ　唯だ菩提を求むるにをいては　信受すること能はず
我れ今彼がためにす　己身のためには非ず　唯願くは如來　成就の時には
我が遍數を還したまへ

偈を誦すること既に畢つて、百字の明を以つて、加持すべし。又た部母を以つて尊及び己身を護し、三昧耶大結護を以つて其の印を左轉して、文闍(モンジヤ)の句を以つて、即ち界

を成す。

國譯底哩三昧耶不動尊聖者念誦秘密法卷上 終

國譯底哩三昧耶不動尊聖者念誦秘密法卷中

大興善寺三藏沙門不空　詔を奉じて譯す

(一)根本眞言品第二

三昧耶經の中に略說して、無動明王根本秘要成就一切事業を出す、諸の修行者をして諸佛の實智を顯發せしめんと欲ふがための故に、三世の諸佛の應正等覺は、皆陀羅尼門三摩地門を成就するに由て、菩提樹下に於て最勝の三解脫門を現證し、一切智を具す、彼の釋師子、無比大明呪藏を獲るに由るが故に、能く魔軍を摧伏し一切を利樂す、是の故に智者心(コ・ロ)を此の門に安して秘密を行となし、まさに淨菩提心を以て此の法を修行して、速かに一切智を成就することを得べし、故に我が薄伽梵大日世尊・復た一切の修眞言者の爲めに障を除かんがための故に、火生三昧に住して此の大摧障の眞言を說く、此の秘密明の威勢能く一切有情の種種の障難を除く、乃至佛、道樹の下にして此の

(一)根本眞言品第二　此の中には大小の諸の眞言を說く。

眞言の力を以ての故に、一切の魔軍散壞せずといふことなし、何に況んや世間所有の諸障をや。又た此の障を明すに略して二種あり。一は內障、謂く自心より生ず、其の類甚だ多し具さに說くべからず。二は外障、外より生ず、其の類亦た甚だ多し、要を以て之を言はゝ、皆能く障を除くなり、即ち大摧障聖者不動明王威怒の明を說いて曰く

曩麼三(一)曼嚩日囉二合赦一怛羅二合吒阿謨伽戰拏二摩賀路灑儞上二合吒野吽四怛囉二合摩野怛羅摩野五吽怛囉二合吒唅發六

(一)秘密釋に曰く、曩莫三曼哆縛日羅二合赦歸命普遍忿怒金剛王なり怛羅二合吒殘害破障なり阿謨伽戰拏不空威怒極惡の極なり形狀の暴惡にして過ぐる者あることなきことを示す、乃至一切世間の諸障を殲食して餘あることなからしむる惡中の惡なり。摩賀路灑儞此は是れ大怒なり極惡の中に更に忿怒暴惡なり、即ち是れ諸佛の第一義なり、威猛世間を殘害して、其の巢穴を滅盡して定んで法界に入り金剛界に歸依す。吽怛囉二合吒野破壞なり吽恐怖なり怛囉二合摩野堅固なり吽怛囉二合吒唅發種子。後の二字を用ひて種子となす、諸の句義の中に皆能く事業を成す、初に戰拏は是れ死の義なり、阿字門に入れば卽ち本無生死の義なり、茶は是れ戰の義、此の無生死大勢の王を以て、諸の四魔と戰ふなり、次に魔は是れ我の義、阿字門に入れば卽ち是れ無我なり、亦た是れ空三昧なり。(二)盧は囉字あり垢障の義を體とす、鄔聲あるは是れ三昧なり、卽ち奢摩他を大三昧とするなり、儞は是れ戰の義、阿字門に入れば卽ち大空三昧なり、薩は是れ堅の義、頗は是れ沫の義、世間の法の如聚沫を知るが故に破壞し易きなり、傍に阿字の點あるは卽ち行なり、吒は是れ戰の義、能く障に敵して怖畏して破らしむるなり、野は是れ乘の義なり、吽は是れ大空三昧なり、上に說くが如し、怛は是れ如なり、囉は是れ無垢なり、(一)吒は是れ作なり、謂く一切の法は無作なり、唅字の上に空點あるは是れ圓寂の義なり、亦た大空智と名く、訶字門に入るは是れ行の義、又た阿聲あるは魔障を怖する金剛三昧の行なり、(二)野は卽ち大空なり、此の大空不動の行を以て大いに一切魔障を怖るゝなり、賀字をば亦た大空智と名く、爲く慶字門は是れ我の義なり、阿字門に入りしは無我なり、謂く一切の法は本と生滅なし、又た此の大空無我の三昧を以て衆魔を怖る、此の字亦た阿聲及び(三)野を有るを以てなり、(四)阿噓唅發此の四字皆な阿の聲あり、即ち重ねて魔を怖る極怖畏なり、即ち是れ內外二障を破るの義なり、三昧を結び已て即ち想へ、自身全く囉字となると。此の字猶ほ火色の如くなると想へ、字より熾然の猛焰を發して、身中の(五)三毒の煩惱及び隨煩惱を(六)焚燒し、一時に頓に盡くる時、火も亦た隨て滅して囉字を存す、融して皎月と成て心中にあり、是の觀を作す時遲住すべからず、速かに慧心を轉じて其をして成

(一)曼の下、多の字脫するか。

(二)祕密の上、一本に字義の二字あり。

(三)冠註に云く、空三昧の次に訶の字の釋脫ぜるか云云。

(一)吒　冠註に云く、吒は若しは迦の字か。

(二)野　冠註に、野は恐く摩の字ならんかと。

(三)野　冠註に、野の字恐くは點字か。(四)阿　一本に訶に作る。

(五)三毒　貪瞋・癡の煩惱なり。(六)焚　焚か。

(一) 澡浴結護身品第二　左右の手、福智を表するは左は檀(小)戒(無名)忍(中)進(頭)禪(大)を福となし、右は慧(小)方(無名)願(中)力(頭)智(大)を智とす、是れもと六波羅蜜は福智の二法(初五は福、第六は慧)なる故なり、また此の慧を開いて五度とす、右は自在にして慧の德ある故に右慧をにし慧方願力智の五度とす、然るに此の儀軌は左を慧とし右を定とせり。

就せしむ。

(一) 澡浴結護身品第二

無動金剛極安穩護身印明第一

先づ二小指を以て內に相ひ叉へ、大指の虎口の中に於て出して二中指を並べ竪て、二無名指を中指の背に於て相ひ叉へ、二頭指を以て各の無名指を握つて二大指を竪て、中指の中節を捻する是れなり、明に曰く　曩麼三曼多勃馱喃一唵二賀羅賀羅三摩訶徐弭多吽引泮吒半音四

爾の時に無動聖者洗浴の法を說く、二種あり、一は內淨、二は外淨なり。內淨とは諸の衆生に於て、慈悲喜捨の心、清淨無我の心を起すなり、二は外淨、水を以て洗浴するなり、或は河の中に於てせよ、先づ三昧耶の印を結べ、頂上に置安して明を誦すること三遍、即ち杵の印明を用ひて身を護し、垢に瀉ぎ方さに結界すべし、水及び土を淨むるにも亦た杵の印明を用ひよ。

無動金剛洗浴結護八方印明第二

禪度を掌に入れ握つて拳になし、獨り進度を竪てゝ金剛峯の如くして三轉せよ、右に

轉ずれば結界となり、左に轉ずれば解界及び辟除なり、明に曰く　唵唅吽摩訶呬摩畔馱徐畔馱吽畔馱嚩日囉二合嚩日黎二合儞吽泮吒

無動金剛洗浴淨水印明第三

禪智を定慧の掌中に雙べ入れて、印を以て水を攪せ、諸障を除く明に曰く　曩麼三曼哆嚩日囉二合赦一怛囉二合吒阿謨伽戰荼二摩訶嚕灑拏三薩頗二合吒耶吽四怛囉二合莎耶怛囉二合莎耶吽怛嚕二合吒吽怛嚕二合吒

不動金剛著甲印明第四

戒方を掌に入れ背き相ひ著く、進力掌に入るるも亦た是の如し、六度竪て合せ三鈷杵の如くせよ、腕を開いて身上頂を印し、五處を加持して頂上に散す、是れを金剛甲と名く、明に曰く　唵唅吽嚩日囉二合三摩曳嚩日囉迦縛制護嚩日羅二合吽泮吒半音

此の明印を以て五處を印して、即ち甲を著るに成る、意に隨つて洗浴せよ。

不動金剛灌頂印明第五

戒方檀慧內に相ひ叉へ、忍願竪て合せ進力に附けよ、智方の背を捻せよ、禪も亦た然なり、是を本尊灌頂の印と名く、明に曰く　曩摩悉多羅三合也地尾二合蘖多引南薩羅嚩怛

他引(タヤ)嚢哆喃紇唎(ナンキリ)二合薩羅(サラ)嚩母駄那婢(バボダナウビ)尊也の反(ラハ)遮波(シャハ)波羅濕摩鼻曜罰婀婢(ビヤクイアビシン)去 者怛(ジヤタボ)謨努遜(トタイハライ)遜嚩(チ)丁以の切(ピラ)尾曜者麗莎嚩(シヤレイソワ)二合訶

修眞言者、甲を著し身を護し、洗浴して衣を著し竟て明を誦して曰く　唵(ランカンム)嚂吽(ソハ)塞顛(タヤ)吒(輕呼半音)

不動金剛杵の印眞言は、一切の穢處に用ひよ、修眞言者一切の穢處に往かんと欲はゝ、先づ杵の印を用ひて五處を印せよ、謂はゆる兩の肩●心●額●喉●頂是れなり印を用ふる時は明を以て加持して、頂上に至て散せよ、明を誦して曰く　唵阿者(アシヤラ)遜迦(キヤダ)拏戰茶(セイダサ)莎駄耶(タヤムハツタ)吽泮吒

結護道場品第四

無動金剛三昧耶印明第一

是の如く法に依て洗浴し已て、即ち精舍に往け、清淨の心を以て常の如く合掌して、禪智二度を直く竪て、額の上に於て思惟せよ、諸佛菩薩目前に對するが如く、其の身心を放ちて坦然として禪悅にして三昧耶に入る、明を誦して曰く　曩摩薩嚩(ナウマクサラバ)母駄冐(ボダボウ)地薩怛嚩(デサタバ)二合喃那莫蘇悉地莎達(ナンナウマクソシツチサダ)二合迦嚩(ニアギヤロニバラダイ)徐阿蘖隷(キヤレイ)二合迦嚩徐嚩囉提(二)怛囉異怛囉異阿嚩曳阿底摩嚩(タライタライアバエイチテマレイ)

(一) 吽羅　一本に重句に作す、聆字を聆字にす、

(二) 怛羅異　此の重句を高本に多異二字に作る、那莽素に異莽索に作る

那莽素都(ナウマクソト)二合帝波囉摩悉地駄也嚩(アイハラマシツヂダヤケイビ)鼻喩(ユ)二摩訶訖哩(マカキリ)二合閉弊(ベイビヤ)毘也の反莎嚩(ソワカ)訶

禪智並べ合せて蓮華掌にして　本明を加持して額の上に安し　諸法の本不生を思惟せよ。

不動威怒辟除障難印明第二

願力並べ竪て、端(なを)くせよ　慧方鈎の勢の如くし　智度を以て捻して環の如くせよ　慧の羽も亦た是の如し

即ち忍進を以て劒にして　定の鞘の中に穿(さ)し入れよ　是を無動の劒と名く

方隅界を結護し　一切魔を辟除す　劒を持して右に旋轉せよ

刀を投げて左に之を遶らして　下に指すに金剛橛なり

上に虛空界を結せよ　復た秘密明を誦せよ。

曩麼(ナウマクサンマンヌ)三曼哆(マンダ)嚩日曜(バザラ)二合赦怛曜(センタラ)二合吒戰荼摩訶路灑拏(センダマカロシヤダソハ)沙頗(タヤ)二合吒耶吽怛曜(ウムタラ)二合吒唅(カシマム)

密に誦すること三遍或は七遍せよ、印を以て右に旋して結護し、左に轉じて辟除し、及以び上下せよ、是の明の威力能く大いに十方の大界を擁護し、及以び身を護し並に

處所を淨除せよ、乃至三界も猶ほ能く防護す、況んや一の方所に是の法を作さんをや、

(二)時に行者の心に隨て明印を念じて、及ぶ所の處能く種種の類及び難調の魍魎の屬を して、皆燄然の金剛威怒の大火聚の其の處に周遍するを見せしむ、此の印の効能甚大 にして說き難し、若し人、世に住すること劫を窮めて其の功能を說くとも亦た盡すべ からず、是れを無動の金剛劍と名く、此の印明は亦た五部の護身結界に通じて用ひよ。

無動金剛能成就一切事業杵印明第三

止の羽の掌を竪て開き　禪進捻して環の如く　各の建てゝ金剛峯の如くにして

是れを無動杵と名く　復た密言を誦して曰く　曩麼三曼多嚩日囉二合赦戰拏唵阿

者遲迦二合拏者嚕娑駄耶吽泮吒

此の杵の明印は能く一切の事業を成就す、乃至洗浴明淨土及以び護身結界にも皆此の 明印を用ひよ。

無動金剛墻印明第四

戒方進力屈して掌に入れ　忍頭並に檀慧を側て竪てよ

禪支屈して進の下の文を捻進して　智の力支を捻することも亦た是の如し

(一)時一本に所の字に作る。

(二)拏者の下、一本に拏者の二字あり。

明を誦して曰く　唵啥吽嚩日囉二合曼荼隷畔駄畔駄吽泮吒呼輕

明を誦すると三遍して、印を以て左に轉せよ三遍、心の遠近に隨て即ち墻界を成就す。

無動金剛網印第五

戒方進力內に相ひ叉へ　六度竪て合せて頭相ひ拄へよ

腕を開いて頂上にして右に三たび旋らせ　即ち金剛堅固の網と成る。

明を誦して曰く　唵啥吽嚩日羅二合薩囉二合步囃忿暮吽泮吒牛音

此の印を結び已て明を誦すること三遍、頂上に於て右に旋らせ三市、即ち網界を成す。

無動金剛火焰印明第六

二羽掌を翻して背いて相ひ叉へ　即ち本尊三昧の火となる。

金剛墻の外に三たび旋繞せよ　火の猛焰の如く金剛城なり。

一切の魔軍悉く馳散す。

明を誦して曰く　唵啥吽嚩日羅二合入嚩二合隷吽泮吒

此の火焰の印を結び已て明を誦すること三遍、金剛墻の外に於て右に旋らすこと三匝、即ち火院と成る。

供養品第五

無動金剛座印明第一

平(たいら)かに定の掌を舒べて慧の背を承けよ　行人想へ金剛座となると
座の上に更に所生の印を安せよ　一切の聖者皆な隨喜す、
明を誦して曰く　唵(ランカウムン)嗜哈吽嚩(バザラ)日羅二(ソニバンウムバッタ)合泙徐梵吽泙吒中音
此の明印を以て住處を加持すれば、金剛不壞の地となることを得。即ち地上に於て金
剛座ありと想へ、便ち如來所生の印を以て諸佛菩薩を安置し、金剛座の上に於て便ち
此の印を廻して諸聖に供養す。

一切如來所生印明第二

金剛堅固にして內に相ひ叉へて　檀慧竪て開け所生の印なり
此の印をば名けて功德の母となす　佛法僧寶其の中に住す
明王及び本尊を請召するには　此の秘印を結べ皆な雲集す
便ち此の印を廻して諸尊に獻せよ　即ち閼伽と成て佛に(ニツ)供養す
曩麼(ナウマクサラ)薩(バ)嚩(ボダ)母駄冒地薩(サツ)怛嚩(バ)二(ナンア)合喃阿(ア)引摩(マラ)羅尾(ビキヤラ)迦羅二(タヂヤニアラセイソ)合多帝(ヂヤニ)餌(アラセイソ)徐阿羅逝(セイソ)莎嚩(ワ)二(カ)合訶

(一)供養すの下、一本に「明を誦して曰く」の文あり。

便ち此の如來所生の印を以て想へ、閼伽となして諸佛菩薩諸尊賢聖に奉獻すと、常に
此の法供養を作すべし、(一)是れ速かに成就を得ん。復た不動聖者を觀じて本位に住す
と、前の灌頂の印明を用ひて本尊に奉獻し、即ち根本の明を誦すること一遍して、能く
聖者をして歡喜せしめば、速かに圓滿成就するを得るが故に。又た持明行者次に三昧耶
の印を結んで頂上に安置して(印は前に已に說くが如し)即ち想へ、自身本尊の如く八葉の蓮華に乘せ
りと、手に香爐を執て即ち三業寂然にして亂すことなからしめ、精舍に往詣し道場の
門に至り、三たび吽字を稱して諸聖を驚覺して、精舍に入り已て(已上三昧の印の後に安す)
次に常の如く禮懺し閼伽を奉獻す、是の念を作すべし、我れ今全身を捨て十方三世の
常住三寶の道場の衆會に供養すべし、唯だ願くは一切の諸佛菩薩、我れ等に乞與へて
大加持を作し給へ、最上に成就し金剛薩埵の悉地を成せんことを得しめ給へ、攝受すべ
きが故に加護を請求すと、是の如く三たび白して便即ち云云。又た杵印を以て前の如
く結界して本尊の座を加持すべし、如來所生の印を以て諸佛菩薩に奉獻して、每日の三
時に如法に供養せよ。或る時は妄念して法則を闕少すれば即ち三昧耶を犯す、先づ大
輪金剛の明を誦し、及び大輪の印を結んで用ひて其の咎を除き、其の過罪を謝すべし。

(一)是一本に念誦の二字に作る。

(一)大輪金剛懺悔印明第三

是の如く法に依て結護し已るべし　皆な三昧耶を闕犯することあるも

密に蘇摩金剛の明を持して　四時の諸の過咎を懺悔せよ

戒方進力内に相ひ鉤して　六度竪て合せよ金剛輪なり

此の明印を結んで頂上に安し　右に旋すこと三帀して其の過を謝せよ

明を誦して曰く　曩麽悉底哩耶四合地尾迦南薩縛怛他誐多喃唵尾囉耳尾囉耳摩訶斫迦羅嚩日羅二合薩哆薩嚩莎囉帝莎囉帝怛囉二合曳怛囉二合曳尾馱摩徐三盤若徐怛囉二合摩底悉馱阿紇哩曳怛唎二合藍引莎嚩二合訶

(二)持眞言者結護し了るべし、皆三昧耶を闕犯することあらば、當さに此の印を結び頂上に安すべし、明を誦すること三遍或は七遍、右に旋らすこと三帀して、衆過を懺謝して然して後に本尊の明を念誦せよ。

無動金剛滿足印明第四

虚心合掌して甲相ひ拄へよ　是れを本尊滿足の印と名く

種種の供養及び塗香　焚香燈明並に飲食　上妙の供養吉祥の事　倶に此の印を

(一)縛し金剛懺悔輪明印、印は内縛小二三空・二中・内三大二合す即ちて常第ての印にしの大金て言輪印に非ず立股眞は常の如し。

(二)持眞言云云已下の六句は頌文か、但し謝の字恐〻は剩字。

持すれば皆な圓滿す。

明を誦して曰く　曩麽悉底哩也四合陀嚩二合蘖哆喃薩嚩怛他蘖哆喃暗尾哆哩摩訶嚩日囉二合薩怛薩怛莎囉帝莎羅帝莎嚩訶

復た此の明印を以て想へ、水陸の珍寶及び寶山等の物、海中妙寶摩尼華樹王等、悉く皆な主の所攝なきを、我が福德力と諸佛の加持力とを以て、願くは此の香華雲、諸佛の刹土に遍滿し、一切の諸佛菩薩に供養して上願を滿足せんことを。

塗香供養印明第五

印は前の如し、明を誦して曰く　曩麽悉底哩三合也陀嚩二合蘖哆喃薩縛怛他蘖哆喃阿三摩彥度怛謎(一)素彥馱嚩底薩頗二合羅嘔輪哦哦喃摩呼那曳泥去尾薩嚩嘌他二合莎馱徐莎嚩二合訶

燒香供養印明第六

明を誦して曰く　曩麽悉底哩三合也陀嚩二合蘖哆喃薩嚩怛他蘖哆喃唵阿蘖(二)哩(三)始弃始弃南薩嚩怛度麽始弃莎嚩二合訶

華供養印明第七

明を誦して曰く　曩麽悉底哩三合也(四)陀嚩蘖哆喃薩嚩怛他蘖哆喃阿嚩路枳哆二合摩訶布

(一)素彥馱　高本に蘇彥引度怛謎に作る。

(二)哩の下、高本に二合の注あり。

(三)始弃始弃南　一本に始弃南始弃南に作る。

(四)陀縛の下、二合の註脱するか、下の二明も亦た同じ。